
紺碧の大甲虫

そよ風ミキサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紺碧の大甲虫

【Nコード】

N7584U

【作者名】

そよ風ミキサー

【あらすじ】

「そこは、誰かが望んだ新たな開拓地。地獄となるか、楽園となるかはあなた次第」

ログアウトした筈なのに、何故かプレイしていたゲームに酷似した世界へとやって来てしまったカブトムシの異形姿のプレイヤー、ツエイト。

元の世界へ帰るため。そして、はぐれた友人を探す為、彼は行く。

「」の作品は同名で「Arcadia」でも投稿させて頂いております。

プロローグ（前書き）

はじめまして。

初投稿ですので、何処か至らぬ点があるかもしれません。その際は
ご指摘ください。

ブローグ

「そこは誰かが望んだ新たな開拓地。地獄となるか、楽園となるかはあなた次第」

そんな謳い文句で販売されているゲームがある。

「ネオ・フロンティア・オンライン」通称NFO。

今では世に数多と存在するゲーム、VRMMORPGの中において、稼働当時から10年近く経つが未だに人気の衰えない作品だ。

VRMMORPG、正式名称ヴァーチャル・リアリティ・マッシュフリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロールプレイングゲーム

それは、電腦技術で構築された仮想世界を五感を以て疑似的に体験する事が出来るゲームである。

それが世に出た当初は、アミューズメント施設だけでの運用だったが、技術の進歩と需要の多さにより現在は家庭でもプレイする事が出来るよう小型化されていたのだ。

それがVNV（ヴァーチャル・ニューロヴィジョン・システム）。使用の仕方は至って簡単、ネット回線に接続されたニューロバイザーと呼ばれる専用のバイザー型の機械を頭にかぶって電源を入れ、ゲームをスタートさせるだけだ。

すると装着した対象者の網膜に特殊な光が投射され、網膜を介して脳に送られたそれがプレイヤーの意識を仮想世界へと送り込む。

電腦技術によつて構築された仮想現実世界。 電腦技術の発達に伴い、人類が新たな可能性を見出した世界だ。

歴史をさかのぼれば、元々開発された当時は軍事運用の一環として生み出されたものだが、いつしかそれは徐々に一般社会にも普及され、今では娯楽にまで浸透したありふれた技術の一つとして世間に認知される事となった。

そんな技術で生み出された物の一つがNFO。

それは、様々な種族が存在する広大な世界を舞台に繰り広げられるファンタジーの世界観を基にして制作された。

長寿ゲームとしてその手の界限では有名で、幾度のヴァージョンアップを行い未だにユーザーの数は緩やかにではあるが増加している。

長年ユーザー達から好まれているのには、さながら現実世界にいるかのように振る舞えるプレイヤーの自由度の高さもあるが、このゲームの特色でもある種族の数だ。それがヤケに多いのだ。

初期に選択できる種族の種類と、後に何らかの条件やクエストで変異出来る種族の合計数は、確認出来るだけで1000に上る。

更に、種族によつてはその種族でしかない職業もあり、幅広い可能性を秘めている。

使用出来る種族は人型からモンスターまで多種多様。近年では収まって来ているが、前までは毎年種族のデータが度々追加更新されていた事があり、プレイヤーはその度に新種が現れたと喜ぶ者、勘弁してくれと嘆くもの等様々な反応が出た。

これ程までに過剰な種族数の所為か、妙な方向に火がついたユーザーの中には全種確認する事を目標にしている者までおり、その手のネット掲示板では新種の確認や、変化の条件等の情報を求める声が後を絶たない。

逆にデータの無駄遣いでは？ との声も挙がっており、多種多様と言うにはいき過ぎた種族数を内包したその世界をある者は「電脳世界のサラダボウル」と揶揄した者もいた。

この仕様にはネット掲示板では賛否両論あったが、それすらも糧にするだけでも言う様に、NFOの人気は緩やかに高まって行く。

現実と同じような感覚で、様々な種族になれて、様々な楽しみ方が出来るゲーム、NFO。

この人気は、これからも長く続くであろうと多くのユーザー達が願い、信じていた。だが。

これは、NFOが丁度稼働10周年となる日に起きた出来事である。

場所はNFOの世界南西、そのとある山林地帯の森の中。

あまりプレイヤーが通らない様な鬱蒼と茂る静かな森の中で、赤と青の二体の異形が向かい合っていた。

いずれも、他人が見れば尻込みをしまいそうな程に恐ろしげな姿であるが、その二体から醸し出すものは長年来の友人と会うような穏やかな雰囲気だ。

一体は身長2m前半の背丈を持つ、巨大な槍を持った赤い人型の

クワガタだ。

頭部には鋸状の刃を携えた一对の角が左右側頭部から前に伸びる様に生えており、鎧の様な赤黒い外骨格は木々の隙間から差し込む木漏れ日の光を浴びて、鈍い輝きを放っている。

肩に担いでいる巨大な槍は、持ち主であるクワガタの異形の身の丈以上もあり、穂先にクワガタの顎を模した巨大な刃が、それぞれ螺旋状に捻じれて二本のドリルの様な形状をしている。

そしてもう一体は、一本の巨大な角を生やした人型の青いカブトムシ。

此方はクワガタの異形よりも大きく、頭頂高だけで3m超、角を含めれば4mを超える。それはもはや巨人と言っても差支えない巨体だ。

彼の体を覆う重厚な外骨格は、クワガタの異形と相反するかのように深く暗い青色で染まっている。

彼ら二体はタイプが違うが、共にハイゼクタ と呼ばれる種族だ。

初期のキャラクター作成で昆虫人^{インセクター}という虫型の亜人種族を選択し、プレイ中に専用のクエストをクリアする事で変異する昆虫種族の変異種である。

その大本となる昆虫人は、緑がかった肌と額から生やした一对の触角を持ち、体の所々に多少外骨格がある以外は人間と大して変わらない姿をしている。

だが、ハイゼクタ はより虫に近い姿をしており、例えるのならば特撮ヒーロー等に出てくる怪人のそれである。

昆虫好きや一部のファンからは割と好まれるのだが、モンスター色の強い種族でかなり面倒な変異条件という事もあってか、全体的に見ればその数は少ない。

そんな種族でプレイをする彼ら二人は、いずれもNFOがサービ
スを開始した当初からプレイしている古参組だ。

赤と青のハイゼクタ コンビと言えば彼らの事、それ位NFOプ
レイヤー達からその存在を認知されている。

だがそんな二人の長い付き合いは、クワガタの異形から告げられ
た一言によって終わりを迎えようとしていた。

「ツェイト、俺は今日限りでNFOを引退する」

クワガタの異形からそう言い放たれたカブトムシの異形、カブト
ムシ型ハイゼクタ ツェイトは鉄仮面の様な顔を一瞬キョトンと
させたが、言われた言葉の意味を理解して眼を見開いた。

いきなりどうしたんだ、話が急過ぎる。

何せ一人で森の中をのんびりとぶらついていた所を久し振りに口
グインして来た相方に突然呼び出され、いざ会ってみればいきなり
の引退宣言。寝耳に水も良い所である。

身ぶり手ぶりを加えながら訳を聞こうとするツェイトの姿に、ク
ワガタの異形ことギラファノコギリクワガタ型ハイゼクタ のプロ
ムナードは苦笑し、手に持った槍を地面に突き刺して暗い顔で答え
た。

「……リアルの仕事の都合でな、これ以上続けるのが難しくなった

んだ」

そう言われて、ツェイトは思い当たる節があったため得心した。ツェイトもプロムナードもお互いの詳しい事は知らないが、現実世界では社会人だと言う事は知っている。二人は学生時代の時ほどNF0をプレイする時間は無くなっていき、プロムナードはそれが顕著だった。ここしばらくの間、プロムナードのログインの頻度が激減しているのだ。

今では月に1〜2回ログイン出来れば良い位。その状況を察するならば、それほどリアルでの事情が立て込んでいると言う事になる。

成程、それなら仕方が無い。ツェイトはほんの僅かではあるが、その大きな肩を落とした。

初めてNF0をプレイした頃に出会ってから今までコンビを組み続け、サービス終了のその時まで続けるぞ、とまで意気込んだ仲だっただけに、この事実は非常に残念なものだった。

それがよりによって、NF010周年のこの日となると尚更である。

「悪いな、俺も今回の仕事の件が無ければ、もっと続けられそうだったと思っただが……」

頭部が全てマスクの様な外骨格で固められている為、表情の分かりにくい顔をしているツェイトだが、その微かな動作と雰囲気で見つけたプロムナードは、自分の急な宣言について謝った。

しかし、それにツェイトは「とんでもない」と首を横に振る。

プロムナードは仕事の都合上ゲームとの両立が難しくなってきたという理由から、これを機に引退する事を決めたのだ。ゲームの為

にリアルを蔑にする訳にはいかない。彼には彼の生活があるのだ。故に、プロムナードが謝る様な非は無い。ツェイトの心情が態度に出ていたのか、プロムナードは苦笑した。

「相変わらずお前は律儀と云うか何と云うか……そんなんじゃない他のギルドに入団した時に面倒だぞ？　というか、今後俺がいなくなつてソロになるんだらうから、他のギルドやパーティーから勧誘が来るんじゃないか？」

そう言われたツェイト、そしてプロムナードのレベルと実力は、NFO中でもかなり上位に位置している。

互いが互いに、このゲームがサービスを開始した時から10年近くも続けていたのだから当然の結果かもしれないが。

だがしかし、プロムナードの問いにツェイトは否と答える。

「自分に合わせられるのはお前くらいじゃないのか」と。

それに照れたのか、言われた本人であるプロムナードは少しはにかんだ。

「中々嬉しい事を言ってくれるが、そういうのは女性から言われたかったな」

「それに関しては俺も同感だ」とツェイトが答えると「まあそうだろうな」とプロムナードが笑う。それにツェイトも釣られて笑いだし、静かな森の中を二体の異形の笑い声が響き渡った。

「フウ……じゃあそろそろ俺は行くかね」

しきりに笑い合い、ひと段落した所でプロムナードは地面に突き刺していた槍を引き抜き、肩に担いでログアウトの準備に入った。

帰り支度をし始めるプロムナードにツェイトは「何だ、もう行くのか？ 随分と慌ただしいな」と名残惜しそうに問いかける。

プロムナードは「売れっ子は色々忙しいんだよ」とおどけた仕草で答えた。もう二人の間に最初のような湿っぽさは無い。別れは気楽に、それ位が後腐れが無くて良い。これはツェイトもプロムナードも同意見だったのかもしれない。

やがてプロムナードの足元から光が立ち上り、その体を覆い始めた。ログアウトが始まったのだ。

徐々に足元の光は強くなり、まさにログアウト目前。そんな最中にプロムナードは、ツェイトに別れの言葉を投げかけた。

「じゃあな相棒。縁があつたら、また一緒に組もう」

笑っているのだろう。髑髏に似た顔を歪めているプロムナードの体は、槍を持つ手とは逆の手を振りながら光と共に消えた。

これがNFOプレイヤー、プロムナードの最後のログアウトだ。

ツェイトは、プロムナードのいた場所をジッと見つめた後にフウツと深く溜息をつき、落ち葉と雑草の広がる地面に腰を下ろして座り込んだ。

引退、か。

プロムナード以外にも、NFO稼働初期からいた知り合いはいたが、それも大分減ってしまった。

仕事の忙しさから止めた者。ゲーム内での人付き合いに疲れた者。その中には、ツェイト達と仲の良い気の置けない友人達もいた。

そんな彼らの様に、自分の相方も引退してしまった。

ツェイトはまだリアルがそこまで忙しくなってきたという訳ではな

いが、何時かは決断を迫られる日が来るのかもしれない。

その時がきたら自分はどうするのか？意地でも留まるか、それともプロムナードや先に引退して行った他の皆の様に自分も静かに後を去るのか。

この楽しい日々がずっと続けば、等というムシの良い事を言うつもりはツェイトには無いが、それでも木心の知れた者達が居なくなるといふのは寂しかった。

……帰るか。

明日は休日、今後の事は明日にでも回して今日はぐっすり寝てしまおう。ツェイトは静かにその場からログアウトする事にした。

ツェイトの姿が光と共に消えていき、再び森の中は静寂に包まれていった。

第1話（前書き）

前話と比べると文字数が倍以上に増えていきますのでご了承ください。

それと、前話を見返していた際どうにも解せない点があった為、いくつか文字の表現を変更しましたのでそちらもよろしく願います。

第1話

ツェイトの視界に映ったのは、いつもの自室ではなく山林の中だった。プロムナードと別れた時の場所も山林だったが、そこは雰
囲気も風景も全く違った所だ。

先程ツェイトがいた場所は、昆虫人の集落から少し外れた暗い森の中だったが、それに対して今いる場所は木漏れ日が差し込む明るい森の中だ。

何でこんな所に？ ツェイトは回りを見渡しながらログアウト前の事を思い返す。

ログアウト前に転移系のアイテムを使用した覚えは無いし、何よりログアウトした筈なのにどういう訳か、まだログインした状態なのだ。

その証拠に、今ツェイトの体はNFOで使っていた青いカブトムシ型ハイゼクターのままだ。

だが、ツェイトは此処が何処なのか分からなかった。

色々と気になる所はあったが、ツェイトは改めて再度ログアウトする事にした。

明日の仕事の帰りにでも掲示板で調べれば、この奇妙な現象について何か書き込みがあるかもしれないので、そこで何か分かるだろう。

そう軽い気持ちでゲームを終了しようとしたのだが、そこで異常が起きた。

……ウィンドウが出てこない？

本来NFOをプレイする際、ログアウトをするときは視界にログ

アウト用のウィンドウが表示されるのだが、それが出てこない。つまりログアウトが出来ない状態になっているのだ。

不思議に思いながらも他のウィンドウを展開しようとしたが、どれもツェイトの視界に現れる事は無かった。

他にも様々な機能を起動しようとしたが、そのどれもが発動せず同じ結果となってしまう。

只の故障にしては様子がおかしい。ツェイトは嫌な予感を感じてGMコールをかけようと試みたが、そのコールすら出来ない。

何故だ、どうして起動しない？ ツェイトの心に焦りが出始める。

稼働初期から長い事プレイしてきたが、今までこのような事はツェイトも経験した事が無かったのだ。

……元に戻れないのか？

ログアウトが出来ないという事は、プレイヤーであるツェイトの意識は本体であるリアルの体に戻る事が出来ない。このゲームにおいて己の仮想体であるツェイトの体のままだ。

その事実を再認識した時、ツェイトはある事に気づき全身に悪寒が走った。

なら現実世界にある俺の体は、今どうなっているんだ？

NFOをプレイする際、プレイヤーの意識はニューロバイザーによってNFOの世界に投影され、現実世界にあるプレイヤーの体は睡眠状態になっている。

仮にプレイヤーのリアルの体が危険な状態に陥っている場合はニューロバイザーがプレイヤーに警告、もしくは強制的にゲームが終

了して意識が戻る様になっているのだが、今回はワケが違う。

ニューロバイザーが正常に作動しているとは思えないこの状況で、意識が戻らない状態が続いていたらどうなるのだろう。妥当な所で昏睡状態か植物人間、最悪の場合は……

考えれば考えるほど、思考がネガティブなものになっているのがツェイト自身でも自覚できた。

焦りが不安を生み、その不安は恐怖を呼び寄せ、徐々にその心を蝕んでいく。

だが今すべき事は未知の事態に怯える事ではない、何をすべきかを考える事が必要なのだ。

ツェイトはしばらくその場に立ち尽くしていたが、意を決して歩き出す。

とりあえず、ここから離れよう。

もしかしたら、他のプレイヤーたちも自分と同じような目に遭っているのかもしれない。

この場に留まっても何も始まらないと判断したツェイトは、行動する事を最善と考えてその場から離れる事にした。

プロムナードは無事なのか？

ツェイトは己の相方の事を思い出す。

ツェイトの友人であるプロムナードは、引退宣言をして間もなくログアウトをしたが、その時間帯はツェイトがログアウトした時間と大して変わらない。

それ故に、もしかしたらプロムナードも自分自身と同じような状

況に陥っているのではないのだろうかという可能性が、ツェイトの頭を過ぎったのだ。

無事に戻っていれば良いんだが……

ツェイトは友人の無事を祈りつつ、森の中を進んでいった。

ずしっずしっ重量感のある足音を森の中に響かせて、ツェイトの青い巨体が進んでいく。

道中で体の具合を確認してみたが、通常のNFOの時と変わらな
い様だ。

人間の太腕より倍は太い腕。人間の体ならば軽く掴み上げる事が出来てしまうほどに大きな五本の指を備えた手。頑強な筋肉質の体の上から、重鎧の様な紺碧の外骨格を身に纏った体。

そしてこの体の象徴とも言える、額から反りを作りながら真上へと伸びる巨大な一本角。その形状は、まるで巨大な片刃の剣の様だ。

背筋を伸ばし、両の足で力強く大地を踏みしめるその姿は、カブトムシの巨人と言葉がぴったりだ。それはNFOで使っていたツェイトの体そのもの。

極めつけは角の長さを省いただけでも身長3mを超えるその巨体。昆虫人から初めてこの体に変異した時は、まるで台の上からものを見ているような錯覚に囚われたものだった。

念の為にツェイトは身体能力も確認してみるが、これも一応は問

題なさそうだ。

道中見つけた、大の大人が数人いても持ち上げられないような巨木も雑草を引っこ抜くが如く容易く根つ子ごと引き抜き、それを小枝を振るうように軽々と振り回し、手に持ったまま外見からは想像もできないほどの身軽さで木よりも高い高度までジャンプをする。

体の方に異常は見られない。これならモンスターが出たとしても遅れはとらないだろう、多分。

ツェイトは自身の状態を顧みてそう判断した。

続いてステータスウィンドウを展開しようとするが、他のウィンドウと同様にこれも出現することはなかった。

アイテムウィンドウも起動しないため、アイテムを出す事も所持金を出す事も出来ない。

今のツェイトは文字通り裸一貫。金も無ければ物も無い、頼れる物は己の身一つという事になる。

体が無事だっただけでもマシか。

所持品が一切使えなくなってしまった事は少々厄介だったが、ツェイトは前向きに捉える事にした。道具も重要だが、ツェイトにとっては己の身体能力こそ最大の財産であると考えていた。

体は資本と誰かは言った。体が無事ならば道具も再び手に入れる機会も見つかるだろう。もっとも、それは楽観的見地から見た根拠のないものではあるが。

それにしても、ここはどこなんだ？

抱えていた巨木を、適当な場所にそつと置きながらツェイトは周りを見回す。

見覚えのない風景。そして森から香ってくる草木や土の匂い。自然が生み出す営みが、ツェイトの五感を刺激する。

マップ表示が出来ないため見当がつかないのだが、まあこれも山から下りればいずれ何かわかるだろう。

そこで、不意に遠くから獣と思しき者の咆哮が聞こえた。

グオオオオ……ッ！

何だ？ と雄叫びの聴こえる方向へツェイトは視線を向ける。

種族の恩恵か、ツェイトの目は遙か先まで見渡す事が可能で、簡単に目標を見つける事が出来た。

その先にある木々は乱暴に薙ぎ倒され、その折れた木々の隙間から物音の原因たる存在がツェイトの視界に映った。

それは熊に酷似した、5m大とツェイトよりも巨大な獣だ。

赤茶色の毛皮を纏い、牙をむき出しにして怒り心頭と言った顔つきで疾走し、道行く木々をその巨体でなぎ倒していく。ツェイトはその獣に見覚えがあった

ワイルドマックか。

NFOでは初級と中級辺りのレベルのプレイヤー達にとって非常に厄介な障害として一部の森のフィールドに立ちはだかるモンスターだ。観た事のないフィールドだが、どうやらモンスターまで変わってしまったわけではないらしい。ツェイトは視線の先で暴れまわっているワイルドマックを見て安堵した。

ワイルドマツクは鼻が利き、縄張り周辺に足を踏み入れれば侵入者めがけて襲いかかってくるという設定がされており、ツェイトが先程巨木を引き抜いて振り回していたのが原因で荒れているのだ。

木を振り回しているツェイトに気づいたワイルドマツクは、自身の縄張りが脅かされているのだと思い、それで荒れているのだろう。相変わらず良く出来たものと、ツェイトは驚く事無く他人事のようにはワイルドマツクの暴れっぷりを見ていた。

ワイルドマツクの進行方向はツェイトのいる場所。そこへまっしぐらに突っ込んできている。相手は、自身の縄張りを荒らしていると思しき侵入者を既に察知しているのだろう。

ツェイトを獲物と見定めたワイルドマツクは唸り声を上げながら木々をなぎ倒し、ツェイトに向かってまっしぐらに突っ込んで来る。

それに対してツェイトは静かに構えを取る。

ツェイトにとって、ワイルドマツクは大した敵では無い。NFOをプレイしていた頃は、適当にあしらえる有象無象の一体にすぎなかった。それ故の余裕だ。

なのでにツェイトに焦りは無い。いつも通りに叩いてしまえば良だけの事だと思っていたからだ。

落ちていて構えるツェイトに接近してきたワイルドマツクは、目と鼻の先まで近付き、鋭い爪と牙で襲いかからんと飛びかかってきた。

しかしツェイトはそれよりも一手早く、腰を低く屈んでワイルドマツクの懐へと踏み込み、その顎に向かって大きな拳を振り上げる。

振り上げられたツェイトの拳はワイルドマツクの顎にももの見事

直撃。これがNFOならば、倒れたモンスターはそのまま光の粒子になって消えるもののだが、結果は違った。

ツェイトの拳は、脆い発泡スチロールを叩き割るが如く容易にワイルドマツクの顎を貫き、頭部ごと粉碎し、その内部に詰まった血肉と共に、頭蓋の破片と思しき白い硬質物を飛び散らせた。ツェイトは一瞬何が起こったのか分からなかった。

頭部をかち割られたワイルドマツクはツェイトへと飛びかかろうとした態勢のままだった為、ツェイトに抱きつく様に押し掛かって来た。

ツェイトは倒れこんで来たワイルドマツクを慌てて振り払い、呆然とそれ見下ろした。

当初はビクビクと痙攣を続けていたそれだったが、時間が経つとそれも動かなくなり、生命の灯が完全に尽きた事を告げた。

NFOは現実世界に限りなく似た感覚で遊ぶ事が出来るが、その中において現実と違う所も色々ある。

その内の一つが、流血等のグロテスクな表現が出ない事だ。

プレイヤーは攻撃を受ければ多少の衝撃が来るだけで、痛みはおろか傷すら出来ず、ライフポイントが無くなれば光の粒子となってセーブした場所へと転送される。

NFOは多くの年齢層をユーザーに想定したゲームだ。その対象の中にはそういった表現を受け付けない者だって出てくるだろう。制作会社のコメントをそのまま言うのなら、多くの者達がプレイ出来る様にするための仕様らしい。

しかし、今ツェイトの手によってワイルドマックは、光の粒子では無く死体になった。本来のNFOならば有り得ない事なのだ。

粉碎面から覗かせる赤い肉と白い骨。そして未だに流れ続けている夥しい量の赤い血液。

そして未だ手に残る、肉を潰し骨を砕いた不快な感触とワイルドマックの返り血。徐々に広がる生臭い鉄の臭い。

その光景は酷く生々しく、そして現実的だった。

何だこれは。どういう事だ？

自分のいる場所はゲームの世界の筈、だがそれならば目の前のこの死体はなんだ？

今までツェイトは、自分はNFOというゲームの電脳世界に閉じ込められているものだと思っていた。

しかし、この生々しさはNFOではあり得ないものだ。いくらなんでもリアルすぎる。リアルを追及して作られたNFOだが、その世界においてこのリアルさは受け入れられざるリアルさだ。

確かにNFOはリアルさも売りの一つではある。しかし此処まで生々しいリアルさは無かったのだ。

ゲームの世界じゃ、ないのか……？

自分で呟いておきながら、その言葉の内容が理解し難かった。

仕事の疲れで夢でも見ているのか？ 出来ればそうであって欲しい。そうツェイトは願っても、それは背け様のない現実としてツェイトの前に付きつけられている。

認めたくない。認めてしまいたくない。認めてしまう事が恐ろしい。

だが、ツェイトはもう認めるしかない。
今の自分が、本当に実在する世界に来てしまっているのだと。

それを身を以て知った途端、ツェイトは恐ろしくなってその場から駆けだした。自分が殺したワイルドマツクの死体から眼を背けるように、自分が殺したと言う事実を否定したいかの様に。

俺は、俺は一体、何をやっているんだ。

息が切れる事もなく、疲れる事もなく、ツェイトはひらすら森の中を走る。枝が体にぶつかるうが、木の根が足に引つかかるうが気にしない。ぶつかる者は全て壊し、引き千切っていく。その時ばかりは、ツェイトは少しだけ自身の身体能力が恨めしく思えた。

暫くの混乱の後、ツェイトは少しずつ冷静さを取り戻し、現在はトボトボとつたない足取りで森の中を歩いている。

森の中を進むツェイトの足取りは重かった。先ほどのワイルドマツクの件もあるが、自分自身の置かれている今の状態について、それがツェイトの歩みを鈍らせていた。

今のツェイトは一個の生物として確かに存在している。体が不思議と違和感もなく動かせるのは10年と言う経験がそうさせているのか、それとも……

分からない事が多すぎて、とてもではないが良い気分とはいえない。

そんな鬱屈とした気分が苛まれているツェイトに耳に、水の流れる音が聞こえた。チヨロチヨロと流れるものではない。大量の水が流れる音だ。

川か？

ツェイトは歩みを速めて音の元へと進む。木々を掻い潜り、苔の生えた岩を危なげなく歩いて行くと、程なくして予想通り川が見えた。

川幅は広く、表面上では穏やかに見えるその川の流れるは、時折川上から流れて来る木の葉が結構なスピードで通り過ぎていく事から見た目に反して中々早い事が伺える。

体が疲れている訳ではないが、腕や体に付いたワイルドマツクの返り血を落とす事も兼ねてツェイトは一息つく事にした。

早速ツェイトは川の中に入ると、思ったよりも深さがあるらしく、進めば進む程ツェイトの体は川の中に沈んでいく。

川の流れるは速いが、体が重い所為かその歩みは安定しており、体は根が生えた様にビクともしない。

それを良い事に、ツェイトは川の中に体を浸かって体に付いた返り血を手でこすって落としながら今後の方針について考える。

まず一つ目は元の世界に帰る方法を見つける事だ。

リアルでのツェイトは何処にでもいる平凡な両親のもとで、少ない愛情を注がれて育てられた日本人男性の社会人だ。今まで両親とは多少の衝突はあったものの、両親を心配させるのは良い気がしなかった。

それに社会人になったら、ささやかながらも親孝行の一つくらいはしてやりたいとも思うし、仕事に追われる日々を過ごしてはいるが、何だかんだで今の生活を気に入っているのも事実。

NFOをプレイしている時はリアルの煩わしさが忘れられて気が晴れるかと思っていたが、こうして離れてみると実感する元の世界の有難味と恋しさ。ツェイトは望郷の念を抱き始めていた。

そしてもう一つは、プロムナードと合流する事。

尤も、これはあくまでプロムナードが此処に来ていた場合に限る話なのだが。

ツェイトはこんな時にチャット機能が使えたらと思うと歯がゆさを感じ、せめて確認だけでも取ればいいのだが、とぼんやりと川の流れに視線を向けていると、上流から何かが流れてきた。

流木……じゃないな。

よく見てみるとそれは人、いや、正確には違う。上流から流れて来たのは虫の亜人、昆虫人だ。

ぐったりと力無く川の流れに身を任せて流れているので、ツェイトは慌てて昆虫人の元へ駆け寄った。

女の子？

流れて来た昆虫人の体を掴んで手繰り寄せたツェイトは目を瞬かせた。

短めのヘアスタイルの為、一瞬少年に見えたが、水で体に張り付いた服が描くラインは、未熟ではあるが女性特有の丸みを帯びたそれだった。

ツェイトは両の手で少女の体を川から救い上げる。まるで綿毛を摘み上げる様な軽さに一瞬驚くが、自身の怪力が原因なんだろうと納得したツェイトは少女を横抱き 通称お姫様抱っこの態勢で川岸へと連れて行った。

比較的平らな岩の上まで運んでそつと寝かせ、ツェイトは手を少女の口に優しくかざす。

生きている。

外骨格で覆われているにも関わらず、少女の微かな呼吸をツェイトの手は感じた。

そして次にどうするべきかと悩む。

溺れた者に濡れた服を着せたままにしておく体温が徐々に下がり、弱らせる事になるとは何かで聞いた事があるのだが相手は少女、裸に剥くのは忍びない。

心苦しいが、少女に対して今出来るのは寝かせてやる事位しかツェイトには出来なかった。

少女の体や衣服には所々に切り傷らしきものがあり、左腿に何かが刺さったと思しき跡が見えて少し気になるが、どうやら致命傷に至るものは無いらしい。

その証拠に呼吸は安定しており、少女の胸は規則的に上下している。この程度ならば昆虫人の自己治癒力ですぐに元に戻るだろう。

NFOの設定通りならば、昆虫人の生命力は亜人の中では比較的高い部類に入り、毒などにも抵抗力があるのでかすり傷程度ならばそう心配するものではない。

ほつと短く息をはいてツェイトは安堵するが、最初に見つけた時から少女に対して違和感を感じていた。

少女の外見は人間に換算した年齢でおよそ10代後半。背丈は160?後半と言った所だろうか。

薄い緑色の肌を持ち、ボーイッシュなヘアスタイルの黒髪を携え

たその頭部の額からは、二本の触覚が上へと伸びている。

身に付けているものは、上半袖の巫女服にも見える和風の服装、ヘアスタイルも相まって少年の様だ。

其処までならば普通の昆虫人となんら変わらないのだが、此処からが違った。

顎やこめかみ、手足は肘先、膝下が黒い外骨格で覆われているのだ。一見するとガントレットやブーツに見えなくもないが、関節部分を覗いてみるとその黒い硬質物が肌と一体化しているのが分かる。

通常昆虫人の外骨格のある場所は肘や肩等の一部にのみ限られる。

だがこの少女はその常識に当てはまらない。それに、体中至る所に備わった武具の様な外骨格はまるで

だ。
ハイゼクター……いや、ハイゼクタ に近づいた昆虫人みたい

事の詳細は分からないが、取りあえずツェイトは近くの岩に腰かけて少女が目を覚ますまで待つ事にした。

自身の外見がアレなので、最初は警戒されるかもしれないが、そこは話して分かってもらおうしかない。

せっかく出会った現地人、しかもツェイトと同じ昆虫種族だ。会話をするに当たって他の種族よりかは多少理解されやすいだろう。

このチャンスを逃すまいと、いかにして目が覚めた後の少女に話しかけるべきかと思いついて、ガチャガチャと金属同士がぶつかり、擦れ合う音が聞こえてきた。それも複数、徐々にこちらへと近づいて来ている。

方角は川の上流、少女が流れて来た方向からだ。

彼女の仲間が探しに来たのか？ そんな期待を込めてツェイトは上流を見た。

やってきたのは深緑の衣装を身に纏い、その上から軽鎧を装備してフルフェイスのマスクを被った者たちだった。その外見は、特殊部隊という言葉が一番しっくりくる。NFOでは見た事のない服装だ。

この娘の迎え……なのか？

しかしやってきた集団の姿を見れば見るほど、どうも面倒な事になりそうな感じがしてならない。

皆腰や背には剣、槍、弓など様々な武器を持っている事からどこかの兵士なのかもしれない。

兵士と思しき者達は、ツェイトの姿を確認した途端動きを止め、携帯していた武器に手をかける。ツェイトが妙な動きをしようものなら、何時でも抜けるようにしているのだろう。

いくらなんでも、いきなり訳も分からずこんな真似をされるのは良い気がしなかったツェイトは、兵士達に待つてくれと声をかけた。

ツェイトが喋ると兵士たちがビクツと僅かに動いた。それは何処か驚いたような反応にも見えるがツェイトは気にせず話し続ける。貴方達は誰だ？ この少女の知り合いか、と。

ツェイトは事を穏便に済ませられるよう努めて丁寧話しかける。これがもし何かの誤解で警戒されているものなら、話して解決できるに越したことはない。

しかし兵士達から返事はかえって来ない。

考えてみれば、兵士が自分達の目的を早々口にするようなマネはしないだろう。ゲームや漫画では、この場合は平気で相手がつい話してくれる場面が見られるが、実際はそうはいかないようだ。

良く教育されていると言えば聞こえはいいが、ツェイトにとってやはり辛いものだった。

ツェイトが再度話しかけようとしたその時、ツェイトの首筋にガキンツと堅いモノがぶつかり足元に落ちた。

視線を移すと、それは矢だった。飛んできたであろう方角に目を向けると、いつの間にもいたのだろうか兵士がツェイトに向かって弓を構えていた。

外骨格のおかげで傷一つ付いてはいなかったが、もし刺さっていたらこの場合どうなっていたのか？

NFOの場合だったならばHPが減るだけで終わるが、現実と同じようにモンスターも死んでいくこの世界では、当たり前が悪くて死ぬ事ももしかしたらあり得るのかもしれない。

相手は此方の意思などお構いなしで、端から話す気などないらしい。

兵士達は携帯していた武器を抜き、何時でも攻撃できるように構えてきた。

どうして？ そんな栓無き言葉がツェイトの頭をよぎるが、混乱している暇は無い。

どうする。戦うのか？ だけど……

チラッと、今だ眠り続けている少女を一瞥する。兵士達の態度を見る限りは、この少女も彼らの手に渡れば酷い目に遭わされてしまうかもしれない。なので兵士達を敵、と仮定したのだが……

駄目だ、この娘を巻き込むわけにはいかない。

これが一人だったならば戦っていたかもしれない。しかし、今は気絶した無防備な少女がいる。彼女を庇いながら戦える自信が、今のツェイトには無い。

仮にこのまま戦ったとしても、その最中に少女が兵士の手に渡ってしまつたらどうしようもない。

ならば見捨てるか？ 出会って間もない、話すらしていない少女だ。そんな小娘を助ける必要が今、何処にあるというのだ？

もしかしたらこの少女は、何か罪を犯して兵士に追われているのかもしれない。

そんな者を庇ってみろ、共犯と見なされて犯罪者の仲間入りだ。

そんな言葉がツェイトの耳元で囁かれたような気がした。だが……

…

……駄目だ。見捨て、られない。

ツェイトの良心がその選択を拒んだ。

見捨てるつもりならば、あの時助けなければ良かったのだ。しかし時すでに遅く、ツェイトは助けた少女に対して少なからずとも情が湧いていた。

これがリアルの世界だったならば、もしかしたらツェイトの行動は変わっていたかもしれない。救いの手を求める者に対して、多くの大衆に紛れて哀れみの眼差しを差し向けるだけで終わっていたか

もしれない。

しかし今ツェイトのいる場所は、およそ日本の常識や法律の通用しそうな場所とは思えない。それでいて自身の体は人間では無いときている。

そんな状況ならば、いつそのこと自分の感情に素直に従って行動したって良い。予想外の事態が重なった事で、ツェイトは理性よりも感情を優先させるという結論に至った。

助けよう。

これは、ヒーロー気取りの愚か者による自己満足なのだろうか。いささか情動的だが、自分の目的を忘れているわけではない。その過程で少女を助けただけだと考えてしまえば良いだけだ。そう、問題は無い筈だ。そう己に言い聞かせて、ツェイトは不安に駆られた心を奮わせる。

それにここでこの娘を見捨てたら、プロムナードに合わせる顔が無い。

もしかしたら、それが一番の理由だったのかもしれない。

「総員、行動開始」

感情のこもらぬ声でリーダーと思しき兵士が号令を下す。

それに反応して、兵士達がツェイトに向かって駆けだす。各々の武器を持ち、目標の敵　ツェイトの体に突き立てようと。

兵士たちが動いてからツェイトの行動は早かった。

急いで少女を抱き上げ、川下の方へと体を向ける。そして腰を低くして構え、脚部に力を込めた。

今ここでやる事は戦う事ではない、逃げる事だ。ならば……

ツェイトは渾身の踏み込みで大地を蹴り、駆けだした。

いや、それは飛んで行ったという表現のほうが近いだろうか。

ツェイトが蹴った地面は大爆発を起こした様に地盤ごとにはじけ飛び、周辺に岩の塊を飛ばしていく。飛び散った岩つぶては速度も相まって凶悪な弾丸となって兵士達に襲いかかった。

さながら投石の散弾版とでもいう様な勢いで岩のつぶてが兵士たちへ飛散して行き、多くの兵士たちはその岩に直撃し、くぐもった呻き声を上げながら吹き飛ばされて散々な目に遭っていた。

そんな事態を引き起こした当の本人であるツェイトは、少女を抱きかかえながら蹴った勢いでロケットのように跳んでいき、兵士達がいる場所からさっさと離脱していた。

ここまでくれば、大丈夫か？

ツェイト達が今いる場所は、兵士たちと対峙した川から大分離れ

た森の中。

辺りを見回し、兵士がいないか注意深く確認する。

兵士達から逃げだ出したツェイトは、身体能力にモノを言わせて山を駆け抜けた。

道中でうっかり腕の中にいる少女を落つことしそうになってヒヤリとさせられたが、それ以外は兵士たちの追手が来る事もなく、特に問題はなかった。

逃げる際、行き掛けの駄賃に一発お見舞いしたのが功を奏したようだ。

追手がいない事を確認してまずはホッと一安心。

空を見上げて太陽の位置を確認する。この世界に来たときは真上に位置していたが、今森の木々の隙間から見える太陽は大分傾いてきている。半日も経っていないというのに、ツェイトには長い時間が過ぎたように感じられた。

ツェイトは適当な地面に腰掛け、本日何度目か分からない深い溜息をついた。

何で、こんな事になったんだろうか。

気がつけばゲームの世界とは明らかに違う、現実とは違うがリアルな世界。

自分自身もゲームのプレイヤーではなく、実在する世界で、一個の生命体として生きている。

呼吸もするし、五感もしっかりとある。ここに来るまで、ツェイトというアバターが本当に生きているという事を思い知らされた。

木の根を枕代わりにして寝かせている少女の側に座り、その寝顔を見た。

少女はあれから変わらず静かに寝息を立てながら眠り続けている。

あれだけ動き回ったのに、それでも目を覚まさない。流石に此処まで眠り続けられると、どこか具合が悪いのかと心配になってしまっが、どうやらそれは杞憂だったようだ。

渦中の少女がようやく目を覚ましたのだ。

「う、うう……んあ？」

上半身を起こし、今だ完全には眼が醒めていない寝ぼけ眼のまま、だらしなく口を半開きにした状態でボーっと辺りを見回している少女は、整った顔立ちをしているせいかコミカルな印象を与えた。

ふと、ツェイトと視線が合った。

「んー………えッ！ うわあ！？」

徐々に思考が覚醒するとギョツとした顔する。そしてその次の瞬間、少女は悲鳴を上げて飛び起きた。

目覚めた時、いきなり見えず知らずの者が近くにいたら多少なりとも驚くものだが、この場合はツェイトの姿に問題があったのかもわからない。

傍から見れば大魔神のようなおっかない姿のツェイトだ。目覚めて最初にそんなものを見るのは、慣れない者には少々インパクトが強かった様だ。

距離を取って警戒している少女に、ツェイトは座ったままの状態
で大丈夫だ、と両手を上げて敵意が無い事をアピールする。

「……な、何だ……お前は？」

少女は先ほどの寝ぼけ顔から一変して、凜と引き締まった顔付で
ツェイトに身構えながら問いかけて来た。

緊張しているのか、少女の声は上ずっていた。

鋭く睨みつけて来る白目のない、黒一色の黒曜石の様な眼。まだ
乾いていない服と同じく、若干湿り気を残した黒く艶のある黒髪。
額の二本の長い触角は、ピクピクと忙しなく動いている。

問われたツェイトはどう答えるべきかと考えあぐねる。

NFOのプレイヤーで、ゲームの世界に閉じ込められましたただな
どと馬鹿正直に説明して、少女が理解するとは思えない。

そこでツェイトはNFOの設定に沿って自分の事を説明したのだ
が……

「ハイゼクタ？ そんな種族、聞いた事ないぞ」

少女は警戒しながらもツェイトの話を聞いてくれたが、ハイゼク
タを知らないと答えた。

これは何となくだがツェイトは予想していた。ハイゼクタを知
らないのも無理はないかもしれない。

ハイゼクタという種族は、かなり特殊な条件下で昆虫人から変
異するのだが、ハイゼクタのNPCは一切存在せず、プレイヤー
しか変異する事が出来ない。いわば希少種族と言っても良い。

NFO中でもハイゼクタを知る昆虫人は、ハイゼクターへの変

異イベントでのみ登場する昆虫人一人しかいないのだから、それを現実にして考えてみれば少女が知らないのは仕方が無いのだろう。故にツェイトは知らないのならばとりあえずそれは置いてくれ、とだけ答えてこれまで起きた事を掻い摘んで話した。

川で少女を拾った事。そしてそこで兵士達に出くわし、少女を連れて逃げた事……

少女は疑わしげにツェイトの話を聞いていたが、話の中に思う所があったのか、徐々に驚いたり怒ったりと忙しなく表情をコロコロと変え、幾度か問答を繰り返した後、頭を下げ謝りだした。

「ご、ごめん！ 命の恩人に対してあんな態度を取って……」

いきなり態度が変わった事にツェイトは目を白黒させつつも、気にしなくていいと言ったが少女は中々納得してくれないようだ。そもそも見知らぬ者がいたら大なり小なり警戒するのは仕方のない事だ。

それに、いくら昆虫人を基にしているからと言ってもハイゼクタであるツェイトの姿はモンスターに近い。故にモンスターの様に襲いかかって来るんじゃないのかと誤解されやすいのは想定内である。

「そう言うのなら……」

少女は渋々とはあるが、ようやくツェイトの言い分を受け入れた。

「でも、本当にありがとう。あのままだったら、あの兵士たちに殺

されていたらさうから」

奴らの事を知っているのか？ ツェイトの問いに少女は首を横に振った。

「わからない。山で狩りをしていたら突然襲って来たんだ。その時矢で射られて……」

少女は射られた外骨格の無い場所、ツェイトが刺し傷と思っていた太股の場所をさすりながら答えた。

そこで川に落ちて流された、と。

此処でようやく少女と兵士達の関係と、川で流されていた理由が判明した。

ちなみに射られた矢はその場で引っこ抜いたそうさ。大した根性だ、と心の中で少女の根性に驚く。

少女の答えをからも分かる様に、少女も襲われる覚えが無いらしい。

ならば何故あの連中は少女を襲ったのだろうか？

人攫いか？ それとも見た目だけで実は只の賊の集団だったのか？ しかし、それにしては動きが統一されていたようにも見えたが…… ツェイトの思考は止まらない。

「どうしたんだ？」

少女が不思議そうに問いかけてきて、ツェイトは思考の海から戻ってくる。そうさ、兵士たちの事も気になるがそれは後回しだ。

ツェイトは話題を切り替えて、少女にこれからどうするか尋ねた。

何時までもこの場にいるわけにもいかないだろう。もしかしたらあの兵士たちが追ってきている可能性だってあるのだ。移動した方が良いという事は確かだろう。

「私は自分の住んでいる村に戻ろうと思う。そういう貴方はどうするんだ？」

少女の問いに、ツェイトは大きな街があればそこに行きたいと答えた。

もしも、自分以外にもプレイヤーがこの世界に来ているのだとしたら、町や集落にいる可能性があるかと踏んだのだ。

もっとも、そこがツェイトを受け入れてくれるかは不明だが。

「なら、私が住んでる村に来るか？ その先に都もあるし、ちょうど良いと思うんだが」

少女の提案はツェイトにとっても有難いものだった。しかし、大丈夫なのか？ とツェイトは少女に尋ねる。

何分、自身の外見に問題があるので、それが原因で問題が起きるのは避けたかった。

「そこは大丈夫だろう。初めて見るけど、貴方みたいなガタイの奴なら都まで行けば結構いる。それに貴方は、その……ちゃんと話が出来るみたいだし、悪い奴って感じがしないし、何より私の恩人だ」

極力言葉を選びながら話しているのであろう少女に、ツェイトは

苦笑した。今までの会話や態度を振り返ってみるに、この少女の心根は悪いものではない。あの時助けたのは間違いではなかった。

それに良い事も聞いた。　どうやら自分のようなナリでも普通に町に入れるらしい。NFOの頃はモンスターに部類されていたおかげで、その特性として一定の町に入る事が出来なかったが、ここではそんな事に悩む必要はなさそうだ。　なのでツェイトはお言葉に甘えて、少女に道中の案内を頼むことにした。

「分かった！　じゃあ善は急げだ、早速行こうか」

グツと体を伸ばして元気良く返事を返してくれた少女。その体はもう良くなったらしく、体中にあつた生傷もほとんど見えなくなっていた。

流石は昆虫人と言うべきか、とツェイトは感心する。魔族や天族、不死系には劣るが、他の亜人種族中では優れた部類に入る回復力だ。この世界でもそれは健在の様だ。

しかし、ここが何処なのか分かってるのか？　とツェイトは疑問に思う。

今いる場所は、少女が流されていた川から大分離れた場所だ。少女が狩りをしていたという場所から大分離れているんじゃないのだろうか。

その点についてツェイトは聞いてみると、少女は事も無げに答えた。

「そりゃ分かってるさ。ここら辺の山一帯は、私が昔から狩りで通ってた場所だからな。私の庭も同然だ」

得意げに話す少女にツェイトは成程、と納得した。

それなら心強い、とりあえず道に迷って途方に暮れる心配は無くなった。

「自己紹介がまだだったな。私の名前はセイラムだ」

互いにさあ行こうか、と歩きだそうとしたその時、少女が名乗ってきた。

いきなり名乗られた事に対して首を傾げるツェイトに、少女ことセイラムは眉を顰めた。

「これから一緒に行動するんだから、名前くらいは知るべきだろ？」

もしかして、名前は無いのか？ と少し心配そうに尋ねて来たがツェイトはそんな事は無いと否定する。

ツェイトは余裕が無かったとはいえ、礼を失っていた己を恥じ、名乗るのが遅れて悪かったとツェイトはセイラムに改めて名乗った。

「ツェイトだ、宜しく」

「ああ、宜しくな」

奇しくも出会った二人の昆虫種族。

一人は一介のNFOPレイヤーだったハイゼクターの男。

もう一人は、見知らぬ武装集団に追われていた昆虫人の少女。

これから彼らの身に起こる出来事が、後に世界に大きな影響を及ぼす事になるのを、まだ誰も知らない。

第1話（後書き）

前話を投稿してから数日後、誤字が無いかチェックしにログインしてみましたら、お気に入り登録してくださった方や感想を書いてくださった方がいて脱皮しそうになりました。

本当にありがとうございます。

第2話（前書き）

三連休でしたので書きかけのものを一気に仕上げてみました。

誤字や指摘がありましたらお願いします。

第2話

焼ける様に真っ赤な太陽が大地に沈みかけている夕暮れ時。

影が差し始め、昼間は日の光を浴びて緑なす風景を生み出していた森の中は、徐々に暗い夜の世界へと姿を変えていきはじめていた。

そんな森の中を、ツェイトは疾風のように駆け抜けていた。その大きな背にセイラムを背負って。

当初は歩いていたのだが、現在地から村までかかる時間をセイラムに訊いてみれば「日付が変わる頃には着くかも」という返答が返ってきたので、なら自分がセイラムを抱えて走った方が早いんじゃないのか？ という話になったのだ。

その際、この話を持ちかけた時のセイラムの胡散臭そうに此方を見る目は、今もツェイトの記憶に鮮明に残っていた。

兵士達から逃げだした時の要領でツェイトは大地を蹴り、その反動を活かして加速する。

とは言っても、あの時の様に地盤を砕く様な事はせず、極力音を立てない様に努めているのでスピードはその時程ではないが。派手に音を立ててそれがもし兵士達の耳に届いたら、そう思うと慎重に行動せざるを得ないのだ。

「ここは左に行ってくれ。右は行き止まりになっているんだ」

ツェイトの背中越しにセイラムが指示を出す。

指示を受けたツェイトは分かった、と短く答えてセイラムの指示通りに駆ける。

何だか運動会の騎馬戦の馬になった気分だな。とツェイトが密か

にばやいたのは此処だけの話である。

「凄い、貴方が此処まで身軽だなんて思わなかった」

ツェイトの背中に背負われているセイラムは、そのスピードに驚いていた。

最初にツェイトにこの移動方法を提案された時は「え？」とツェイトの体を疑わしそうに見ていたものだ。

ツェイトの外見は重厚な外骨格で身を包んだカブトムシの巨人といった風体の為、お世辞にも身軽とは言えそうなものでは無かったのだから。

しかし、いざそのスピードを眼のあたりにすれば当初の疑念は消え失せてしまっていた。

風を切る様な速さで山や森の大地を駆け、重さを感じさせない軽やかな跳躍で岩等の段差を飛び越える。

「あ、止まってくれ」

セイラムの言葉にツェイトは足を止めた。何事かとセイラムの方に視線を向けようとしたら、セイラムはツェイトの背中から飛び降り、ツェイトの横を通り越してツェイト達の先にある崖の方へと走って行った。

ツェイトはセイラムの動向を窺っていると、今度は手招きをしてきたのでセイラムの下へと行く。

「あそこだ、あそこが私の住んでいる村だ」

セイラムが見下ろし、指差す先には山間の森に囲まれた集落があ

った。

家屋の作りは木造の、昔の日本家屋に何処となく似ており、その家々の窓からは住人の営みがある事を証明するように明かりが見えた。村の中央には、一際大きな建物が建つてあるのが見える。恐らく村長の家か、集会場等この村にとって重要な建物なのだろう。

「此処から先はもう大丈夫だ。ありがとう」

さ、行こう。とセイラムは歩き出す。

ツェイトはなんの、とだけ答えてセイラムの先導に導かれ、その後をついて行った。

「ちょっと此処で待っていてくれ、ウィーヴィルに話をして来る」

二人がいる場所は村の近くにある、やや開けた所にある丘の上。村までもう目の前という所までツェイト達は近付いたが、セイラムがここでツェイトに待ったをかけた。

いきなりツェイトがやって来ては、村人たちが驚く恐れがあるのでその為だろう。一旦上の人に話をして来るらしい。

ウィーヴィル……か、今の話し方からすると随分と親しげな感じがする。セイラムの身内だろうか。そんなことを考えながらツェイトは分かったと返事をする、セイラムは軽く手を上げて挨拶をし、村の方へと走って行った。

セイラムの後ろ姿を見送った後、ツェイトは空を見上げた。

太陽が沈みきった事もあって夕暮れ時は過ぎ、今は真夜中だ。空

は一面に星々が散りばめられ、大地は月の光に照らされている。森や草むらからは虫の鳴き声と思しき音が聞こえ、静かな世界をささやかに賑わせていた。

これでようやく気が休まるか。ツェイトは首に手を添えてゴキゴキと鳴らした。

ツェイトに肉体的な疲れは無かったが、精神的な疲労は大分溜まっていた。

仕事での気疲れと今の疲労、どっちの方がマシなんだかな。

そんな益にもならない事を考えて、苦笑した。こんな事が考えられるのなら結構余裕はあるのかもしれない。

そうして適当な岩に腰掛ながら時間を潰していると、村の方からいくつかの明りがツェイトのいる丘の方へと向かってきた。

ツェイトの眼には、その明かりが何なのかがはっきりと分かった。

カプトムシと言う特性を兼ね備えたハイゼクタ のためか、ツェイトは夜に強いのだ。その恩恵は、どうやらこの世界でも適応されているらしい。

村人が提灯の様な物を持ち、中に火を入れているのだろう。それで明りを付けて此方に向かっている。

集団の先頭にセイラムがおり、そのほかの村人たちは皆昆虫人の男、20代の様な外見の若者から5、60代と思しき歳老いた者達で構成されていて皆武器を携帯していた。

一様にして此方を驚いた顔で見ているが、今更なのでツェイトはその事はもはや気にしていない。

セイラムが先頭の一際若い男性、というよりは少年と言えそうな外見の者に何か話した後、集団から離れて此方へ走って来た。

「ごめん、待たせたかな」

それは良いんだが、随分と大所帯だな。

ツェイトはそう言っただけでセイラムの後ろにいる村人達を見る。父親を呼んで来ると言う話だったがセイラムは集団を引き連れて戻って来た。

彼らは不思議そうな面持ちでツェイトの方を見ている。

「何者なんだ……」

「昆虫人とは違うな……」

ざわつく男たちの顔からは驚愕、興味、そんな感情が何となくではあるが感じ取れた。

こちらを攻撃してこないだけまだマシとはいえ、少しだけその視線がツェイトには辛かった。

やはりNFOの様にはいかないな。

NFOの場合は、プレイヤーの頭上に名前が出てくる為それで判別できたが、現実ではそんな機能は無いので外見で決めるしかない。もっとも、見てくれがどうであるうともNFOの頃はゲームの登場キャラクターですませていたからそんな程度で済んでいたのだが、そこまで今のツェイトは気付いてない。

俺はこれからどうなるんだ？

このまま晒し物にされ続けるのは正直良い気がしない。一々セイラムに話しかけるだけでも村人達はどよめき立つのだから、困ったものである。ツェイトはセイラムに今後の事を訊いた。

「ああ、それなんだが……」

そこまでセイラムが話した所で、ざわつく男たちの声をかき消すように低く重い声が響き渡った。

「皆、道を開けてくれ」

その声に反応して、男達の群れはモーゼの十戒の如く別れ、その奥から2 m近い身長の逞しい体格の老いた昆虫人がやって来た。

白く染まった髪は短く刈り込まれ、顔には深い皺が刻まれており、それがこの老人が長い年月を生きて来た事を物語っている。

しかし背筋は曲がっておらず、ピンと姿勢を伸ばしたその姿と雰囲気から醸し出すそれは、まるで老いた戦士の様だった。

老人は黒い瞳でツイートをジッと見つめている。まるで、予想外なものを見て凝視するかのように見えたのはツイートの気のせいだろうか。

これは、どういう状況なんだ？

まさか、またあの兵士の時の二の舞になるんじゃないだろうか。

ツイートは態度にこそ出さず、大丈夫だと言った筈なのに……その所どうなんだと自分の横にいるセイラムに視線で訴えたかったが、出来ない。

それが出来なかったのは、目の前にいる山賊も驚いて逃げ出しそうな顔つきのゴツイご老人の眼力のせいだった。

ツイートはこの時ばかりは自身の外見を棚に上げて、目の前の老人の迫力に冷や汗をかいた。

目を離しては、いけない気がする。

目を離すな、とは言われてはいない。だがしかし、ツェイトの今までの人生経験がこの老人の視線から逃げてはいけないと結論付けた。この手の手合いで、目を逸らした後は碌な目に遭ったためじゃないのだ。

故にツェイトは視線を返す。睨みつける訳ではない、平身低頭に機嫌を窺う様に見る訳でもない。ただ静かに、老人の瞳をジッと見つめて相手の反応を待った。

見つめあってから数秒、セイラムが心配そうに互いの様子を窺っていたが老人の方からツェイトに話しかけて来た。

「我らとは異なる虫の民よ、セイラムから話は聞いている。この度はワシの娘を救ってくれた事をこのウィーヴィル、村を代表して、そして父親として深く感謝する」

ピシツとした態度からの最敬礼に近いお辞儀。その一挙手一投足が、とても様になっていた。

父親？ この人が？ とセイラムに視線で問うと、ツェイトの意図を何となく理解したのか、苦笑しながらコクリと頷いた。

外見的に10代のセイラムと、真つ白な白髪の老人であるウィーヴィル。親子と言うよりかは祖父と孫と言われた方が納得できる。

「いえ、気にしないでください。お……私としても見過ごせませんでしたので」

内心で外見的に歳が離れ過ぎている二人に驚くツェイトだが、それを態度に出さずに敬語で返す。

「そうか……その礼と言っては何だが、ワシらの村に招きたい。付いてきてくれないか」

拒否する等と言う選択肢は無かった。ツェイトは分かりました、とウィーヴィルの歓迎を受け入れた。老人は軽く頷くと、村の男達の方に体を向けた。

「皆、見ての通りだ。この者はワシらに害意を持っておらん。各自、村に戻ってくれ」

ウィーヴィル言葉に納得したのか、男達は何処か安堵したような顔つきでゾロゾロと村へ戻って行き、その際何人かがツェイトをチラチラと振り返りながら見ている者がいた。

やはり警戒されていたのかとツェイトは内心納得しつつも、恩人に対してそんな態度は無いだろうにという不満もあったが、何だか恩着せがましい感じがしたので気にしない事にした。

「何で、こんな大げさな事になったんだ？」

「ご、ごめん。最初は父さんだけを呼ぶつもりだったんだけど、丁度他の皆も集まっちゃって。話をしていたら皆が貴方に興味を持つちゃって……」

ツェイトはセイラムに問いかけると、セイラムは申し訳なさそうに首をすくめて理由を話した。

話を聞くに、セイラムの帰りが遅いので捜索隊を出そうか出すまいかと男達がウィーヴィルの家に集まって話し合っていたらしい。余程心配だったのだろう。

そして、彼らにとってはハイゼクタは余程珍しい種族の様だ。

ツェイトは先程の男達の視線を思い出した。

「……俺はパンダか」

「……え？ カブトムシじゃないのか？」

「そう言う意味じゃ無い」

ツェイトはのっそりとウィーヴィル達の方へと向かい、セイラムも慌ててその後をついて行った。

入り口ではウィーヴィルと、幾人が減っていたが、先程の男達が待っていた。

「改めて歓迎しよう。ようこそカジミルの村へ、ワシらはお主を歓迎するよ」

ウィーヴィル達に連れられて、木材と幾分か金属で組み立てられた柵をくぐって村の中に入ると、昔懐かしの日本の村落に似た風景がツェイトの視界に広がった。

外から見た時も思ったが、NFOの昆虫人の集落と似ているな。

昆虫人の文化様式は、日本文化に似ている。というよりは似せて作られていた。中身が日本人のツェイトは村の中を見まわしながら、

リアルの実家にいる両親の田舎を少し思い出してノスタルジックな気持ちになった。

村の大通りを、ウィーヴィルや男達の先導を受けてツェイトは歩いて行く。

辺りを見まわしてみると、夜だと言うのに女子供達が家から出てきて、何事かとツェイト達のいる方を見ていた。

驚いた面持ちでツェイトを見る昆虫人の女性、ツェイトの姿を見て「でっけー」と無邪気に目を輝かせる昆虫人の子供。村人は皆昆虫人で構成されているようだ。

村の住人達を見て、ふと気が付いた。

何故、セイラムだけ違うんだ？

セイラム以外の村人達は、皆総じて人間と大差変わりのない、NFOでよく見た昆虫人と同じ外見をしている。村人は和風情緒が見られる服装を見に付けており、セイラムの様に特別ゴツイ外骨格を身に付けている訳でもない。

どうしてセイラムだけがあのような体なのだろうか。

後でウィーヴィルさんに尋ねてみようか、と考えたツェイトだが、身体的特徴を尋ねるのは時として互いの関係を悪化させる爆弾発言に繋がりがかねないので、自重する事にした。

村の中を興味深く見回しながら歩くツェイトに、ウィーヴィルが話しかけて来た。

「ワシの家に招く前に、村長に会わせたい。大丈夫かね？」

「大丈夫ですけど、ウィーヴィルさんが村長じゃないのですか？」

先程の取り仕切り様からして、てっきりこのガタイの良いご老人が村の長だとツェイトは思っていた。

「いやいや、ワシはこの村のご意見番。村長の補佐みたいなものだ」

ツェイトの疑問にウィーヴィルは軽く手を振り、笑いながらツェイトにそう答える。

その顔には、最初に出会った時に見せた鋭さはナリを潜め、体格の良い気さくなご老人といった雰囲気になっていた。

そうこうして行く内に、ツェイトとウィーヴィル達は村の中央の建物の前に着いた。遠目から見たときに見えた、あの大きな屋敷だった。

「ここが村長の屋敷なんだが……」

そういつてウィーヴィルはツェイトの体を、というよりは背丈を見ていた。

角も含めたツェイトの大きさはおよそ4m超。とてもではないが人間サイズの種族の一般住居へ入るのに適していない。

おまけにそのガタイに見合った重量も備えているのだ。NFOならただ狭いだけで終わるが、リアルの木造建築なんぞに足を踏み入れたら床が抜けてしまうんじゃないだろうか。

底が抜けるか、それともツェイトの角で天井がズタズタに切り刻まれるかのどちらかしか、一般家屋の辿る末路は無かった。

「……その体じゃ入れんか。村長を連れて来るからそこで待っててくれぬか」

そう言っただけでウィーヴィルは村長のいる屋敷の中へと入って行く。ウィーヴィルの後ろ姿をツイイトが見送っていると、それまで静かにツイイト達の会話を聞いていたセイラムが苦笑しながらツイイトに話しかけて来た。

「なんか、不便そうだな」

そう言われるツイイトだが、「何時も森の中にいたから、そんなに困ってはいなかったんだが……」と返した。

「へえ、森の中か……」

確かにツイイトはNFOの頃は森の中にいた。

森は森でも、昆虫系の魔物が巣食うダンジョンとしては上から2番目の難易度を誇る魔蟲の大森林と言う、高レベルのプレイヤーでも瞬く間に殲滅されてしまう様な物騒極まりない森だが。

そんな事は全く話していないので、セイラムは普通の森の中で過ごしているのだと勘違いをしていた。

「そういえば、先程ウィーヴィルさんが家に招くと言っていたけど……」

「それは多分、裏庭になるんだろうな。私達の家なんて村長の屋敷より小さいんだ、ツイイトじゃ入れないよ」

流石にこの体じゃベッドで寝れないか、とツイイトは少し残念がついていると屋敷の入り口から人が3人出て来た。

一人は先程村長を呼んで行ったウィーヴィル。そしてもう一人は、

先程村の外までツェイトを見に来た男達の先頭にいた若い男だ。いつの間にかいなくなっていたと思えば、屋敷に戻っていた様だ。その彼が、一人の老婆と共に歩いて来た。

恐らく若い頃は大層な美人だったのではないだろうか、そう思わせるほどにその老婆は年老いて尚美しさがあつた。

女性用の和風装束を着込んでおり、混じりけのない白髪は後ろで一纏めにされている。彼女もウィーヴィルと同様背筋は曲がっておらず、ピンのばしていて淑女の様な雰囲気醸し出していた。

老婆こと村長は、優しい目つきでツェイトに話しかけて来た。

「はじめまして、私の名はキイト。この村の村長をしています」

「ツェイトと言います。はじめまして」

ツェイトは老女の挨拶に、自身も名乗りで応える。

「ウィーヴィルとセイラムから話は聞いています。ありがとうございます、私達の村の娘を助けてくれて」

「いえ、私も放っておけませんでしたから」

「そうですね。その心、大切にしてくださいね」

ツェイトの返事にキイトは優しく微笑む。

年長者ならではの余裕か、はたまたこの老女の人格がなせる業なのか、ツェイトはこの柔和な老女が自分に対して驚く事もなく平然と話しかけてくるのに内心驚いた。

そんなキイトはツェイトと何度か言葉を交わした後、セイラムの方に向いた。

「セイラム」

「は、ハイ」

キイトに名前を呼ばれたセイラムは、緊張した面持ちで返事をする。

「貴女もよく無事に帰って来てくれました。」

「あ、ハイ。心配掛けてすみませんでした」

嬉しいのか、照れているのか、もしくは両方か。村長の言葉に、セイラムはくすぐったそうに答えた。

「……さて、御挨拶はこの位にして」

そう言って、キイトは改めて二人に向かい合う。

「貴方達二人には、これまで起こった事を話して欲しいのだけれど……」

良いかしら？ と話しかけるキイトの表情からは笑みが消え、真剣な顔つきでツェイトとセイラムに訪ねた。

話さない理由など無い。ツェイトとセイラムはこれまでの経緯をキイト、そしてウィーヴィルや村の男達に説明した。

話を終わると、周囲の村の男たちがざわつき始める。自分達の村の者が襲われたという事実もさることながら、正体不明の兵士達が

もしかしたらこの近くをうろついている可能性があるのだ。その動揺は少なくないだろう。

尚、ツェイトの事についてはセイラムが説明してくれたおかげか、村人たちの反応はそう悪いものでは無かった。

ツェイト達の証言を噛み砕いて理解するように、キイトが静かに目を閉じて思案に浸る事数秒。

「これは皆で話し合う必要があるわね。今日はもう遅いので、明日の夜に再びこの場で会合を行います。そこで今後の事について話しておきたいの」

皆もそれで良いかしら？ キイトが回りの村人たちを見まわしながら問いかけると、「ああ」だの「その方が良い」と了承の返事が返って来た。

それに満足した様にキイトはニッコリと笑い、ポンと両手を叩いた。

「さあ、堅いお話はこれでお終い。貴方達も疲れてるでしょう？今夜はゆっくりと休みなさい」

キイトの言葉が合図となり、先ほどまでツェイトとウィーヴィルの周りにいた男たちもゾロゾロと返って行った。

「ツェイトさん。大したお持て成しは出来ないかもしれませんが、良かったらゆっくりして行って下さいね」

「……………ありがとうございます」

キイトの態度の変わり様に少々呆気にとられていたツェイトは気を取り直し、村長に返事をする。

「村長、ワシはこの者に話があるので……」

「ええ、お願いしますね」

ウィーヴィルとキイトが何やら話している間に所在なく視線を泳がせていたツェイトは、キイトと一緒にいた少年をチラリと見た。肩が露出する位短い袖の上着を身に付け、引き締まった体をしており、肩まで伸ばした髪は後ろで一纏めに束ねている。

村の丘に来る時は集団の先頭に立ち、今はキイトの側に付き添っている。彼女の縁者なのだろうかと思案していると、ふと目が合った。

何故か忌々しい物を見るかのような眼つきで睨みつけられてしまった。何だ？ と首を傾げていると、キイトと話していたウィーヴィルがツェイトを呼ぶ。

「付いてきてくれ、ワシらの家に案内しよう」

ウィーヴィルに連れられてツェイトは後をついて行く。そこでもう一度屋敷の玄関の方を振り返ると、先程の少年がまだツェイトを睨みつけていたが、すぐに屋敷の中に入って行った。

嫌われてしまったかな。

嫌われたのは残念だが、そう長い間この村に滞在する事もないだろうから、あまり気にしない方が良くかとツェイトは再びウィーヴィル達の方に向き直って歩いて行った。

「すまん、ランはお主に少し嫉妬しておるみたいだな」

家に向かう途中、ウィーヴィルがツェイトに話しかけて来た。

ラン、と言うのは先ほど村長と一緒にいた若者の名前らしい。先頭を歩いているセイラムに聞こえないようにひっそりと話して来るのには理由があるのか。ツェイトもそれに合わせて小さく答える。

「嫉妬？ 私に、ですか？」

「そう、どうやらお主がセイラムの近くに居るのが気に食わんらしい」

「……もしかして、彼はセイラムの事を？」

「どうやら気があるらしいな。本人は否定しているみたいだが」

そう言って可笑しそうにウィーヴィルは笑う。

話の内容はこうだ。ランはキイトの孫で、セイラムとは幼馴染らしい。昔から一緒に行動していた仲で、そんな中突然現れたツェイトにセイラムが興味を持ち、セイラムが村に戻って来た時に今回の事の経緯とツェイトの事をランに色々と話していたらしい。そこでランはツェイトに対して対抗意識が沸いたという。

要約してしまえば、今まで自分に向けられていた好きな娘の好意が、他の男に向けられてしまっただけで気に入らないのだそうだ。ウィーヴィルがセイラムに敢えて聞こえないようにしていたのは、若者同士で解決しなさいと言う事らしい。

「……青春だなあ」

ツェイトは溜息をついた。

確かにセイラムに対して情はある。しかし、それは男女としてのものでは無い。助けようとした者に対する、強者が弱者に対する憐憫にも似た感情だ。それが決して良いものとはツェイトは思っていない。

種族云々の隔たりもちよつとはあるが、少なくともツェイトはセイラムに対して恋慕の感情は一切持ち合わせていなかった。

なので先の嫉妬に燃える少年には、精々恋の駆け引きを楽しんでくれと内心エールを送るだけである。

その事をウィーヴィルに話すと、このガタイの良いご老人は大層可笑しそうに笑った。

「二人とも何話してるんだー？ 早く帰ろう」

痺れを切らしたセイラムが振り返って二人に呼び掛ける。いつの間にか二人とセイラムの距離は大分離れていた。

当の本人は何も知らず……か。ツェイト達は苦笑しながらセイラムの後を付いて行った。

「このような場所ですまん。部屋が空いておるからそこを貸してやりたかったが……」

「いえ、元々屋外で過ごしていた身ですので、気にしないでください」

そう言ってツェイトは近くに生えていた樹に手を置きながら話す。

NFOの頃のツェイトは、ハイゼクタ になってからと言うものの、ガタイがガタイなので建物内に居座る事はあまり無く、森等の自然環境の中を休憩場所としていた。故に野ざらして過ごす事に対して抵抗はあまり無い。

セイラムとウィーヴィルの住む家は、村長の家からすこし離れており、森に面した場所にあった。

他の住居と同じく、木造りのシンプルな日本家屋。予想通りであるが、ツェイトは中に入る事が出来なかった。裏庭に通された。

現在、ツェイトとウィーヴィルはやや遅めの夕食を取っていた。互いに草むらの上にとっかかりと座り、ウィーヴィルが用意してくれた料理をランプで照らしながら頂く。昆虫人の文化は昔の日本に近い、それは食事にも反映されている。ウィーヴィルがツェイト用に用意してくれたのは大きな白米のおにぎりと漬物、それとみそ汁。多少材料の違いはあるが、それは和食にそっくりだ。

私に合わせなくても良いですよとツェイトは言ったのだが、ウィーヴィルはツェイトと話がしたいらしく「気にせんでくれ」と言っ

て座り込んだのだ。ツェイト自身もこうして話をしてくれる者がいる事が嬉しかったので断る気も無く、食事に付き合ってもらった。事にした。

食事の始めにウィーヴィルは先程ツェイトと初対面した時の対応について謝り、娘を助けてくれた事に対して再度礼を述べた。

ツェイトはそれだけ村とお嬢さんが大切だという表れなのだろうから、仕方が無いと答えるとウィーヴィルは感謝する、と頭を下げていた。

実際仕様の無い事だろう。見ず知らずの相手ならば、程度はあれど警戒するものだ。むしろ、いきなりもろ手を挙げて歓迎される方がツェイトにとっては違和感を感じてしまう。

そして話は戻って現在。最初のちよつと重かった空気は今では無くなり、談話を挟んだ食事会という雰囲気になっていた。

当初は鉄仮面の様な外骨格で顔を覆ったツェイトが食事を取る事が出来るのかとウィーヴィルは不思議そうに見ていたが、ツェイトの口を覆っていた外骨格が真ん中からスライド式に開き、中から剣山のように鋭い牙を生やした顎が表れた。用意された大きなおにぎりと漬物を大きな手で器用に取って食べ、ズズツとみそ汁を啜るツェイトの姿を見てウィーヴィルが少し目を丸くしていた。

ちなみにツェイト自身は食事機能が無事だった事を確認して、内心ほつと胸を撫で下ろしていた。そして食事と言う行為がゲームの世界での疑似行為では無く、本当に食べれてしまっていると言う事実に、やはり此処がゲームでは無いと言う事を改めて実感させていた。

「そう言ってくれると此方としても助かるな」

「仕方ないでしょう。ところで、セイ……お嬢さんは何処に？」

「ふふ、お嬢さんが、そんなに硬くならんでもいいよ。あの娘なら部屋で寝ておるよ、色々と疲れておるのだろう」

そう言ってウィーヴィルは、自分用に用意したおにぎりを頬張る。

「そうですねか……いえ、山で襲われていたのが気になってしまっています」

「そうか、お主は優しいのだな。心配する事は無い、あの娘は見た目通り元気が取り得だからな」

続いてみそ汁を啜りながらウィーヴィルは微笑みながら短く答える。

会話が弾み始めた所で、ツェイトは気になった事を思いきって尋ねる事にした。

それは、この世界の事についてだ。とは言っても、流石に世界規模の話が通用するのか分からないのでこの近辺の地域の事、国家があればその国の事を聞く事にした。

その事に付いてウィーヴィルに尋ねると、少し怪訝そうに思案した後地図を持ってくるから少し待っておれ。と言って家に戻って行った。

それから少し待っていると、ウィーヴィルが戻って来てまた地面に座り込み、持ってきた大きな地図を広げたのだが、それを見たツェイトは目を剥いた。

ネオフロンティア大陸！

多少変わっている所はあるが似ている、というよりそっくりなのだ。ツェイトがプレイしていたゲームであるNFOの舞台である大陸と。

ワイルドマックというNFOのモンスターがおり、昆虫人もいるのだからもしかやとは思っていたが、此処まで似ている世界だと、この世界について疑問が湧いて来る。

「さて、此処が何処だかと言う話だが……大丈夫かね？」

「大丈夫……です」

そう言っただけで何とか冷静である事をアピールするツェイトだが、食事の為に露出させていた顎部分からは冷や汗が流れていた。

そんなツェイトの様子を心配そうにウィーヴィルが尋ねてくるが、ツェイトは気にしないでくださいと言っただけで続きを促した。

結果だけを言わせてもらえば、ツェイトは始終ポカンとしていた。

そして感想はたった一言。「何だこれは」だ。

ツェイトが今いる場所は、昆虫人達で構成されている昆虫国家ワームズ。そこが治めている山林地帯の一画だ。国の回りには、多くの国家が形成されていた。ワームズから北にある湖畔を囲んだ森林地帯にはエルフの国があり、他にも獣人、ドワーフ、オーガ等様々な種族が様々な場所で国家を立ち上げている。更にそれを一纏めにして連合国家になっているらしい。

NFOの世界での亜人達の住む場所の規模は、精々が村か中規模の都市程度だった。

だのにこれは何だ？ 何で国家が出来ている？ 人間はどこへ行っただけ？

混乱しているツェイトを余所に、人間達の国はこの地から大分離れた所にあるというウィーヴィルのありがたい補足があったのだが、今のツェイトの耳に入っているのかは怪しい。

もし近辺に誰も居なかつたら、今頃絶叫しながら岩に頭突きの一つでもしていたかもしれない。それ位ツェイトの受けた衝撃は大きかったのだ。

「以上がワシらの住んでいる国と、近辺の国家の話だな。何か質問はあるかね？」

質問タイムが出来たのでツェイトはNFOとの類似点が無いか尋ねる事にした。

主な内容はNFOの頃にあった国や町の名前、イベント等だ。それらに心当たりがないかをウィーヴィルに訊いた。しかし。

「すまぬが、どれも聞き覚えのないものばかりだな」

「そう、ですか……」

ツェイトの顔は、見る者が見れば分かっていたかもしれないが、焦燥で塗りつぶされていた。出来れば夢から覚めて、自分の部屋で目覚めたい所であったが、現実とは残酷なもので、ツェイトはつい片手を額において天を仰いだ。

もう滅茶苦茶だ、どうなってるんだ本当に。

先程から天を仰いだり冷や汗を流したりと、見た目以上に感情豊かなツェイトにウィーヴィルが話しかけて来た。

「何か、難儀している様だな」

苦悩するツェイトにウィーヴィルは語りかける。

「会って間もない間柄だが、お主の人柄と言うものは何となくではあるが分かる。お主は悪い者で無いんだろう。それにセイラムを助けてもらった手前、お主が困っているのならば、力になってやりたいのだ」

「……」

ツェイトの視線がウィーヴィルと、ランプに灯る明りを交互に彷徨う。まるで迷う様に。

話すべきか、自分の置かれた状況を。しかし下手をすれば気の触れた男と思われるかもしれない。せつかく友好的な人物が現れたのだ、それは避けたい。先程から何度か怪訝そうな反応が返って来ているのだ。これ以上は不味い。

理性では話すなど叫んでいるが、本能が話せとツェイトを後押ししている。そこには本能だけでなく、不安もあつたが。

「話しくらいならば、このワシでも聞いてやれるぞ」

話してしまえば、楽になるだろう。しかし、その先の展開がどのようなものになるのが予想できず、ツェイトは答えられずにいる。

故に、ツェイトは話さない。静かに首を横に振り、「すみません……」と申し訳なさそうに、そして弱々しく答えた。

「……未知の世界が、怖いかね？」

ツェイトの体がビクリと震える。

何故そんな事を。ツェイトはウィーヴィルを凝視する。

さつきこの世界の事について聞いたからか？ 別の意味なのかもしれないと言う可能性もあるが、この状況でそのもの言いは引つかかる。それに、ツェイトは自身の素性を話してはいないのだ。故にツェイトは勘ぐる。

「もしか、この人は……」

「言っておくが、ワシはこの国に生まれ育った身だ。おぬしの同類では無いよ」

同類という言葉が出ると言う事は間違いない。何処まで知っているかは分からないが、この人はNFOPプレイヤーの事を知っている。呼吸を忘れるほどにツェイトはウィーヴィルの顔を、穴が空くほど見た。

「確証が無かったが、色々とお主の言葉を聞き、お主の姿を見た今なら分かる。お主もこの地に不本意で来てしまった者か」

「も？ 他にもいるのですか？」

ツェイトの語気が自然と強くなる。それも致し方のない事である。同郷の者がいるかもしれないのだから。

「ああ、ワシはお主と同じ境遇にあった男を一人知っている」

その言葉は、ツェイトに希望を与えるのか。

「その男は此処とは違う世界からやって来て、はぐれた友を探して旅をしていたと言っていた」

それとも絶望か。

「名はプロムナード。赤黒いクワガタの様な姿をして、自分の事をハイゼクタ と呼んでいた昆虫種族の男だ」

えも言われぬ感情が、ツェイトの心をかき乱す。

自分と同じ境遇の者が、しかもそれが自分の友人だった事を知って驚きと共に一瞬喜ぶが、その後沈んだ様に頭を垂らした。

プロムナードも此処に来ていた。来て、しまっていた。

親友がこの世界にいる事は心強い、だがそれと同時にプロムナードまでこの現象に巻き込まれてしまったのかという事実を認識すると、素直には喜べなかった。

ツェイトの反応を見て「やはりか……」と深く溜息をついてウィーヴィルは話を続ける。

「およそ二十年以上前の話だ。ワシがまだこの村に居座る前、旅をしていた頃に出会ってな、その道中何度か行動を共にした事があるのだ」

20年！？ その話は聞き捨てならない。飛ばされる時間軸が各プレイヤーで違うのか？

そんな事を考えながらもツェイトはウィーヴィルの話を聞き逃すまいと耳を傾けた。

「思い起こせば不思議な男だったな。どこか飄々としているかと思えば、まるで紅蓮の炎の様に激しい気性を持ち合わせておった」

ウィーヴィルによるプロムナードの話は続いた。ある時はウィーヴィルと互いに協力して、当時暴れ回っていた犯罪者集団をまとめて叩き潰し、またある時は大量のドラゴン相手に一人で大立ち回りを演じた事もあるらしい。

どうやらプロムナードは此処にいてもNFOの頃と変わらず、何時も通りだったようだ。それを知ってツェイトは呆れ半分に苦笑し

た。

「そうですか、あいつも相変わらずみたいです……」

「道中であやつからお主の話を聞いていたが、まさかこの様な形で出会うとはな。初めてお主を見た時は聞いていた特徴と似通りすぎていて吃驚したわ……」

運命とはかくも奇なものだな。そう呟いたウィーヴィルに、ツェイトも同意せざるを得ない。

ウィーヴィルが村の外であるような態度を取ったのは、プロムナードから聞かされていた内容だけでは確信が持てなかったらしい。そして今の彼は村の中心人物の一人、個人の感情に村の皆を巻き込むわけにはいかない。故の対応だったそうだ。

「あいつは……あいつは今どこにいるのですか？」

「分からん、旅の途中で分かれてそれっきりだ。今何処で何をしているのか見当もつかん」

「そう、ですか」

ジツとツェイトはランプの灯を見つめて先程までの話を思い返した。

20年というズレが非常に気になるが、プロムナードはこの世界にいる。それが分かっただけでも大きな成果だ。

幸いにも昆虫種族の寿命は長い、もしもNFOと同じ仕様ならば20年程度なら許容範囲内だ。

しかし、その20年と言う人間にとってはかなり長い月日が、人間の精神を内包したプレイヤーであるプロムナードにどのような心

変わりをさせているのかまでは、ツェイトには分からなかった。

「近い内、この村を出ようと思います」

ツェイトはウィーヴィルにそう告げた。

「……そうか、そうだろうな。お主が、あの男が話していた通りの者ならば」

「あいつが私の事を探しているのなら、早く会ってやりたいのです」

ツェイトはまだウィーヴィルにプロムナードの存在を知らされていたから良い。

しかしプロムナードは、20年と言う月日を、ツェイトがいない事を知らずに探し回っている可能性がある。

それがどれ程辛いものなのか、想像もつかない。だから会わねばならない、プロムナードに。

ですが、とツェイトは言葉を紡ぐ。

「私はこの事をよく知りません。ですので出来ればこの世界、もしくはこの近辺の事だけでもかまいません。詳しく教えてくれませんか」

行くにしても、此処の常識と言うものを知っておきたい。そう頼むツェイトにウィーヴィルが笑って答えた。

「良いとも。それ位ならお安い御用だ」

「色々ありがとうございます」

「いや、ワシも疲れておるお主に無理に話をさせてしまつてすまなかつたな」

時間は最早村人が皆寝静まる真夜中。二人は食事を終えて、後かたづけをしながらそう言った。

「では、また明日な」

「はい、おやすみなさい」

互いに夜の挨拶を済ませてそれぞれの寝床へと行く。ウィーヴィルは自宅へ、ツェイトは適当に近くの森へ。

落ち葉の広がる場所に丁度倒れていた木があつたので、それを枕にしてツェイトは仰向けになって寝転がる。土の冷たさと、落ち葉の温かさが妙に心地良い。

視線の先、森の真上には木々の枝と葉で覆われた森の天井がある。その隙間から見える巨大な満月の放つ光が、木漏れ日の様に森の夜をほのかに照らしていた。

どこか幻想的な光景を見つめながら、ツェイトは今日起きた事を思い返していた。

思い返せば色々であつた。

プロムナードを探す事、それが今のツェイトの一番の目標。元の世界に戻るの、その次だ。

そろそろ寝ようと静かに目を閉じようとしたその時、ウィーヴイル達の家の方から物音がしてきた。

ウィーヴイルさんか？ と体を起して物音がする方向を見ていると、現れたのはセイラムだった。誰もいない事を確認して、コソコソと此方へとやって来る姿が見える。

「どうしたんだ、こんな時間に」

「あ、ごめん。もしかして寝ていひゃあ!？」

突然セイラムがツイイトの顔を見て飛び退いた。まるでおっかない物を見た様な顔つきだ。

「うん？ どうした？」

「つ、ツイイト。く、くち、口がっ」

「え？ ああ」

言われて口元を手で摩ると、食事の時に外骨格を開いてそのままだった事に気付いた。剣山のような牙がむき出しのこの顎は、セイラムには中々シヨッキングだったようだ。

すまないと、口を外骨格で再びカバーすると、セイラムは「おぉー」と感嘆の声をあげていた。

どうやらこの外骨格は、内側に専用の筋肉組織が存在して、それを動かす事で開け閉めできるらしい。

この一連の動作が、瞬きや呼吸をするように自然と出来てしまうため、ツイイト自身も今一つ理解していない。

NFOでは分からなかった新たな発見である。

「それで、どうしたんだ？」

「いや、せつかくだから話でもと」

「……おいおい、眠くないのか」

「さっきまで寝てたから全然眠くないんだ」

そういえばさっきまで寝ていたんだっけか、とツェイトはセイラムを見てみると、その姿は最初に出会った時の様な身軽な服装では無く、ゆったりとした着物の様な服を着ていた。おそらくはセイラムの寝間着なのだろう。

セイラムはツェイトの側まで歩いて来ると隣に座りこんできた。中々無防備に接近して来る姿を見て、成程、これならあの少年も嫉妬して警戒するのも可笑しくは無いか、と此方を睨んできた村長の孫を思い出した。

「ウィーヴィルと何か話してたけど、何だったんだ？」

「……大人の話って奴だな」

その話の中には少し情けない自分の姿もあったが、ツェイトは黙して語らない。

「……子供扱いしないでくれ、私はもう16だ。狩りだって一人で出来る」

不貞腐れた様にセイラムは体育座りをして、組んだ足の間に顔を

うずめてツェイトをジト眼で睨みつけて来た。

「そうやって拗ねるのは子供だと言っている様なものだぞ」

「そんな事……ん？」

顔をあげて言い返そうとしていたセイラムだが、突然ジーっとツェイトを見つめて来た。

「何かツェイト、変わった？」

「……どうしてそう思う？」

「何だか、ツェイトの話し方が変わった様な気がするんだけど……」

「そうか？ そう、か」

この世界に来てからずっと張りつめていた緊張がようやく解けて、本来の調子に戻ったのだらう。此处に来てツェイトもようやくそれを自覚した。

「それで、結局何の話をしていたんだ？」

セイラムは再び問い質して来る。どうやら二人の会話が気になっ
ていたらしい。

「そんなに気になる事なのか？」

「それはそうだ、この村に来てからほとんどツェイトと話さなかつ

「たんだ。聞く位良いじゃないか」

「うーん、明日で良いか？ 今日のもう遅い」

「良いじゃないか、少しくらい」

「子供も大人ももう寝る時間だ。そして俺も寝る時間だ」

「まだ私を子供扱いするか!？」

「そろそろ寝ないと、本当に明日起きれなくなるぞ」

「私は寝たからもう眠くないのだ!」

そんなやり取りが続き、カジミルの村の夜は更けて行った。

ツェイトとセイラムが下らないやり取りを森の中で行っている時、ウィーヴィルはツェイトとの会話を終えた後、自宅へ戻っていた。

部屋の中は明かりをつけない代わりに、窓から差し込む月の光が微かに部屋の中を明るく照らしていた。ウィーヴィルは布団の上に胡坐をかき、静かに目を閉じながら呟く。

「遂にセイラムを狙って来る者が現れたか」

フウつと溜息をつく。

「そしてそれをあやつの友、ツェイトが助け、此処へ来た……。これは何の因果なのだろうな、プロムナードよ」

誰にともなく吐いたウィーヴィルの言葉は、人知れず闇の中に消えて行った。

世界は違っても夜は来る。例えそれが、異邦のハイゼクターの上であるとしても、等しく。

第2話（後書き）

総合アクセス数が私の知らない桁になっていました。（うっかりキヤストオフのスイッチを押しそうになりながら

第3話（前書き）

お待たせいたしました。3話投稿です。
何かおかしい所がありましたらご指摘ください。

第3話

とある山の中、その峰にある見晴らしの良い崖の上に彼はいた。

ややボサついた髪型と無骨気味な顔立ちが、本来は16歳位の筈の彼に老けた印象を与えていた。

服装は袴の様な穿き物を身に付けているだけ。しかし剥き出しの上半身は、引き締まった筋肉が付いているのでみすばらしさは無い。そして、両手両足には彼の武器と思しき手甲と脚甲が装着されていた。どれもシンプルな作りのデザインであり、少々華やかさに欠けたものだったが、それが彼には似合っていた。

彼は人間では無い。

肌は薄い緑色一色に染まっており、両肩、両肘は黒い硬質物で覆われている。

そして額からは一对の触覚が上へと伸び、風が吹く度ユラユラと揺れていた。彼は虫の亜人、昆虫人である。

岩の上に腰掛け、その種族特有の白目の無い黒一色の眼は、ぼんやりと崖の先に広がる青空を眺めているだけだ。

まるで尻から根が生えたかのように彼はそこから動かない。空を流れる雲を眼で追うのでもなく、さえずりながら空を舞う鳥達を見て楽しむのでもなく、只、ひたすら彼は空を見る。

ぼんやりとした時間が無為に過ぎていたのだが、突如静寂が破られた。

彼が佇んでいる場所からやや離れた林の奥、そこから突如ウサギ

に似た動物が此方へ走って来たのだ。

しかしその姿はウサギにあらず、大きさは大型犬ほどの大きさもあり、口元には可愛らしさのかけらもない

ギザギザの鋭い牙が生え揃っている。そして頭部から生えている二本の鋭く長い角が、彼に向けられたまま突っ込んで来ているのだ。

彼は現れたウサギの怪物に微かに目を見開いて驚き、打ち向かうと腰を上げようとした態勢で、止まった。

林を抜け、草むらから飛び出してきたそのウサギに似た動物は、真後ろから飛来してきた槍で胴体を貫かれたのだ。槍で貫かれたウサギの怪物は、短い悲鳴を上げながら地面に転がった。

突き刺さった傷口からは血が流れず、代わりに光の粒が溢れている。そしてその光は徐々にその怪物の全身を覆い、最期はフツと消えた。その場には先程ウサギの怪物を貫いた槍だけが残されただけだ。その槍は日本で言う所の素槍という、昔の足軽兵士が持っている様な槍のそれに似ている。

彼は中腰の姿勢のまま、目をパチパチと瞬かせて呆気にとられていると林の奥から人影が現れ、声をかけて来た。

「すみません、大丈夫ですか？」

やや駆け足で草むらを掻きわけて現れたのは一人の少年だ。

年頃は彼と同じくらいだろうか。やや厳つい顔立ちの彼とは違い、此方は年相応の未だ幼さが残る顔つきをしている。そしてその少年も昆虫人だった。

腰から下は袴状の穿きものの上からすね当てを付ける事でズボン状にしており、上半身はサラシを巻いた上から丈の短い和服を着崩

して着込んでいる。

その少年は落ちていた槍を拾い上げて肩に担ぎ、姿勢を整える彼に話しかけた。

「すみません。戦ってたらいきなりモンスターが逃げ出しちゃって、もしかして、攻撃されましたか？」

槍を持った少年が少し心配そうに問いかけるが、彼は静かに首を横に振る。

「その前に倒してくれたから大丈夫ですよ」

「そりゃ良かった……」

そう言って槍の少年はひと安心し、ホッと胸をなでおろした。

それから彼らは昆虫人同士と言う事もあつてか、その場で色々と世間話をする事となった。

話をしていく内に、槍の少年はどうやら彼と同じ年らしく、それを知った槍の少年は驚いていた。

「何だよ、俺と同じ年かよ！ てっきり年上のプレイヤーかと思っ
た！」

槍の少年は、胡坐をかいた状態で器用に足の裏でバンバンと拍手するように叩きながら大笑いをする。

「……悪かったな老け面で」

対する彼も胡坐をかくが、頬杖を付いてむくれていた。

彼らのいる場所は現実では無い。ネオ・フロンティア・オンラインと言うプレイヤーキャラクター電脳空間の中に作られたゲームの世界だ。そこで自身の分身であるPCを介してこの世界を体感しているのだ。

そのPCを作成する場合、2つの方法がある。

1つ目は自分自身の身体情報をそのまま反映させ、PCもそれに準じた姿にする方法。2つ目は、キャラクター作成の際に、各項目を調整して自分自身の好みに合わせた外見にする事だ。

彼ら二人はリアルな姿を反映させたものらしい。そこで彼の顔つきが老け顔と言う事は、リアルでも同様と言う事になる。それが妙にツボに入ったらしく、槍の少年は先程から笑い転げていたが、その後彼に謝った。

「あー……もしかして、気にしてたのか？」

「いや、別に。其処まで気にしちやいないよ」

「何か、悪かったな」

槍の少年が申し訳なさそうにして来た所で、彼は苦笑して許した。特に気にするものでもないし、槍の少年も悪意を以て笑った訳ではないのだ。これ位で目くじらを立てる事もないだろう。16歳と言

う若さにしては妙に大人びた思考で彼はそう判断する。

最初に敬語を使い合っていたのは、あくまでオンラインゲームをする上でのマナーの一環としてのものだが、今の彼らにそれは必要は無かった。

「なあ、今ソロでやってるのか？」

不意に槍の少年から彼は話しかけられた。それに対して彼はそうだと答える。彼の答えを聞いた槍の少年は、腕を組んで軽く唸った後、彼にこう提案した。

「……だったらよ、俺と組まないか？」

どうしてまた？ と彼は槍の少年に訊くと、手に持っていた槍の柄を掌でコロコロと転がしながら答えた。

「いや、まあ何だな。ソロでやっているのもちよつと飽きが来てな、それに此処で同族に会ったのも何かの縁だと思ったださ」

どうか、と最後に少し心配そうに付け加える槍の少年。

当時NFOをプレイする者たちは大抵が人間、獣人、エルフなどの有名所を選び、昆虫人等の種族をイロモノ種族と警戒していたのだ。槍の少年の提案にはそう言った事に対する一抹の寂しさという感情によるものも含まれていたのかもしれない。

断る理由もないし、ソロよりコンビを組んだ方が効率が良いのかもしれないな。

彼は槍の少年の提案を聞いて考える事数秒後、分かった。と承諾する事にした。

「おっそうか！ いやぁ助かるぜ！」

槍の少年は嬉しそうに笑った。

「俺の名前はプロムナードって言うんだ、あんたは……ツェイトって言うのか。変わった名前だな」

プロムナードは彼、ツェイトの頭上を目を凝らして見ながらそう言う。プレイヤー同士が近付くと、頭上にプレイヤーを現すマークが現れ、それを調べるとそのプレイヤーの名前が浮かび上がって来るのだ。

そしてそれは各種族で違い、昆虫種族の場合は甲虫の翅を模したマークが浮かび上がって来る。

「そう言うお前の名前はどんなんだ？」とツェイトが尋ねた所、プロムナードは嬉しそうに語る。

「おおっ 良い質問だな。俺の名前は……」

早朝の頃。カジミルの村に丁度夜明けが来た時間帯に、ツェイトはパチリと目が覚めた。まだ眠気が残るせいかな、普段は青白く光る両の眼に宿る光は弱々しかった。人間で言う所の眼がシヨボシヨボしているというやつだ。

夢、か。

先程夢の中で見たのは、ツェイトがNFOを初めて間もない頃にプロムナードと出会った時の事だ。

互いにまだハイゼクタ に変異しておらず、昆虫人のままだった。

確かプロムナードの名前の由来は、当時祖父が好んで愛用していた煙草の名前からきているんだっけか、とツェイトは夢で見た、というよりは昔の事を思い返していた。

NFOの世界ではプレイヤーが登録した誕生日の日が来ると、年齢が加算されると共にPCの外見もその年齢に合わせる様に調整するか否かと言う選択肢が出る。それによって、電脳世界の中であっても歳をとる事が出来るし、逆に永遠に歳をとらなくする事も出来るのだ。ツェイトとプロムナードは前者を選び、今に至るまでその外見年齢はリアルな年齢と同じ様にしていた。

体を起して唸り声の様な欠伸をしながら眼を指で擦ろうとした時に、ゴツゴツと硬い物が顔にぶつかった。

自身の腕を見てそれが人間のものでは無い事を思い出し、更に周囲の風景を見渡す。

まあ分かり切っていた事ではあるけれど。

これは夢じゃないんだな、と自身の現状をツイイトは再認識する。此処が現実だと理解してはいても、だがしかし、いやもしかしたら、とコレがNFOをやり過ぎた所為で見ている夢幻なのではないのかと淡い期待を抱いてしまった。

しかし、それも眼が徐々に覚めてくればそれがただの願望に過ぎないものだという事が嫌でも分かる。

空を見上げれば、日が昇り始めたばかりらしく、まだ暗い。少し早すぎたかなと思うが、二度寝をする程の眠気もツイイトは無い。

このままでいるのも手持ち無沙汰なので、ツイイトは立ち上がってストレッチをしてみる。

腕を回し、屈伸を行い、思い付く限りの柔軟体操を行う。全身を外骨格で覆っているにもかかわらず、人のそれとさほど変わらない動作をおこなう事が出来る。どんな攻撃にも耐えうる頑丈さと、極限まで固められたゴムの様な弾力を持つツイイトの外骨格だが、持ち主の多少の無茶にも応えてくれるしなやかさを持つ。全く以て謎の物質構造だ。

一通り準備体操が済むと体が程良く解れ、それに合わせて徐々に動きを激しくさせた。

反復横とびからバク転、そして片手で逆立ちを行いそのままバク宙。激しくその巨体を動かしているにもかかわらず、木々や枝にぶつからずに全てをこなしているのはツイイトがいる場所が開けた場所だからか、それとも長年NFOで培われてきた経験か。

今度は突きと蹴りを織り交ぜた軽いシャドーボクシング。四肢を

奮う度に、大気が裂ける音と共にツェイトの足元に落ちていた木の葉が勢いよく舞い上がる。

頭に描くのはNFOの頃にこなしていた動き、ツェイトの戦うスタイルはもっぱら素手による格闘戦である。

NFOのPCプレイヤーキャラであるツェイトは、予備加速を必要としない爆発的な加速力を活かして相手の懐まで詰め寄り、見た目を裏切らない剛力さで防御を物ともせず相手を叩き伏せる事を得意としているのだ。

NFO内で格闘技や武器で戦う場合の動作は、概ねプレイヤー自身によるマニュアル動作だった為、センスが問われる所があったが、ツェイトはその点に関しては常人より良いものを持っていたらしい。加えてNFO経験10年と言う経歴は伊達では無かったのか、ハイゼクタに変異する前の昆虫人の頃から、ツェイトは格闘技を戦闘スタイルとしている職業に就いていた事も相まってその腕は上達し、NFOというネットゲームの世界においてツェイトと言う電脳アバターは、NFO中では屈指の格闘能力を誇るPCプレイヤーキャラになったのだ。

体を動かして行く内に気分が高揚して行つたのだろうか。ツェイトは軽くジャンプしてから鋭い回し蹴りを放つ。その先にあるのは森の中に生えている木々の一本。それが先の蹴りを受けて、激しい音を立ててへし折れてしまった。

「あつ」

高まるテンションに任せて蹴り折ってしまったツェイトは、他の木を巻き込みながら倒れていく木を慌てて抱きかかえる。

まずい、やってしまった。今ので村人達が起きてしまわないだろうか？

凄い音を立てて木が折れたので、もしかしたらという別に悪気があつてやったわけではないのだが、この姿を村人たちに見られて妙な勘違いをされてもされやしないかとハラハラした。

木を抱きかかえたままきよきよと回りを見回すツェイトの姿は、セイラムやウィーヴィルが見ていたらその姿から繰り出すちよつとコミカルな動きに大笑いしていたかもしれない。

「……お主、何をやっているのだ」

ギクツと声のする方へとツェイトが視線を向ければ、そこには斧を担いだウィーヴィルがいた。腰につるしたロープなどの用意から察する所、木を切りに来たのだろうか。怪訝そうにツェイト見えた。

「……すいません。体を動かしてたら、つい」

下手に誤魔化すのも不味いのでここは素直に謝っておく。それに、勝手に敷地内の木を折ってしまったと言う負い目もツェイトにはあった。

しかしウィーヴィルは気を害した様子もなく、ひらひらと手を振る。

「丁度薪に使う奴を切りに行く所だったから手間が省けた。それを裏庭まで持ってきてきてくれないか」

「ええ、それならお安いご用です」

「とはいえ、人さまの家の近くの木を勝手に折るのは感心せぬな」

「……ホント、すみません」

今度やる時はもっと遠い所でやる事にしようと、ツェイトは先程折った木を担ぎながら反省した。

「と、まあこんな所がワシらが住んでいる世界の事情だ」

運び込んだ木を裏庭である程度薪用に割った所で、ウィーヴィルはツェイトにこの世界の常識について色々と教えてくれた。

ウィーヴィルは薪割り台用の切り株に腰掛け、ツェイトは地面に座り込みながらのマンツーマン形式だ。

内容はツェイトが一人で出た時に必要になる知識を軸に、昨晚の国家間の事や歴史について、である。

流通している通貨は全種族通して共通しており、NFOと同じ通貨であるジェネを使っていた。

100ジェネあれば街の宿で食事つきで一泊する事ができ、1000ジェネあれば街で1カ月は余裕をもって暮らす事が出来るそうだ。

NFOの頃は初期の武器だけでも500ジェネは必要だった事を考えれば随分と物価が安い。それだけに所持金が全て無くなってしまった事が悔やまれる。

歴史の話に移った際、ツェイトはウィーヴィルからこの世界の事について話を聞いて困惑した。

ウィーヴィルから聞かされたこの世界の文明は、ツェイトがいたNFOの世界と比べると進歩するどころか退化していたのだ。一体何があったのかと尋ねてみると、驚くべき内容が返って来たのだ。

大昔の大戦争期。当初は領土の取り合いが発端となって始まったその争いは、様々な経緯を辿って他の種族を憎み、滅ぼし合う殲滅戦へと発展し、その結果世界は一度滅びかけたらしい。

その影響で多くの国や種族、文明がその戦争で失われ、辛うじて生き残った種族達は荒廃した世界でまで争い合う気は無かつたらしく、その時だけは互いに力を合わせて今日まで生き延びて来た。そんな先人たちの築いてきたものが、今の文明の根幹にあるというわけだそうだ。

そのような歴史があるからか、現在は人間、亜人間問わずそれぞれの関係は表面上は悪くは無いらしい。

表面上、と言うのは大昔に起こった種族間で起きた争いの火種と言うものはそう簡単に無くなる事は無いらしく、世界各国では己の種族こそが優良種だと声高に叫んでは騒動を起こす輩が出ていたらしい。

尚、他の種族の国に行く場合は、しかるべき場所で手続きをすれば普通に入国する事が出来るそうだ。リアルに当て嵌めるならば外国に行く様な感覚なのだろう。

中にはそのまま永住する者もいるとの事なので、在日よろしく在エルフ国の獣人なんて言う者も珍しくは無いとはウィーヴィルの言葉。

凄い歴史を辿ってきたのだな、とツェイトは話を聞いてつくづく思った。

「まあ一回で全ては覚えられんだろうから、此処で滞在していく中で徐々に慣れて行けば良いだろう」

「ありがとうございます。暫くお世話になります」

「かまわんよ。娘の恩人で、プロムナードの探していた友人となれば無碍には出来んからな」

過去にウィーヴィルはプロムナードに助けられた事があるらしく、ツェイトを助ける事がプロムナードへの恩返しに繋がるとなれば出来る限りは力を貸すそうだ。何だか至れり尽くせりで、ツェイトは感謝と共に少しだけ申し訳なくなつた。

話を聞く限りでは、ウィーヴィルは随分と物知りだ。それもこの国家近辺だけでなく世界の歴史についても詳しい。一介の村人が知っている知識にしては些か度を越している感が否めないが、これも昨晚ウィーヴィルが過去に旅をしていた事と関係しているのだろうか、と話を聞きながらもウィーヴィルの正体にほんの少し疑問を抱いた。しかし疑問を挿し挟む余地など今のツェイトにはないのであまり考え無い事にした。

そしてこの世界、というか大陸に名称があつた。

その名はネオフロンティア。ゲームの頃と全く変わらない名でこの世界の人々からは呼ばれていた。誰が始めにそう呼んだかは流石にウィーヴィルも分からない。

「この位にしようか。随分と話し込んでしまったしな」

そう言われてツェイトが空を見上げてみれば、空には太陽が昇っ

ており、暗かった空もいつの間にか青空に姿を変えていた。流石に昼にはなつてはいないと思うが、それなりに時間が経っているのは確かだろう。

「ワシはいったん家に戻ろう。もうセイラムが起きて食事を用意してくれている頃だろうからな。お主の分をセイラムに持って来させよう」

「……お手数かけます」

ウィーヴィル達の家の食事は当番制で、一日ごとに二人で交代に行っているらしい。ではな、とウィーヴィルが家に戻ろうとした時、家からセイラムが出て来た。

気だるげに腕を回しながらやって来たセイラムは既に寝間着から着替え、初めて会った時の様な丈の短い巫女服の様な衣装を着ていた。

「おはよう二人とも」

「おはよう。どうした？ まさか腹が減って我慢が出来なかったのか？」

ウィーヴィルがちょっとだけ呆れた様に尋ねると、セイラムがむすっと拗ねた顔をした。

「そんな訳ないだろ、今起きたばかりなんだから」

「………昨晚こつそりツェイトの所に行っていたのが原因か？」

ギクリとセイラムの顔が引き攣って来る。

「……な、何の事だろう」

「お主がワシと入れ替わる様に家を出たのは知っておる」

きつぱりと、全てを見透かすかのように言い切ったウィーヴィルの口から続いて溜息が出た。

「……セイラム、後で話があるから家に入っておれ。ツェイト、お主には食事を持ってくるからそれまで残りの薪を割って置いてはくれんかな？」

話しかけづらい雰囲気にはツェイトは黙って頷いて了解し、セイラムは地雷を踏んでしまった事に気づいて苦虫を噛んだ様な顔をしていた。

二人が家に入ってから数十秒後に、ウィーヴィルの雷がセイラムに落ちた。

空気が震えるのではないのかと言う程の怒鳴り声がかジミルの村全体に響き渡り、その怒鳴り声に驚いた鳥たちは止まっていた木から慌ただしげに飛び立って行ってしまった。

「……言わんこつちやない」

セイラム達の家に一瞬だけ視線を向け、ツェイトはその巨大な手で摘んでいる斧を振るって薪を割る。

早速言われた通り薪割りをしていたのだが、その巨体では人間サイズの種族が使う斧はおもちゃの様なものだ。軽く振りあげて薪の真上からストン、と斧の刃を落とすとあっさりと割れてしまう。

薪を割っていると言うよりは、小さなナイフでゴボウを切っている様な感じだった。

天気は快晴、気温も程良い暖かさ。ツェイトにとって初めて過ごすカジミルの村の朝は至って平和であった。

「お、おおお……痺れて上手く立てない」

ウィーヴィルの怒鳴り声が聞こえてからしばらくすると、セイラムが千鳥足で危なげに家から出て来た。その手にはツェイトの食事が乗せられた皿を持っていたが、絶妙なバランスで中身を溢す事は無かった。

昨晩は結局あーだこーだとセイラムはツェイトと駄弁っていたら深夜に突入し、結局眠気に襲われたセイラムはそのまま部屋に戻ったのだ。しかし次に起きた時は既に昼にまで達しており、「疲れていたならまだしも、夜更かしをして寝坊するとは何事か！」とウィーヴィルにその点について大層叱られたらしい。しかも正座付きでこつてりと搾られたらしく、セイラムの頬はどこかげっそりしていた。

フラフラと歩いては時折来る足のしびれに悶絶しながらもヨタヨタとやって来るセイラムを、ツェイトは頼まれていた薪割り作業をいったん中止して迎える事にした。

「だから早く寝ると言ったのに」

それ見た事かと言うツェイトの言葉を聞き流し、というか痺れが

きつくて聞いている暇がないのかセイラムは食事の入った皿をツイイトに渡すと近くの地面に転げるような勢いで倒れ込んで来た。

「うう、何でツイイトだけ起きれたんだ……？」

「うーん、習慣だろうな」

ツイイトは過去にNFOを徹夜でプレイしていた時があっても、社会人として仕事に遅刻する様な事だけはしなかった。

そんな事を度々していたせいも、短時間寝るだけでもそれなりに睡眠は事足りると言う、些か不健康な体質を手に入れたのだ。そしてそれはこのハイゼクターの身になっても健在であった。

「時間にキツチリしてなきや色々辛い環境だったからな」

口周りの外骨格を開いて口を露出し、貰った食事を平らげながらそう言つてツイイトは記憶の中にある仕事の風景を思い起こした。もともと、これは現代社会で働く者に必要なものであつて、此処の様な村落でそれが必要かは定かではない。

まだ慣れていないのか、露出したツイイトの剣山の様な牙の生えた口を見て多少驚いていたセイラムは、ツイイトの話を聞いてふと思つた。

「ツイイトのいた所は、時間にくるさかったのか？」

「まあ、なあ」

セイラムの質問はあながち間違いではない。ゲームの世界であつてもリアルな都合との折り合いでプレイできる時間帯や日にちは人それぞれなのだから。

「なあ、昨日の事、覚えているか？」

「昨日？……何の事だ？」

突然問われた質問にツイイトは自分にとっては些か小さい茶碗片手に首を傾げてはて、何だったかなと思いつく。その様子を見てセイラムは少しだけむくれた。

「忘れたのか？ 昨日の夜、明日になったら話してくれるって約束だったじゃないか」

そういえばそんな事を言ったな、と昨晚の事を思い出した。あの時は適当にあしらう為の方便だったのだが、セイラムはしっかりと覚えていたらしい。

約束をしたからには話した方が良かったろう。最初に出会った彼女が何も知らないと言うのも何だか悪いし、とツイイトは昨晚ウィーヴィルと話した内容をセイラムに教える事にした。といっても、大分内容をぼかしたものだ。

今のツイイトの身の上は「かなり辺境の森に住んでいた昆虫種族で、友人を探す為に旅をしていた」という内容になった。実際プロムナードを探しているのは事実だし、NFOの頃は今まで魔蟲の大森林の中をぶらついていたので辺境に住んでいたのも間違いではない。辺境は辺境でも、魔境であるが。

ちなみに魔蟲の大森林の事をウィーヴィルに尋ねた所、その場所は軍でも歯が立たない程に強力なモンスターが跋扈する場所なので、超危険地域に指定されていて立ち入り禁止にしているとの事だ。

昨晚ウィーヴィルとでつち上げた自身の身の上をセイラムに話す

と、納得してくれたいらしい。

「そっか、友達を探して旅をしていたのか」

友達思いなんだな、とセイラムに言われてツェイトは照れ臭そうに頬を掻いた。

「ここ等辺の地理が全く分からなかったから、セイラムに会えたのは助かった」

「何言ってるんだ。助けられたのは私も同じだ。私なんて命を狙われていたんだからな」

「なら、お互い様だな」

「ああ、そうだな……っと！」

そう言っつてセイラムは体のばねだけを使って勢いよく立ち上がり、体に付いた土や草を払い落しながらツェイトに尋ねた。

「ツェイトはこの後何か予定はあるのか？」

基本的にウィーヴイルから話を聞くというのがツェイトがこの村に滞在している理由なので、それ以外は正直な所全くない。ツェイトはその事をセイラムに話したら……。

「じゃあ、今日は村の中を回って見ないか？」

と、返って来た。

ツェイトは別に構わないが、セイラムの方は何か用事があるんじゃないのかと尋ねると、少々詰まらなさそうに両手を頭の後ろに組んでぼやいた。

「今日は村から出るなとウィーヴィルから言われているんだ」

昨日の今日だ、出会った場所は此処から大分離れた場所ではあるが、またあの時の兵士達に行くわさないと限らない。

セイラムを狙っているのか、それともその時出会ったのがセイラムだから襲われたのかは定かではないが、ウィーヴィルはそこを警戒しているのだろう。セイラムもやる事が無くなって手持無沙汰というわけだ。

「じゃあ、案内頼めるか？ その前に俺はウィーヴィルさんに話をして来る」

「ああ、じゃあ待ってるよ」

セイラムが歩いて行く後ろ姿を見送りながら、ツェイトは食べ終わった食器を乗せた盆を手に持ってググツとその巨体を立ち上がり、そこでふと思った。あの時の兵士達は結局何だったのだろうか。ウィーヴィルにその事を訊いても分からないと返ってきたが、正体の分からない連中が、しかも害意を持っているというのは良い気分では無い。

ウィーヴィルも村に皆にその事について注意を促すらしい。

程なくしてウィーヴィルに話を伝えると「村を知るのも、この世界に慣れる一環だろう」と返事が返って来たので、ツェイトはセイ

ラムに連れられて村の中を見て回っていた。

軽快な足取りで進むセイラムの後ろを、鉄巨人の如き姿のツェイトがのしつと足音を立てながら付いて行く。二人の身長差はおよそ2倍以上、はしゃぐ子供の後を付いて行く父親の構図に見えなくもない。

夜と昼間じゃ雰囲気が変わるな。

ツェイトは村の風景を眼にしては感嘆の声を上げた。

住民や動物等、色々と差異はあるが、カジミルの村の有様は在りし日の日本の農村風景に近かった。

鍬を振って畑作業を行う者、狩りで取れた狩猟品や民芸品を売りに街に出かける者。夜の間には見れなかった人々の営みと言うものが此処にあった。

「私達の村は、村で取れた作物や、狩りで捕まえた動物やモンスター」の部位を近くの都で売ったりして暮らしているんだ」

男達は狩りや出稼ぎで家を留守にし、留守にした家を女や子供達が農作業をしながら守っているらしい。だが女でも普通に狩りに出る者もいる。セイラムもそんな一人だ。

「良い所だな」

都会の様な騒がしさの無い、しかし寂れてはおらず長閑な中に活のどかき活きとした活気が見て取れるこの光景が、ツェイトは好きになった。

それと同時に、晩年のサラリーマン達が定年退職した後田舎に暮らしたがる気持ちがなく分かってしまいちよつと複雑な気分にな

なる。

「そうか？　そう言ってくれろと案内した甲斐があるな」

自分の住んでいる村を褒められた事が嬉しいのか、はツェイトの隣を歩くセイラムはニコニコと笑っていた。

セイラムに案内されている道中で村人と会ったが、ツェイトはそれほど警戒されてはいなかった。一瞬だけ驚いた様に見つめてくるが、それだけだった。中にはあちらから先に挨拶をして話して来るものもいたのだ。これにはツェイトが逆に驚かされた。

昨晚ウィーヴィルが大丈夫だと村の皆に言い聞かせたからか、それとも今セイラムと他愛もない話をしながら歩いているツェイトの姿に恐れを感じなかったからか、それは当人であるツェイトには分からなかった。

それから適当に村の中を連れられていると、開けた場所で蔓を編み込んで作られたボールを蹴って遊んでいる10歳未満と思しき子供達がいるのを見つけた。

その中には少年達に混じって一回り小さな少女も参加していた。一見すると大人しそうな感じのする少女だが、跳んでくるボールを背中まで伸ばした黒髪を揺らしながらわたたと必死に蹴り返している様がツェイトには微笑ましく見える。

足を止めてジッと興味深そうに見ているツェイトの視線の先に子供達がいる事に気付いて、セイラムもそれを見た。

「あー、あれ私も昔やったな。他の男達より上手かったんだぞ」

「それは、セイラムらしいな」

「ん、どういう意味だ」

「元気があって大変宜しいっていう事だよ」

と二人で話している内に、少女の蹴りでボールはあらぬ方向に飛んで行ってしまい、ツェイトとセイラムの下へと転がって来た。

幼い子供ならではの視野狭窄か、少女はコロコロと事がるボールの後を追いかけるのに夢中で前方にツェイトがいる事に気づかない。最初は何やってんだよー、とからかい混じりに野次を飛ばしていた少年達だったが、跳んで行ったボールの先にいるツェイトの姿を見てビタツと動きを止めた。しかし少女はまだ気づいていない。

少年たちが慌てて少女に何か言おうとジェスチャーを送っているが、そんなものにも気付かず少女はツェイトの足元へぼてぼてという音が聞こえそうな足取りで駆けよっていく。

「はあ、はあ、ふう……え？」

息を切らせながらボールを取ろうとしたその時だった。上から巨大な手がボールを掴み、少女の前にそれを差し出して来た。少女はそこでようやくツェイトの存在に気が付いた。ツェイトが屈んでボールを取ったのだ。

しかし小さな子供の視線から見たツェイトは日当たりの都合上顔に影が掛かり、その両の眼は淡く光っていた。大きさと外見も相まって、ハッキリ言ってかなり怖い。

「う、ふええええ……」

その結果、少女はツェイトの顔を見てビクツと体を震わせた後、そのクリっとした目からポロポロと大粒の涙を流して嗚咽を上げ始

めた。頭の生えている触覚も感情に合わせて下に垂れてしまっている。

「え？ あ、おい、待ってくれ……」

極力そつと優しくボールをあげたつもりだったけど、そんな優しいさも自身の外見で台無しにしまった様だ。

泣きべそをかく少女を見て焦ったツェイトは、何とかしてくれ、とセイラムに視線で訴えると、何となく意図を理解したセイラムは溜息をついて少女の元へ行き、優しく抱きよせて宥める。

「大丈夫だニニ、このおじさんはニニに球を返してあげようとしていただけだ。怖くない、大丈夫だ」

少女ことニニを抱きしめ、頭を撫でながらセイラムは優しく語りかける。

母親の様に子供をあやすセイラムを見て、あんな顔が出来るのかとツェイトはセイラムの意外な一面を見た。

程なくして誤解の解けたニニにツェイトはボールを返す事が出来たのだが、その際様子を窺っていた他の子供たちが意を決してツェイト達の所へ駆け寄り、怯えながらもニニを守る様にしてツェイトの前に立つと「ニニに変な事すると酷いぞ！」と威嚇されてしまった。

その際もセイラムに頼んで誤解を一応解いてもらったが、未だにツェイトを見る目はどこか厳しい。それでも、別れ際にニニがおずおずと手を振ってくれたのはツェイトにとっては嬉しいものだった。

「そついえばセイラム、俺の事をおじさん呼ばわりしたが、あれはないだろ」

道中でツェイトは先程のやり取りを思い出した。宥める為とはいえ、おじさん呼ばわりされたのはちょっとショックだった。

「え、違うのか？」

「俺は26だぞ」

「え」

セイラムはツェイトを凝視した。元の世界の若者だったら20代後半ともなればおじさんと呼ぶかもしれないが、昆虫人はそうではない。昆虫人の寿命はおよそ300年、その点を鑑みてみればツェイトの26歳なぞ立派な若者の部類である。ハイゼクターには詳しい設定が無いので寿命については定かではないが、ツェイトは昆虫人と同じくらいなんじゃないのかと考えている。セイラムに至ってはそう信じていた上での驚きだったのだろう。

実際には外見年齢を人間に換算して26歳という設定にしているのだから、本当はもっと歳がいつている筈なのだが、ツェイトはこの所をすっかり失念してリアルな歳を述べたので、真相は今の所闇の中だ。

「セイラムは俺が何歳に見えたんだ？」

「……130歳位かと思った」

「そんなに老けて見えたのか」

「……結構」

セイラムにそう言われたツェイトは咄嗟に自分の顔を手でペタペタと触って確認するも、手に感じたものは硬い外骨格の感触だけ。

というか実際に130も歳を喰っていたら精神的に枯れてそうだから。そこでツェイトはふと自分よりも20年早くこの世界に来たとプロムナードの事を考えた。あいつはこの数十年間、どんな気持ちで過ごしていたらどうか、と。

友人の事について思いを馳せていると、セイラムが申し訳なさそうな顔をして自分の方を見ていた事にツェイトは気付いた。

「その……歳の事で気を悪くしたんだったらごめん、あやまるよ」

どうやらセイラムは自分の発言でツェイトが気を悪くしたのではないのだからと勘違いしたらしい。誤解を解いてやりたいが、本当の事を話す訳にもいかない。なのでツェイトは適当に内容をでっち上げてセイラムの勘違いを否定した。

「いや、その事に関しては別に気にしちゃいない。友人の事を思い出したただだよ」

「ツェイトが探しているっていう、友達の事か？」

「ああ、あいつも大分老けた顔をしているからな」

ツェイトはそう言ってプロムナードの姿を思い浮かべた。

全身を赤黒い外骨格の鎧で身を包み、左右の側頭部からは曲がった鋸の様な角が生えていた。そしてその顔は虫、と言うよりも髑髏に近い。あれも見様によつては老けた外見と言えなくもない。いや、老け顔だ。そうしておこう、うん。

プロムナードがおじさん呼ばわりされたらどんな反応をするんだろうか、もしかしたら既に呼ばれているかもしれないが。

まあ言われた所であいつの事だから『おじさん？ 女性限定ならおじさまと呼んでくれると嬉しいかもな』と言っつんじやなかるうか、と胸を張って豪語する相棒の姿をツェイトは幻視した。

「あいつなら、それすら楽しむんだろっなあ……」

「……？」

セイラムはツェイトの呟いた言葉の意味が分からず、首を傾げながら隣を歩いた。

空の上に登った太陽はいつの間にか大地へと傾き始め、青空はほんのり茜色へと姿を変えつつあった。

「ツェイト、あの娘」

「ん？ あの時の女の子か？」

空が夕焼けに染まり始めて来た所で、家へと返ろうとした二人は道中で昼間に少年達とボール遊びをしていた少女、二二と出会った。二二は少年達とは無く、母親と思しき女性と手を繋いで歩いていた。恐らく幼い二二の迎えに来たのかもしれない。母親の方はツェイトの姿を見て驚くも二人に会釈をした。

ツェイト達もそれに釣られて会釈をすると、母親の方がセイラムを手でちよいちよい招き寄せてきた。セイラムは首をかしげつつも

ちよつと言つて来る、とツェイトに伝えて二二達の所へ行つた。
そこで母親がセイラムに何かを話すとセイラムが合点が言った様に頷き、ツェイトの方へ向いた。

「ツェイト、二二が話したい事があるそうだぞ」

俺に？ 首をかしげていると、セイラムが二二の肩に手を置き、優しく押した。すると二二がセイラムと母親の下を離れてツェイトの下へちよこちよこ歩いて来た。それに合わせてツェイトも屈んでなるべく二二の視線に合わせる様にする。

二二がツェイトに近付いてその顔を見た瞬間、へにやつと眉毛を八の字に描いて泣きそうになるも、おずおずとツェイトに話しかけた。

「あ、あのね。あのとき球をとつてくれたのにお礼いえなくてご、ごめんなさい」

「……気にしなくて良いよ。俺もこんな顔だ、驚かせてごめんよ」

ぼつぼつと話す二二の言葉にツェイトは努めて優しく返す。そのおかげかは分からないが、二二の顔からそれなりに怯えが取れたようにも見えなくもない。

話が済んだ所で、二二の母親がセイラムと一緒にやって来た。

「すみません、娘が昼に迷惑をかけたみたいで……」

「いえ、そんな事はありません。私が無自覚に子供に接したのが不味かったのでしょう」

どうもこの村に来てからは外見で変な誤解を受ける事が多い気が

する。見た目はこれでも中身は現代社会の荒波を汗水流して生きる只の人間でしかないのだが、それを伝える事はツェイトには出来ない。

程なくして二二達親子は、ツェイト達と別れて帰って行った。別れ際に二二が母親に手を繋いだままツェイトに手を振って別れを告げた。あの時とは違い、二二に怯えが見えなかったのはツェイトは嬉しかったが、その際の二二の言葉にちよつとシヨックを受けた。

「ばいばい、おじちゃん……か」

「……あー……」

事の原因を作ってしまったセイラムは、ちよつとだけ肩を落としてボソリと呟くツェイトの後ろ姿を笑うに笑えず、何とも言えない顔で頬を掻いた。

日が沈み切り、民家に明かりが灯り始めた頃にキイトの屋敷で会合が始まった。表題は先日セイラムを襲った兵士達の事についてだ。食事を済ませたセイラムやウィーヴィルを含めた村人たちは屋敷内の広間に集まり、ツェイトは屋敷の中に入る事が出来ない為、広間と障子一つで繋がっている庭の方に通されてそこで腰掛けていた。

当初は余所者である自分が村の会合に立ち会うはどのようなだろう、とツェイト自身は辞退しようとしたのだが、今回の件で件の兵士を見た数少ない遭遇者である為、彼らの情報を知る為にも欠席をさせるわけにはいかないというのが、村長のキイト及び他の村人達の意

見だった。その際、会合に参加していたランだけが少し複雑そうな面持ちでいたが、それを気にする者はいなかった。

早速会合が始まったが、あの兵士達の正体は何なのかと言う事、それが分からなかった。セイラムとツイイトが彼らの特徴を話す、彼らは全身を隙間なく武装し、頭部に至ってはマスクで頭部が全て覆われている。その為どんな顔をしているのか判断が付かない。

同族か、それとも別の亜人種族なのかは見当がつかないが、それでも分かった事もある。ツイイトとセイラムが見た兵士達の外見等から察するに、彼らの体つきは昆虫人や獣人等の極めて人に近い体をした種族なのではないかという事だ。

そして次に、今後の対処法だ。もしも未だに彼らがセイラムを追っているのだとすれば、いずれこの村の近くにも表れる可能性がある。何もしないでいれば、今度はセイラム以外の誰かが襲われという可能性もあるのだ。

国から兵士を派遣してもらおう？

無理だろう。相手がどの程度の規模の構成で、それでいてどれくらい被害が及んでいるのか分からないのだ。しかも襲われた形跡と言うものが無い。襲われたセイラムの傷すらもう完治しているのだから証拠と言うべきものは証言だけだ。しかし、ただの村人の言葉だけで国が動くとは思えない。

暫く村から出る事を禁止する？

論外だ。ある程度貯蓄があるとはいえ、それだつて有限だ。それに何時現れるかも分からない者達の為に閉じこもっている等と言うのはばかげている。

ならば立ち向かうしかない。村人たちの意見はそこに帰結した。

昆虫人達の身体能力は高い。それこそ一介の村人ですら通常の人間の倍以上はある。だがそれで万全とは言い難い。

その時、最初に誰がその視線を向けたのだろうか。一人、二人、と広間にいた村人達が何かに気付いたようにある一点へと視線を向けた。

視線の先にいた者を見てウィーヴィルはギョツとした顔をし、セイラムはあつと合点が言った様に納得してそこを見る。そこにいたのは

俺？

軒先の庭で腰をおろして村人たちの会合に参加していた甲虫の巨人、ツェイトだった。皆から一斉に眼差しを向けられて一瞬だけ怯む。

ウィーヴィルが慌ててキイトに待ったをかける。

「村長、しかしこの者は……」

「分かっています。でも……」

キイトはツェイトの素性についてウィーヴィルからは深くは聞かされてはいないが、いずれ村を出る事は知っている。しかし、この非常時では一人でも助けが欲しい。願わくば、ツェイトの手も借りたいというのがキイトの村をまとめる者としての本音だ。

セイラムの話が本当ならば、この昆虫種族の男はかなりの力を持っているのかもしれない。キイトはすまなさそうに目を瞑り、村人

たちは期待と不安の入り乱れていた視線でツェイトを見る。

ツェイトも話の流れ的に、自分に集まる視線の意味を汲み取っていた。

そして不安になるのだ。この世界で、果たして自分は戦う事が出来るのだろうか、と。

戦う、と言う言葉で思い返すのは、初めてこの世界に来てしまった時に戦ったワイルドマックとの一戦だ。こちらに怪我は無かったものの、ツェイトの心に大きな衝撃を与えた出来事であったのは確かだ。

飛び散る血肉、大地に沈んで動かなくなったモンスターの死体。

今度の相手は恐らく人型種族。今のこの体で戦えば、そうそう遅れはとらないだろう。しかし、相手を傷つける事、ましてや人の形をした生物に行くそれに対するの忌諱感がツェイトの心を竦ませる。

そんなツェイトの内心を知らずに、村人たちはツェイトを期待の眼差しで見つめる。これはツェイトからの返答を待っていると言う事なのだろう。

ウィーヴィルは止せ、と言わんばかりに咎める様にツェイトを睨む。対してセイラムは他の村人たちと同じようにツェイトに期待を込めた眼で見ている。

皆が見守る視線の中で、ツェイトが口にした言葉とは

あの後会合は順調に進んだ。今後兵士達に対する対処法は、力のない者は村の外への外出のは控え、やむを得ない場合は数人で固ま

つて行動し、何かあれば各自持っている笛を吹いて知らせるといった内容で皆納得した。

会合が終わり、皆が解散して行く中、ウィーヴィルとセイラムはこちらへ歩いて来るツェイトの下へ行つた。

セイラムが何かツェイトに話しかけようとしたのをウィーヴィルが手で遮り、ツェイトに問い掛ける。

「何故、自分から買って出たのだ。断ると言う選択も無いわけでは無かった筈だ」

セイラムが驚いてウィーヴィルに何か言おうとするも、ウィーヴィルに黙っている、と睨まれて何も言う事が出来なかった。問われたツェイトはウィーヴィルにやや力なく答える。

「あの場で断るなんて事、出来ませんよ。それにもし断ったら、村に居辛くなります」

ツェイトは村を助ける事にしたのだ。仮に断ろうものならばあの眼差しの裏返しとなれば、きっと自分の事を良い眼では見ないだろう。厄介者扱いと言う可能性も否定できない。

本音を言えば、遠慮したかった。しかし村で滞在する事と、早々に村を立ち去る事、その両方を天秤にかけた時、村で滞在する事の重要さの方がツェイトの中では重かったのだ。

損得勘定以外にも、自分を迎えてくれた事に対する恩もその中にはあったが。

「しかしお主、奴らと戦えるのか」

その一言で、ツェイトは凍りついた様に動きを止める。

「……戦えないのかな？」

ツェイトは何も答えない。しかし、その無言が答えだった。

ウィーヴィルは眉間にしわを寄せてきつく目をつぶる。

彼はプロムナードから話を聞いていたのだ。「多分、ツェイトは生き物を殺す事を躊躇うだろう」と言う事を、そしてプロムナード自身も最初はそうであった事も。

今はこの場にはいないツェイトの友の言葉が、まさに的中したのだ。

「ツェイト、よく聞いてくれ」

ウィーヴィルは正面に回り込み、正対してツェイトの眼を見て、言葉を紡ぐ。

「殺せ、とは言わない。だが、もし戦う時がきたら決して、目を背けないでくれないか」

でなければこの先お主が村を出た時、とても辛いものになる。その言葉が、ツェイトの耳に深く響いた。

その後の帰り道は誰も言葉を発する事無く、静かにそれぞれが部屋へ戻った。

ツェイトは裏庭の近くの岩に背もたれ、俯いた状態でウィーヴィ

ルの言葉を何度も思い返す。

分かっている、分かっているのだそんな事は。それでも、あの時
ワイルドマックを殺した時の感触と、恐ろしさが心の奥底に纏わり
付いて離れないのだ。

苦悩するツェイトのすぐ傍に、気が付けば人影があった。俯いて
いた顔を上げて見てみれば、それはセイラムだった。服装は昨晚見
たときと同じように寝間着姿だ。

何時の間に居たのだろうか、考え事をしていて気が付かなかった
のか。ツェイトは人影がセイラムだと確認したが、彼女の顔を見れ
ないでいる。

不意に、セイラムから話しかけられた。

「……戦えないってというのは、本当なのか？」

セイラムの言葉に軽蔑の色は見えない。果たしてどんな顔で自分
に話しかけてきているのだろうか、そう思うと、ツェイトはセイラ
ムの顔を見る事が出来なかった。

「ガツカリしたか？」

視線を合わせられずにいる自身を恥じながらも、ツェイトはポツ
リと返した。

「意外、とは思った。でも……」

セイラムも静かに言葉を返すが、何処か煮えきらない口調だった。
何か言おうとしては躊躇い、それを何度か繰り返してようやく話

すが……

「ツェイト、私は……」

しかしそこで言葉は途切れてしまふ。

「……ごめん、何でもない」

突然来てごめん。おやすみ、と普段より元気のない挨拶を済ませた後、速足にセイラムは家へと戻って行った。

セイラムが何を言いたかったのかは分からないが、少なくとも、自分が戦えないと言う事に関するものなのだろうと言う事だけは、ツェイトは察していた。

情けない。

自身に対してそう愚痴る。NFOの頃は平然とモンスターを倒し、それどころか時にはプレイヤーとすら戦って叩きのめした事すらあると言うのに、リアルファンタジー世界に来てみればこの有様だ。モンスター一匹殺しただけでその死にざまに恐怖し、目を背けたがる。そんな自身の臆病さが、ツェイトはとても恨めしかった。

明日からはウィーヴィルの指導を受ける傍らで、村の用心棒紛いの事もしなければなくなるのだろう。

出来ればあの兵士達とは二度と会わないでいたい。それは、ツェイトの切実な願いだった。

日付が変わり始め様としている深夜の森の中、その暗闇に溶け込むかのようにひっそりと、それでいて素早く駆ける人影が複数いた。彼らは深緑の衣装を身に纏い、軽鎧とフルフェイスのマスクを装着している。

もしもツェイトとセイラムが彼らを見たら驚愕するだろう。彼らはセイラムを襲い、ツェイトが撒いたと思っていた兵士達だった。彼らはツェイト達の事を諦めてはいなかったのだ。

兵士達はただ静かに、誰一人言葉を発する事無く森の木々の合間を走り抜ける。

まるで暗闇など意も介さないように闇夜の森を駆け抜けていた兵士達だったが、先頭を独走していた兵士が突然止まり、片腕を上げた。それに呼応するように後続の兵士達はピタリと動きを止め、先頭の兵士の相図が来るまでひっそりと身構える。

しきりに先頭の兵士が回りを確認し終わった後、手首を軽く動かして合図。すぐさま待機していた兵士達は先頭の兵士達の下へ駆けよる。

集まった彼らの視線の先には、明りの灯らぬカジミルの村があった。彼らは来た、来てしまった。ツェイトの願いを裏切る様に。

先行していた兵士が他の兵士に告げる。

「本隊に連絡。目標の住む集落を発見、次の指示を待つ」

そう兵士が言うと、言われた兵士は何も言わずに向きを変え、さつき通った場所を逆走して行った。

兵士達はジッと身を潜めて標的の村を見つめる。そのマスクの裏では、果たしてどの様な顔で村を見ているのか、それを知る者はいない。

ゆっくりと、しかし確実に平穏を脅かす輩は近付いている。彼らがその手を伸ばす日は、近い。

第3話（後書き）

内容はおかしくないか？

読む人に不快感を与えてはいないか？

そんな事を考えつつ携帯で文章のチェックをしてましたら、ラーメンのスープの中に携帯を落っことしてしまいました。

第4話（前書き）

お待たせいたしました。第4話投稿です。
誤字など変な箇所がありましたらご指摘お願いします。

突然ですが、投稿してから何回か見直してみた所、何やら書き忘れていた個所が発覚致しましたので一部修正も兼ねて後半部分の一部を改稿させて頂きました。
混乱させてしまう様な真似をしてしまい、大変申し訳ございませんでした。

第4話

今朝は何とも寢覚めの悪いものだった。ツェイトは弱々しく光る眼を明減させながらぼんやりと空を見上げた。

空には既に太陽が顔を出し、雲ひとつ見当たらない快晴の青空だ。まるで悩みなんてこれっぽっちも感じられなさそうに見えるのに対し、心の中の天気模様が曇天一色のツェイトはそれが少し羨ましかった。

昨晚の会合からウィーヴィルの言葉、そしてセイラムの事、その一連の出来事が睡眠欲と言うものをかき消してしまったのか、ツェイトはロクに眠る事が出来なかつたのだ。いくら短時間の睡眠で大丈夫な体質を持っているツェイトでも、殆ど寝ないと言うのはさすがに堪える。

そのおかげで、ツェイトは今が昼間であるにもかかわらず、ふわとした夢見心地の様な感覚が抜けずにいた。

彼らの所為、等とは言うつもりは毛頭無い。これも自身の胆力の脆弱さが災いしたものだから、責めるべきならそれは自分自身だ。

別に戦う、等と御大層な言葉を並べる必要はない。生物を殺める事に対するこの感情を何とかすれば良いのだ。が、言葉で言うのはとても簡単である。あとは心身がどこまでそれに追従してくれるかだが、それが難しい。

生きて動くもの、そう常識として認識している筈のものが、死と言ふ出来事により動かなくなる。

それによつて、長年認識していたものが崩れ去つて行く。これも一種の未知、そして、ツェイトが感じている感情は、未知に対する恐怖の延長線上のものと捉えても良いのかもしれない。

早い話が、ツェイトは殺す事も、死に対する免疫も無いのだ。血なまぐさい出来事とはほとんど無縁に生き、今まで培ってきたツェイトの倫理観が一線を踏みとどまらせていた。

親しい者の死に立ち会った事もなく、身近な死と言えば、精々路上や草木のある場所に転がる動物の死体を極稀に見る程度。どれも小さい、または人の形からかけ離れた生物だ。そしてその全てはツェイト自身が手を下したのではなく、別の外的要因によって死んだものだ。

しかしこれから相手をする者は己の手で叩かなければならない、ましてや犬猫等の小動物といった可愛げのあるものなどと言った事ですら当然ない。

これは、この世界に来たツェイトが最初に直面する試練なのだろうか。

朝起きてから挨拶を交わし、何時もの場所で食事を取るのだが、どうも違和感がある。というのはセイラムの態度だ。

ウィーヴィルは普段通りに接してくれたが、セイラムの態度は余所余所しかつた。今朝の食事もセイラムでは無く、ウィーヴィルが運んできてくれたのだ。

失望されたのか、と言えば何処か違う。ツェイトを避ける様に振る舞う仕草は、ツェイトに対して悪感情を持っているからと言う訳ではなさそうだ。

ツェイト自身も何と話しかけたら良いのか判断を付けかねているので、互いの距離は昨晚から平行線のままだった。

逆にウィーヴィルはツェイトのこの件については「これは自分自身の事だから、ワシが下手にどうこう言うよりも自分で考え、そし

て決めた方が良さだろう」と自身の意思で解決してもらおう方針らしい。

どうしても答えが出ない場合は後押しをするが、ウィーヴィルは出来るだけツェイト自身の考えで判断して貰いたいらしい。

現在ツェイトは眠気が取れない中、日課になりつつあるウィーヴィルの講義を受けていた。せっかくウィーヴィルが自分の為に時間を割いてくれているのだから、それを無碍にってしまうのは申し訳ない。と眠気に負けないように噛みしめながら話を聞いていたのだが、とある事態を知って眠気が一気に飛んだ。

今ツェイトが教わっているのはこの世界の言葉と文字についてだ。NFOの頃も、NPCとの会話には同じ言語が使われていたので、このNFOに酷似した世界で昆虫人達と言葉が通じる事に関しては仕様が同じなのか程度に思っただけでツェイトは特に疑問を抱いてはいなかった。

それは良い、だが問題は次の文字についてだ。

日本語が、書けない。

ウィーヴィルから借りた筆を摘み、墨をつけて和紙の様な質感の紙に自身の名前を試しに書こうと試みた所、何故か全く別の文字で書いてしまった。

ツェイトはひらがな、カタカナの50音字から思い付く限りの単語や文章を、紙が真黒になるまで書き続けてみたものの、どれも全てが変換されてしまっている。まるで昔からそれを学んでいたかのように。

文字そのものは見覚えがある。それはNFOの頃も度々お目にか

かったNFOの世界の文字だ。

NFOの文字は、象形文字に近い。それでいて、日本語と同じように50音字で構成されていて文章の作りも同じだ。簡単に言ってしまうと、NFOの文字とは漢字やカタカナ等がなくなり、ひらがなだけで構成された日本文字の様なものである。

ゲームの世界ではその文字の上から翻訳された日本語が浮かび上がって来る仕組みになっていたが、これはそんな範疇を超えている。覚える手間が省けはしたが、逆にそれが不安とも感じる。知らない間に頭の中を弄くり回されている恐れがあるのだ。弄くり回されたと言え、今の自身の体もそれに当てはまるので今更と言え、今更なのかもしれないが。

ウィーヴィルの講義がつつがなく終わった後、ツェイトはもはやこの村では所定位置となったウィーヴィル達の家裏庭にある岩を背にして腰かけ、そこら辺に落ちていた木の枝を片手でいじりながら思考に没頭する。

戦う事、殺す事、今後の事、そしてプロムナードの事。

様々な思考がない交ぜになって来た所でツェイトは深く深呼吸をし、考える事を一旦止めた。

どうも此処に来てから、思考が後ろ向きになり過ぎるきらいがある。こうまでして自分で自分の精神をガンガン削っているのが、一種の自傷行為なんじゃないのかとすら思えて来た。

重く考えるとは言わないが、もう少し気楽に考えるべきなのだろう。この世界に初めて来た時も、動く事を良しと判断したは誰でもない、自分だ。

せめてこの抵抗感をどうにかしないと……手始めに誰かの狩りにも同行出来ればと思うが、村の守りと認識されているかもしれないツェイトを外に出す事は村の人達は避けたいのではないだろうか。それに、生き物を殺すのに慣れる為、狩りに行ってきます。等と言ったらどんな反応が来るのか分かったものではない。となれば迂闊な事は言えない。

これはもしかしたらぶっつけ本番の可能性が高い、いよいよ覚悟を決めなければならなくなってきたのかもしれない。シヨック療法と言う事で無理やり慣れさせるしかないだろう。

嫌な物はこつちが拒んでも勝手に来るからな、とツェイトは一人ごちつつふらりと立ち上がり、気を紛らわすために村を回る事にした。

ツェイトがウィーヴィル達の家を通り過ぎようとした時、軒先で刃物の手入れをしているウィーヴィルとばったり会った。

布の上に斧やナイフ、鉈等が置かれており、手入れをしていたウィーヴィルはツェイトに気付いき、顔を上げて話しかけて来た。

「出かけるのか？」

「ええ、ちよつと散歩でもしようかと」

「そうか……あまり、無理はするなよ」

無理、とはツェイトが目下悩んでいる事についてだろう。気遣わしげにツェイトに言って来た。

「ありがとうございます。でも、いずれは慣れなきやならない事ですから、これは良い機会なのかもしれません」

私はそう思う事にしました。そうツェイトが答えると「それがお主の答えなら、言う事は無いのだが……」とまだ心配そうではあるものの、ウィーヴィルは納得してくれたようだ。

「そういえば、お嬢さんは何処へ？」

「食事を済ませてからふらりと何処かへ行ってしまったよ。恐らくは村の中だろう。しかし、何度聞いても変なものだな、セイラムがお嬢さんなどとは」

ウィーヴィルは可笑しそうに笑いだす。ツェイトとてセイラムにお嬢さんと言う呼び方がイメージ的に合わないのは承知の上だ。しかし、父親の前で娘を呼び捨てで言うのとははばかられる。故にウィーヴィルの前では一応の妥協点として、セイラムの事をお嬢さんと呼んでいるのだ。

「おおそつだ、もしセイラムに会うのなら、一つ頼まれてはくれな
いか」

何かを思い出したようにウィーヴィルは立ち上がり、家の中に戻って笹に似た大きな葉で包み、細い紐で縛られた小包を持って来た。

「握り飯だ。これを渡してやってくれ」

「そう言う事でしたら……」

果たして必要なのかとツェイトは疑問に思う。昨日、セイラムに連れられて村を回ったのだが、その際セイラムは農作業をしている村人からキュウリの様な野菜を貰い、近くの井戸水で洗った後その

まま道中歩きながら丸かじりして食べていたのだ。今の時間帯からすると、もしかしたら既に現地調達している可能性がある。

自身よりもセイラムの事を良く知っているであろうウィーヴィルがそんな事を知らないとは考えづらい。ツェイトはそう思っていたが、どうやら裏があるようだ。

「話すきっかけと言うのも必要だろう」

成程、お見通しと言う訳か。ツェイトはウィーヴィルの意図が読めた。

何時までもぎくしゃくした関係と言うのは回りの空気を悪くするし、互いの為にはならないだろう。二人の仲を見かねたウィーヴィルからの、ささやかながらの手助けだった。

「……ありがとうございます」

深くは追求しない、それが無粋だとツェイトは感じたから。ウィーヴィルもそれ以上は言わずにツェイトの外出を促した。

「もし不要だったらお主が食べれば良いのだからな」

「そうならないように祈ります」

そんな軽口を叩き合いながらツェイトはウィーヴィル達の家を後にした。その大きな手に、ちよこんと葉包みの弁当を乗せて。

さてセイラムは何処に行ったのか、と村を回っていたツェイトだが、その道中何人もの村人に話しかけられた。

最初は驚きと緊張から始まったファーストコンタクトだったが、今ではそれなりに親しみを以て接してくれている。その理由も、ツエイトはおおよそ見当が付いていた。

ツエイトが力を貸す事、それだろう。中には期待してるよ、とツエイトの背中を軽く叩いて来る者までいた。

……何だか余計プレッシャーをかけられてしまった様な気がする。悪気なんてものは、これっぽっちも無いのだろう。ツエイトは悪意なき激励を贈った村人たちに何とも言えず、善処します、とだけ答えてそそくさとその場から逃げる様に去って行った。その際、慌てていたせいかツエイトは田んぼのぬかるみに足を突っ込んで、危うく転倒しそうになったのは御愛嬌か。

程なくしてセイラムは見つかった。見つかったにはいいのだが、何とも話しかけづらい状況だった。

場所は村の通りから外れた森の中、セイラム以外にその場所にいるのは村長の孫、ランだ。彼と何か話している様だ。

まさか、これは逢瀬の類という奴か？ セイラムの方は分からないが、ランの方はセイラムに気があるらしいので否定は出来ない、とツエイトは一瞬下種の勘ぐりをしてしまったがどうも様子が違う。遠目から見ると限りでは、二人ともそんな甘い雰囲気と言う訳でもなかった。むしろ真面目な表情だった。

幸いな事にセイラム達はまだツエイトの存在に気づいてはいない。丁度いいので彼女達の会話が終わった頃合いを見計らって弁当を渡そうと、ツエイトはある程度離れた所の木々に身を潜めて待機しようとしたのだが、セイラム達の会話が丸聞こえになっていた。

ツェイトの肉体は何も筋力だけが高いわけではない。その五感も、そこいらの生物より遙かに強化されているのだ。聴覚とて例外ではない。

しばし動揺するツェイトの聴覚器官に、セイラム達の会話が聞こえてくる。

「セイラム、警備に出るのは止めておけ」

「止めておけって、どうして」

「どうしても何も、お前が狙われているのかもしれないんだぞ。大人しく家にいるんだ」

「私が狙われているかなんて事、分からないじゃないか」

セイラムの声に徐々に怒気が含まれていく。ランはセイラムの事を思つての発言なのだろうが、それがセイラムは気に喰わないらしい。

「村の警備や戦いは、ウィーヴィルさんや今お前の所で預かっているあの男に任せれば良いじゃないか」

あの男、というのはツェイトの事だろう。そこでセイラムの雰囲気が変わる。

「……そ、それは……駄目だ」

先程の怒気は消え失せ、セイラムは絞り出すように答える。その

声色には戸惑いが混じっており、それがランには解せないらしく、怪訝そうにセイラムに訊ねた。

「どうしてだ、ウィーヴィルさんが強いのは俺もよく知っているし、あの男は、お前の話ではかなり腕が立つらしいじゃないか。それともあの話は嘘だったのか？」

「ち、ちがう、そうじゃない。そうじゃ……」

セイラムは違つと答えるも、その言葉は尻すばみになっていき、説得力に欠けていた。それが益々ランを懐疑的にさせる。

「……セイラム、お前何か隠しているのか？」

それが決定打だったのか、セイラムは「あ、う……」と狼狽の声を上げた。しかし、その後それを紛らわす様に語気を荒げて言い返した。

「私は何も隠してなんかいない！ 嘘もついてない！」

話は終わりだ、と言わんばかりにセイラムは身をひるがえし、ランが呼び止めようとするもその言葉を振り切り、セイラムは振り返らずに慌ただしく走り去って行った。

一方、二人のやり取りを遠くから聞いていたツェイトも、静かにその場から去っていた。

流石にあんな話を聞いた後にぬけぬけと顔を出せば、話が余計こじれてしまいそうだ。タイミングも何もあつたものではない。

セイラムには悪い事をしたかな。

森の木々をかき分けて歩きながら思い返すのは、先程の二人の会話。セイラムは、明らかにツェイトの事について何かを引きずっている様であった。自分の所為で誰かが苦悩するというのは、寝覚めが悪い。

この弁当、どうしようか。

まさかウィーヴィルの言った事が本当になるとは、と掌に乗せたツェイトから見れば小さなおにぎりの処遇について頭を悩ませながら森を抜け、村の通りを一人のつそりと歩いて行った。

結局、ツェイトはあれからセイラムとは話どころか会うことすらできなかった。

もやもやとした感情が晴れぬまま、時間だけが無為に経っていった。そして……

それは夕方に差し掛かった時のことだった。遂に招かれざる来訪者はカジミルの村へと現れた。

だがしかし、それは村の皆、そしてセイラムとツェイトが予想していた者ではなかった。

それを知る事が出来たのは、村人たちが連絡用にと携帯していた笛のおかげだった。

空気を振るわせる程の甲高い音が村の近くの森から響き渡り、その音は村全域にまで響き渡って行った。この笛

は特殊な作りをしていて、昆虫種族にのみ聞き取れる高周波の様な音を広域に発する事が出来る仕組みになっている。

とうとうあの兵士達が現れたのか。ツェイトは緊張に身を固くしながら立ち上がった。ウィーヴィルは入り口の警備に向かうと言う事は事前に知らされているので、彼と合流するため駆け出す。

その際、セイラムに居る部屋をチラリと見たが、其処にはセイラムがいる様な雰囲気は無かった。

ウィーヴィルの所に居るのだろうか？ その事の確認も踏まえてツェイトは村の入り口へと向かった。

ツェイトが村の大通りまで来た頃には、既に村中に笛の音が届いた事で臨戦態勢に移るべく村人達が慌ただしく動き回っていた。

戦えない者達を家に入れ、戦える者達は武器を手にとって所定の位置で既に警備をしていた者の下へ合流して行く。

慌ただしく駆け回る村人達の中を失礼します、と断りを入れながらツェイトはウィーヴィルのいると思しき場所へ向かう。

到着した時には既に村の入り口である柵の付近に、槍や剣等の武器を持った村人達が大勢集まっていた。

辺りを見回した所、何処にもウィーヴィルの姿が見当たらないのでツェイトは近くに居る男性に声をかけて訊ねる事にした。

「すみません、ウィーヴィルさんはどこに？」

「おお、アンタか！ どうしたんだ、ウィーヴィルさんならもう笛の鳴った場所まで他の連中と一緒に向かったぞ」

場所はあつちだと男性が指差す方向は、ツェイトがこの村に来る前に来た丘の上、その先にある森だ。

もう既にウィーヴィルさんは行ったのか、ならばセイラムは？ その事についても男性に訊いてみた。

「では、セイラムは？」

「セイラムの嬢ちゃん？ いや、俺は見ていないな」

「そうですか……」

一体どこに行ったんだ、とツェイトが落ち着かない態度でセイラムがいなか回りを見渡していると、男性が更に話し続けた。

「しかし何だな、連絡しに来た奴の話だと襲ってきた奴は兵士じゃないらしいぞ」

兵士じゃない？ では一体……そうツェイトが問いかけようとした時、不意に村の入り口の先にある丘の近くの森から、重いものが叩きつけられるような轟音が響いて来た。

音の発生地点に眼を見やると、バキバキと木々が倒れて土煙が上がり、鳥たちが慌てて飛んで行くのがツェイトの眼にも見えた。

「来たぞー！」

村の各所に建てられた見張り台の一つにいた見張り番が声を荒げて叫ぶ。すると森の中から先に飛び出して来たのは、身の丈に迫る程の長さの巨大な鉞に似た刃物を持ったウィーヴィルと、数人の武装した村人達だった。

その中には、弓を片手に持ったランと、槍を両手で構えたセイラ

ムまでもが出て来た。

セイラム、どうして。

だから家に居なかったのか、と納得すると同時に何故そこになるんだ、という困惑。その二つの感情がツェイトの心の中に湧き上がる。

続いて森の木々をなぎ倒しながら、件の襲撃者が丘へと身を躍らせて来た。

「な、何だありゃ!？」

誰が最初に驚きの声を上げたのだろうか。ツェイトは村人たちの視線の先にあるものを目にした。

それは、何とも言葉に表しがたい姿をしていた。

獣と虫を無理やり混ぜ合わせた様な、醜悪な体をした全長が5mほどもある二足歩行の大きな異形だった。

全身に備わった鉛色の外骨格と、額から生えた節くれだった触覚、頭部の4分の1を占めるほどの面積を持った大きな複眼の眼が、その怪物を虫のモンスターではないのかと思わせる。強いて虫で例えるのならば、翅の無いハエと言った所だろうか。そしてその怪物の外骨格の隙間からは、獣の毛皮の様なものが所々覗かせていた。

その全貌を現した虫の異形は、先程から応戦している村人達に対してまるで小うるさい羽虫を追い払うが如く、鬱陶しそうに腕を荒々しく振り回す。

叩きつけられた木々や岩は吹き飛び、大地には轟音を立てて小さなクレーターが生む。当たれば只では済まない怪力で、村人達やウィーヴィル達に襲いかかるが、ウィーヴィル達も負けてはいない。セイラムが突っ込んだ所では曲芸師の様に虫の異形の攻撃をかいくぐり、懐に入り込んだ所で首に一突きお見舞いする。

一撃を受けた虫の異形は、セイラムを叩き潰さんと腕を振りおろそうとするも、其処でランの放つ一線の矢が突き刺さらないまでも虫の異形の複眼に直撃して邪魔をした。

それによって益々怒りが増して行った虫の異形はランに向きを変えようとした所で、待ってましたと言わんばかりにその背後でウィーヴィルが、まるで野球の打者の様に大鉈を振りかぶった態勢で構え、隙だらけになっている虫の異形へ駆け、渾身の踏み込みと共に胴体目掛けて凄まじい勢いでその大鉈を振り抜いた。

大鉈によるフルスイングの直撃を受けた虫の異形は、硬い物が割れる様な音と共に、軽く唸り声を上げながらその場から数メートル引き摺られる様に後ずさり、鉈の一太刀を受けた箇所を腕で押さえる。その腕の隙間からは、虫の異形の血と思しき緑色の体液が夥しい量であふれ出て来た。

攻撃が通った！ 村人達が歓喜の声を上げる中、ウィーヴィルは静かに大鉈を構えて油断なく相手の様子を見ていた。

驚いたな。

ツェイトは彼らの息の合った連携に眼を瞬かせた。3人の他にも戦いに参加している村人達も彼らの脇を固める様にサポートをしている。

これも昆虫人の身体能力が成せる業か。いや、それだけでは無い。おそらく彼ら一人ひとりの練度が違うのだろう。

ハイゼクターか。

しかし、違つとツエイトは否定する。ハイゼクタはモンスターとして自然発生する様な種族では無い。あれは、プレイヤーからでしか成る事の出来ない種族、その筈なのだ。

ツエイトは、ふと件の異形と目が合った。いや、正確には、虫の異形がツエイトの存在に気が付いたかのように視線を向けたのだ。距離があるにもかかわらず、しっかりとツエイトの存在を怪物はその大きな複眼で認識したのだ。

虫の異形はピタリと動きを止めたかと思えば、体を震わせ、絶叫した。

ギ……ギョォォォォッ！

ツエイトの姿を視認した怪物は、森一体に響かせるかのように不快な雄叫び声を再び上げ、相手をしていた村人達を突然無視してツエイトのいる所へまっしぐらに突撃をかけてきた。ツエイトのいる場所、それは

村に突つ込む気か！

虫の異形の呐喊に村人達が驚き、慌てて弓で矢を放つが虫の異形はそれらを全て弾き返し、怯む事なく、勢いを弱める事も無く村へと突つ込んでいく。

まずい。ツエイトは一旦村人たちの集まっている場所から少し距離を取つた後、その場から大きく跳躍して村の柵を飛び越えた。

ずっと大地に若干めり込みながら着地したツェイトは、虫の異形へと駆け出す。

ツェイトが現れた事にウィーヴィルとセイラムが驚き、セイラムが何かを叫んでいたが今のツェイトの耳には入らない。

ツェイトは無言のままに虫の異形へと、虫の異形は雄叫びを上げながらツェイトへ。互いがぶつかり合った時、戦車と戦車が全速力で衝突したかのような轟音が鳴り響き、衝撃波が辺りの草や石を吹き飛ばした。

ツェイトと虫の異形は、さながら土俵の上で組み合う力士の様に組み合った。

よし、いける。

村人やウィーヴィル達がその取っ組み合いを見守る中、ツェイトの心中は意外と余裕だった。

先程の回復力には眼を見張るものがあつたが、パワーに関しては此方の方が上だ。

一応自分に分がある事でツェイトは余裕が出来たものの、油断は出来ない。長引かせて回りに被害を拡大させたくは無いのだ。

出来れば短期決戦で済ませたいのだが、此処に来て最大の問題にぶつかる。

……ここからどうする。

もしもゲームの世界だったら、掴み合う暇すら与えず即座に打撃を叩きこんでいる所なのだが、それを躊躇させてしまったのは、敵を仕留める事に対する抵抗感がまだツェイトの中に残っているからだ。

ツェイトの頭の中では、ワイルドマックを殺した時のあの光景がチラチラとちらついて離れない。

「オ、オ、前、ダ」

苦悩していたツェイトはギョツとして怪物の顔を見る。

ノイズの様な音が混じっていて上手く聞き取れないが、目の前の虫の様な怪物は確かに喋った。

虫の様な怪物は体を震わせ、顎を大きく開けて叫んだ。

「オ、オ、前ガ、オ、レ、ヲ……ゴ、殺ジ……ダァ、ア、ア、
ー！」

殺した？ 何の事……まさか。

外骨格の隙間から所々覗く毛皮は良く見れば赤く、ツェイトよりやや大きめの5m位の巨体その体は熊の様にみえる。そして「殺した」と言うキーワード。

忘れようもない。恐らく目の前の怪物は、ツェイトがこの世界で遭遇して初めて殺したモンスター、ワイルドマックなのだろう。

しかし、どうしてこんな姿に？ 何故言葉を話せる？ 組み合う最中、ツェイトの頭の中で様々な憶測が浮かび上がったのはツェイトから冷静さを失わせる。

ワイルドマックが言葉を発し、虫の様な姿をしている。こんな事、NFOではこのようなモンスターはいなかった。今更ゲームの知識を持ち出した所でそれが当てになるかと言えば怪しいが、それでもツェイトの心の拠り所の一つあるそれを、そう簡単に捨てる事が出来ないでいた。

混乱と忌諱感で徐々にツェイトの腕の力が落ちていく。それが、虫の異形に大きな隙を与えてしまった。

ツェイトの力が一瞬弱まった所で、一気に畳みかける様に虫の異形はツェイトを地面に叩きつけて押し倒し、その首に手をかけて強く絞め上げてきた。

怒りと言う感情が、虫の異形に力を与えているのだろうか。虫の異形のパワーは先程よりも上がり、今の精神状態のツェイトでは中々抜け出せない程にまで強化されていた。

幸いツェイトの身体能力の高さのおかげで、虫の異形の絞めつけは意識が遠のく程危ないものではない。しかし、何時までもこのままで良いわけではない。ツェイトが自身の首に手を駆けている虫の異形の手を掴み上げ、押し返そうとした所で虫の異形の背後を何者かが叫びながら飛びかかって来た。

「やめろおーっ!」

それはセイラムだった。鬼気迫る表情で虫の異形の肩に飛び乗り、槍の柄を短く持って異形のうなじ目がけて何度も刺突しはじめた。だがそれは虫の異形の外骨格を貫くには至らない。終いには槍の刃の方が根を上げてしまい、根元から折れてしまった。それでもセイラムは止まらない。折れた槍を捨て、今度は外骨格に覆われた両の腕で虫の異形の頭部目掛けて殴り始めたのだ。しかし、先程から攻撃を受けている虫の異形は、ツェイトを締め上げる事に夢中の為か全く意に介さない。

無茶だ、何と言う事を。ツェイトは虫の異形の腕を振りほどきながらセイラムに制止を呼び掛けた。

「よせ、手が割れるぞ!」

「だって！ 私は、お前を無理やり戦わせたんだぞ！ 戦えないのに！」

とうとうセイラムの手の外骨格が割れ始め、割れた箇所から赤い血が流れ始める。それでも、セイラムは殴る事を止めない。痛みに顔を歪めながらも、彼女は言葉を紡ぐ。

「それなのに……私は、喜びながら、お前を戦いに強要するような事をして……っ！」

最低だ……擦れそうな声で呟くセイラムのそれは、まるで今まで溜めこんだ己の罪を告白する様だった。

……そう言うことだったのか。途切れ途切れではあるものの、ツエイトはセイラムが何を言わんとしているのか何となくではあるが理解した。

昨晚から今日に至るまでセイラムの胸を苛ませていたものは、おそらくツエイトに対する罪悪感だったのだろう。

ツエイトがこの世界とゲームとのギャップと、生き物を殺した事で色々としヨックを受けている最中、知らなかったとはいえツエイトの事を村の皆に話し、結果として戦わせるよう仕向けてしまった。そんな自分が許せなかったのかもしれない。

優しすぎる。

今時のリアル世界でもあまりお目にかかれなさそうな性根の持ち主だ、やや頑固な気もあるが。

そして、そんな彼女が自分の為に血を流している事に腹が立った。その怒りの矛先は、自分自身だ。

何をやっているんだ俺は。

助けた筈の娘に助けられ、更にはその娘を傷つけ、拳句の果てに自分はこのザマか。助けた時のあの感情は何処へ行ったのだ。

何と不甲斐ない、そして度し難い。

確かに自身の中身は只の一般人だ。しかし、今この体は“ツェイト”だ。NFOと言う世界では、赤と青のハイゼクターの片割れとして名が知られたPCなのだ。

そして、何よりも。

『よっしゃあ！ 突っ込むぞツェイト！』

そうだ。

『俺達二人を止められるのなら、止めてみる！』

そうだった。

『俺は胸を張って言えるぞ。お前が俺の相方でいてくれて、本当に良かったってな』

何よりもこの体は、自身の相棒であり、親友であるプロムナードが誇ってくれた体なのだ。

故に、この様な醜態を晒してはならない。それが、プロムナードの名を辱める様に思ってしまったから。

「セイラム、もう良い。そいつから離れるんだ」

「で、でも！」

「良いから、遠くへ離れるんだ。巻き込まれるぞ」

ツェイトの雰囲気が変わった事にセイラムは動揺しながらも、ツェイトの言うとおりに虫の異形から飛び退いて距離を取った。それを確認したツェイトは、自分の首に手をかけている虫の異形の手を掴み上げ、押し倒されていた態勢から徐々に立ちあがる。自身の腕力が押し負け、逆転しはじめて来た虫の異形は驚いてもう一度押し倒しにかかるも、ツェイトの体は嵐に晒されても折れる事の無い巨木の様に、ビクともしない。

こんな事で、止まる訳にはいかない。

プロムナードと合流したい、元の世界に帰りたい、しかし自分の手は汚したくない。

何とも酷い話だ、まるで子供の駄々ではないか。ツェイトは自身をそう評しながらワイルドマツクの成れの果てを押し返す。互いの態勢は拮抗した状態に戻ったが、状況は虫の異形の方が悪い。ツェイトよりも一回りは大きい筈の虫の異形は、ツェイトの腕力に抗う事が出来ずにいる。

ツェイトはジッと目の前の虫の異形を見つめた。

確かに怖い、今でも恐ろしい。だがそれでも、踏み止まっていけない時と言うものがある。ツェイトは、今まさにこの時がそれだった。

プロムナード。

今はこの場にいない友の名を心の中で呟き、そしてチラリとその場から距離を取ったセイラムを見た。

セイラムへの情と己の感情、その両方を天秤にかけた時、ツェイトの心の中の計りの針は、セイラムへと傾いた。もしくは、セイラムの裏に見え隠れする友に対する友情へか。

俺は、俺を誇ってくれたお前の為に戦おう。

それが、今この場で俺に出来る事ならば。

その言葉は、プロムナードとセイラムの二人に対して言っている様であった。

ツェイトの中で、錆ついていた何かが音を立てて動き出す。

ツェイトの意思に呼応するように、眼に灯った青白い光が強さを増していく。

鬼火の様にユラユラと揺らめきながら光を灯していたその眼は、力強く光を放って相手を見つめる。

その光に虫の異形が何故か怯む。その隙を好機と捉えたツェイトは組み合っていた手を解き、両手で内側から虫の異形の両腕を外側へとはじいた後、から空きになったその胴体へボディブローを叩きこんだ。

「グギギイツ」

鈍い破碎音が辺りに響き渡ると共に、虫の異形は口から体液を吐き、呻き声を上げながらその体を宙に浮かせた。

それをすかさずツェイトは胴に叩きこんだ腕とは逆の腕を振り上げ、浮き上がった虫の異形の肩目がけて握りこぶしを振り下ろす。ツェイトの拳は虫の異形の肩を叩き割るとともに、その巨体を大きな音を立てながら大地に沈めさせた。

乾いた大地に大質量の物体が衝突した事によって周囲に亀裂が生まれ、土煙を舞い上がらせる。

うつ伏せに倒れた異形に追い打ちをかけるべく、ツェイトは組んだ両手を振り上げ、プロレス技で言うダブルスレッズハンマーを虫の異形の背部目がけてお見舞いした。

その瞬間、虫の異形の背中が嫌な音を立てて外骨格諸共その胴体を潰され、ツェイトと虫の異形を中心とした周辺の大地がその衝撃で、まるでミサイルの直撃を受けたかのように大爆発を起こした。

大地が大きく揺れ、近くの木々はその振動で激しく震える。

まるで踏み潰された虫の様に、背中と腹部の両方から夥しい量の血液と臓物を飛び散らせて虫の異形はビクビクと痙攣を起こしている。

先程まで、村人達が傷を入れる事すら困難だった虫の異形の体が、まるで嘘の様にツェイトの攻撃でその体を破壊されていく。

村人たちは遠目にそれを驚愕の眼で、近くにいたセイラムとランはツェイトの戦う姿を呆然と見つめていたが、ウィーヴィルだけはその光景を、まるで納得していたかの様に見据えていた。

「イ……ガ、ギイ……！」

一旦距離を取り、構えなおしたツェイトは痛みに身を悶えさせる虫の異形の姿に、外骨格に囲まれたその眼をきつく歪めて一瞬手を止めかけたが、軽く首を横に振る。

生物ならば確実に致命傷になる程の打撃を与えた。しかし、再び先程のウィーヴィルが与えた傷の時に体が再生して行く。流石に内臓が飛び出るほどの重症では回復の速度も遅いのか、ゆっくりと内臓が虫の異形の体へと戻って行く様は、見る者に怖気を振るわせる。

虫の異形は体を痙攣させ、再生途中である事を気にする事無く、未だ使い物にならない腕とは逆の健在な腕と両足で必死に立ち上がろうとする。

その口からは、壊れた笛の様に空気が素通りする音が聞こえてくる。まさに虫の息と言う奴なのだろう。

これでもまだ動くのか。

放っておけばまた復活しかねない。ならば、とツェイトは自身の体に備わったもう一つの力を使用する。

ツェイトの角が一瞬バリツと青白い稲妻を走らせた瞬間、ツェイトの右腕が稲妻を伴いながら青白い光を放ち始めた。

チラリとその腕を確認したツェイトは、メキメキと音を立てる程に指に力を入れ、その稲妻を帯びた腕で手刀の構えを取って中腰姿勢のまま呻き声を上げる虫の異形の懐へ踏み込んだ。

ツェイトの行動が意味する所を察した虫の異形は慌てて腕を振るうが、ツェイトはそれを頭から伸びる片刃状の角を使い、すれ違う際に切り飛ばした。緑色の体液を飛ばしながら、虫の異形の腕が宙を舞う。

そして、切り落された腕の痛みに悲鳴を上げる虫の異形の胸目がけてその手刀を突き刺した。

突き刺した腕から発する電流が、虫の異形をその内部から焼き焦がす。それにより、辺り一帯に生物を焼く嫌な臭いが立ち込めてくる。

胸を貫かれ、内部から電撃で焼かれていく痛みに虫の異形は聞かぬ者全てに不快を与える様な金切声で悲鳴を上げながら暴れ出し、自身をこんな目に遭わせた張本人であるツイイトに何度も殴り掛かった。

殴られたツイイトはそれを物ともせず、そのまま腕力に任せて大地に叩きつける様に虫の異形を押し倒す。倒れ込んだ所でツイイトは更に電流の威力を上げていき、今度は全身から稲妻を迸らせながら青白く光り出した。

眼を覆わんばかりに光を放つ強力な電流を全身に流し込まれた虫の異形は、肉体を維持できずにぼろぼろと崩れ始め、最期は影も形も残らず消えて無くなってしまった。

ツイイトのもう一つ的能力、それがこの電気力だ。

遠距離まで放つ事が出来ないが、ツイイトの身体能力と併せる事でより強力な一撃を生み出す事が出来る。

電撃によって焼け焦げた大地と化したその場からツイイトはゆっくりと立ちあがり、深く呼吸をする。

震えが、止まらない。

決して武者震いなどの高揚感の類では無い。この震えは、全く別の物だ。あの様な事をした後にも関わらず、やはり根底部分では忌諱しているのだろうか。

村人達がツェイトのもとへと駆けよつて来るが、皆一定の距離を保って近づこうとはしない。先程の電撃を目の当たりにしたと言うのもあるが、ツェイトの全身は電撃を放ったばかりの為か未だ弱々しく電気がパリパリとほとばしっているのだ。

「ツ、ツェイト！」

「待て、来るな！」

心配そうに駆け寄って来るセイラムにツェイトは声を荒げて叫ぶ、その言葉にセイラムはビクツと体を震わして動きを止めた。

「今、俺に近付いたら不味い」

帯電状態もさることながら、放電した事によって発生する高熱がまだツェイトの全身に残っているのだ。下手に触れば大火傷になりかねない。

「俺の事は良いから、お前はその腕を村に戻って治してもらうんだ」

ツェイトが見やったセイラムの両手は、虫の異形を殴った影響で外骨格が割れたままだ。その割れた隙間からは、まだ血が流れ出てきておりとても痛々しい。

そう言うとセイラムは、小さくうなずいた後しょんぼりと頭を垂

らしたままトボトボと村へと戻って行き、その後をランが追い掛
けていく。

「ごめん。」

心の中でセイラムに謝るツェイトも、実際の所はあまり大丈夫で
は無い。

息こそ荒くは無いものの、心臓と思しき器官が荒々しく脈を打っ
ているのがツェイト自身でも自覚できるのだ。

この先も、こんな事があるんだろうな。

慣れるしかない。慣れたくは無いが、慣れなければこの先につち
もさつちもいなくなる。先日、村の会合の後にウィーヴィルから
言われた言葉が思い返された。

しかし、止まる訳にはいかないし、逃げる訳にもいかない。それ
だけプロムナードへ、そして元の世界へ帰る道が遠のいてしまう。
ならば歯を食い縛って行くしかない。

夢と冒険のファンタジー。

言葉の聞こえは美しいが、目の前に広がる有様はゲームや遊びで
ひと括りにされてはいけないものだ。

取りあえず、何とかなった。

ツェイトは色々な意味を込めて、深く溜息を付いた。

「大丈夫か」

村人達が後片づけをするために村とこの場を行ったり来たりしている中、鉈を荒縄で背負ったウィーヴィルがツェイトの下へやって来た。ウィーヴィルもツェイトに近づこうとしたが、例の電撃の影響がある為距離を取るようとツェイトは念を押す。

「ええ。本当に荒治療になってしまいました。何とかありませんか」

「全く、お主が飛び出した時は冷や冷やしたぞ。セイラムなんて顔を真っ青にしていた位だ」

「……そこまで心配されていたのですか」

「みたいだな、そもそも今回あの怪物と最初に出くわしたのはセイラムなのだぞ。おかげでワシも肝を冷やしたわ」

「えっ？」

コレが己の傲慢からなる予想でなければ、セイラムはまさか自分の為に警備に出ていたのか？ ツェイトは虫の異形と組み合った際に聞いたセイラムの独白と、今までの彼女の行動からセイラムの心情を読み取るうとした。

ともなれば、さっきはセイラムに申し訳ない事をしてしまった。

この件が落ち着いたらセイラムとは腹を割って話し合おう。彼女も自身も色々と負い目があるのでもしかしたら謝罪合戦になりそうな気もするが、まあそんな事は問題では無い。

「……後でセイラムと話すのが怖いですね」

「お主たちの間で何があったのかは敢えて聞かぬが、まあ腰を据えて話し合えば良いだろう」

それもそうですね、とツイイトは答え、先程の虫の異形のいた場所を見つめる。

「ウィーヴィルさん、あのようなモンスターはここ等辺では良く見かけるものなのですか？」

「いや、ワシもこの村にそれなりの年月は住んでいたが初めて見る奴だった」

ワイルドマックが突然虫の異形に変異する等と言う現象は、やはりこの世界でも普通では無いのだろう。

とすると一体アレはなんだったのだろうか。

色々と憶測を頭の中で浮かべては沈む作業を悶々と繰り返しながら、ふと日が沈み始めて暗くなった森にツイイトは視線を向けた。そこで、何かが鈍く光るのをその眼で見た。

眼を凝らしてその場所を見てみると、木々の隙間の藪の中に佇むそれをツイイトの強化された視力が偶然捉え、凍りついた。

見間違う筈もない。森の奥、草むらの中から顔を覗かせていたのは深緑の衣装を身に纏い、軽装の鎧を装備したマスクの兵士だった。

あいつらだ！

驚いたツイイトの視線に気づいたのだろう、その兵士はさっと素早くその場から姿を消した。

ツェイトは慌てて兵士がいた事をウィーヴィルに話すと、ウィーヴィルも眼を見開いた。

「……これはもしかしたら、不味い事になったのかもしれない」

まずい？ ツェイトは先程まで兵士がいた森の方へと向けていた視線をウィーヴィルへと向けた。

「もしも、もしもこれが連中の仕組んだものだったのだとしたら、次は……」

ウィーヴィルが仮説を立てていく最中、それが的中するかの如く村の方から笛の音が響いた。

二人してその方向を見てみると、村の奥、森に面している部分からは煙が上がっていた。

陽動か！

突如村の正面近くから現れた虫の異形、それらを監視していた兵士、そしてこの警報を知らせる笛の音のタイミング。

これらがもし何らかの意図によって起こされたものならば合点がいく。先程の虫の異形は囷なのだろう。

しかしこの怪物をけしかけたのがあの兵士達だとしたら、どうやってワイルドマックをあんな姿に変えたんだ？

様々な疑問が頭の中で飛び交う中、ツェイトは火の手が上がる村へと駆け出して行った。

第4話（後書き）

主人公の苦悩について長々と書いてもダレてしまいますが、かといって短いとそれはそれでどうなんだと首を傾げてしまう。

こういう場面に直面しますと、線引きと言つものがとても難しく感じます。

第5話 前編（前書き）

大変お待たせいたしました。

今回は前話の時よりも文字数が倍近くまで増えておりますので、ご注意ください。

誤字、脱字等がありましたらご指摘お願いします。

文字数が多いので、突然ですが前編後編に分ける事にしました。

第5話 前編

ツェイト達が村の入り口まで来た頃には、既に村は兵士達の侵入を許してしまっていた。

民家のいくつかには火が放たれ、大勢の兵士達が村中に散らばり、村のあちこちで武装した村人達と戦いを繰り広げている。

「ぬかった。裏の森にも人員は割いておいた筈なのだが……先の怪物に気を取られ過ぎたか」

ウィーヴィルが速度を合わせているツェイトと並走しながら苦々しく言葉を漏らす。しかし、もし村の裏側に警備を回していなければ、笛の音も聞こえる事なく侵入されて、事態は更に悪い状況になっていたのかもしれない。

そう考えれば不謹慎ではあるが、この状況はまだマシな方とも言える。

対するツェイトは、村の惨状を目にして足を止めかけた。

燃えている。

数時間前まではのどかな光景だったカジミルの村が、兵士達の襲撃によって小さな戦場と化してた。

悲鳴を上げる者、怒号を放つ者、金属同士が激しくぶつかり合う音、木と、そして生物が焼ける臭い。

ゲームでも、村をモンスターや野盗が襲う様なイベントはあった。しかし、これは……

今までに感じた事の無いものがツェイトの五感を通して脳に刻まれ、ツェイトの脳裏にある懸念が浮かぶ。

セイラムは無事なのか。

ツェイトは、虫の異形との戦いで負ってしまった傷の手当の為に、ランと一緒に村に戻ったセイラム達の安否が気になった。村の入り口付近まで退避していた村人達の中にセイラム達が見当たらないのだ。

ツェイトの様子がおかしい事に気付いたウィーヴィルが声をかけてくる。

「ツェイト、どうした」

「……セイラムは、何処に」

「……あ奴め、無茶をしなければ良いのだが」

ウィーヴィルは顔を険しくし、ツェイトもそれに同意した。

僅かな日にちしか共にしてはいないが、ツェイトはセイラムの人となりと言つものがある程度理解出来ているつもりだ。

一言で言つならばお人よし。または無鉄砲と言つた所だろうか。

ツェイトの様に出会つてから日の浅い相手に色々と気にかけてくれたり、その為に心を痛める事の出来る彼女は不器用すぎるのだ。

ランと一緒にいて行つたが、嫌な予感がする。今すぐにでも探し出したい衝動に駆られるツェイトをウィーヴィルは手で制する。

「こつも奴らの数が多いと固まって動いては間に合わなくなる。セイラム達の事もあるから手分けして村中を回りたい」

ウィーヴィルが単独行動に移ろうと判断したのは自分自身の腕に覚えがあるから、そして、ツェイトの力の一端も垣間見る事が出来た。それに基づいた判断なのだろう。

「ツェイト、お主はやれるのか？」

これから行うのは知恵を持った人型種族との戦い、ツェイトが今最も避けたい事だ。まだ迷いがあるのなら、それを引きずったまま戦いに赴けば取り返しのつかない事を引き起こしかねない。故にウィーヴィルは問い掛ける。本当に戦えるのか、と。

しかし、ツェイトは一瞬の間を置いた後答えた。「やります」と。

やらなければ村の被害が広がる。戸惑えばその時間だけ誰かが死ぬかもしれない。そして、今兵士達がしている事を許すわけにはいかない。

惨憺たる村の光景を見たツェイトの中では、己の倫理を上回る程の感情が湧き上がって来る。

そんなツェイトの内心を知ってか知らずか、ウィーヴィルは分かっただけ短く答え、背中に背負った大鉈を抜いた。

「よし、ここから先は別行動だ。一人でも多くの賊を叩き出すぞ」

ツェイトは無言で頷き、それを皮切りに二人はそれぞれ別の方向へ、兵士達が暴れる村の中へと飛び込んだ。

ツェイトが村の中へと飛びこんだ瞬間、戦っていた兵士達と村人達はツェイトの姿を確認すると動きを止めた。並の人型種族の倍以上の背丈と巨体を持つツェイトが、この場に地響きを鳴らしながら躍り出て来たのだ。

重量に見合った重い地鳴りを鳴らしながら走るツェイトは最初の相手を決めた。

近くにいる、村の男性に剣を振るって襲いかかっている兵士だ。

幾ら種族の恩恵で身体能力が高いとはいえ、全ての昆虫人が戦い上手と言っ訳ではない様だ。

「う、うわぁ!？」

男性の悲鳴がツェイトの耳に入る。

ツェイトは走る速度を落とす事無く、その兵士へと距離を詰めていく。

標的となった兵士は慌てて逃げようとするも既に遅い。接近してきたツェイトが、兵士を真横からサッカーボールの様に蹴り飛ばした。

当たり所が悪かったのだろうか。兵士は蹴りの直撃を受けて、言葉を発する暇すら与えられずにバラバラに吹き飛び、その肉片が空中高く舞い上がって村の近くの森の方へ血肉をまき散らしながら飛んで行った。

「うっ……!」

辺りに残るのは兵士の遺した人体の残骸、それが辺り一帯に飛び散り、助けた村の男性にも少しかかってしまった。男は、人が瞬間にバラバラになる様を眼のあたりにして、込み上げてくる吐き気を抑える様に口に手を当てた。

ツェイトは蹴り上げた足を地面にズンツと叩きつける様に下ろしながら辺りを見る。

一連の様子を目の当たりにしてしまったからだろうか兵士達は、ツェイトが視線を向けるとビクツと体を振るわせる。

各々の身に付けている武器が、鎧が、無意識のうちに震えだした持ち主の所為でカチャカチャと音を立てていた。

本来ならば、兵士達の動きが明らかに鈍り始めた今が好機なのだが、先程まで兵士と戦っていた村人達も、ひいては助けられた男性も、ツェイトの行った行為とその巨体から発する雰囲気によって動くに動けなかった。

……やって、しまった。

湧きあがる激流の如き感情に飲み込まれつつも、その中でしっかりと保った理性で以てツェイトは呟いた。

ついに、ツェイトは殺した。しかも他の者達のように武器を以て倒すのではなく、人を人とも思わぬ様な所業で人体を丸ごと破壊している。もはや後戻りは出来ない。

だがしかし、とツェイトは震えながらも兵士達に目を向ける。

こいつらをのさばらせておくわけにはいかない。

今のツェイトは、込み上げてくる感情に任せて動いているに過ぎ

ない。その感情とは何か。

恐怖か。いや、足を竦ませる様なものではない。むしろ前へ進めと心の奥底がざわつく。

ならば正義感か。それとは少し違う。村人達を救いたいと思う気持ちはあるが、そこまで綺麗なものではない。

ツェイトの心を占めているものの名は、恐怖や正義感などでは無い。

今、ここに居る兵士達全てを根絶やしにせんとする怒りと憎悪だった。

そこから先は、ほとんど一方的なものだった。

怯える体に鞭を打つように、村人達から対象をツェイトに変えて戦いを挑んだ兵士達は、ある者は胴体に拳を叩き込まれて上半身を吹き飛ばされ、またある者は電撃で灰も残らず消し飛ばされ、哀れな者の中には手刀で頭から股の下まで真っ二つに両断されてしまった者までいた。兵士達が攻撃を仕掛けようものなら、逆にその武器がツェイトの外骨格の硬度に負けてへし折れてしまふ始末だ。

まさに象と蟻の戦い。はたまた生身の人間が、棒きれ片手にインジン全開で突っ込んで来る戦車に挑む様な様相か。

まるで紙屑の様に自分達を引き千切るツェイトを見て、当初は戦う意思を見せていた兵士達はその数を減らして行く内に戦意をこっそりとむしり取られ、逃げだし始める。だが、今のツェイトは彼らの逃亡を許さなかった。

逃げる兵士を後ろから胴体ごと掴み上げては握り潰し、足を掴んでは引き摺り出して踏み潰す。最早どちらが加害者と被害者なのかが分から無くなって来るほどにツェイトは兵士達を執拗なまでに叩いて行つた。

その場に動く兵士が見当たらなくなつてきた所で、ツェイトは兵士達の残骸がこびりつく両の手を見ながら、怒りの中で僅かながらに戦慄する。

どうして、こつとも簡単に殺せる。

ウィーヴィルにはああ言ったものの、何処かで迷いが生じるのではないのかと密かに懸念していたのだが、こつともあっさりと、しかも残酷に兵士達を殺めて行く自分にツェイトは違和感を感じた。

相手が無法を働く兵士達だからか？ それとも今の感情で感覚がマヒしたからか？

原因は分からない、今の自分が、自分であつて自分ではない様な感覚に少しばかりの恐怖を感じる。

しかし今はその方が都合が良い。今自分に必要なものは、殺す事に躊躇いを持たない、まさに今の状況なのだから。

ツェイトは思考を切り、次の兵士を探すべくズンツと音を立ててその場から離れた。

その跡には、兵士達の無残な成れの果てと、それを呆然と見つめていた村人達だけが残されていた。

道中襲いかかって来た兵士、または村人と交戦していた兵士がいたが、前者は問答無用で捻り潰し、後者は村人に気を取られているうちに背後から頭を掴み上げて地面に叩き付け、その衝撃で壊れた人形のようにグシャグシャに破壊していく。

ツェイトが目視出来る範囲内の兵士達を鎮圧しながら進んでいく最中、それを見た。

大通りから外れた細道に視線を向けると、その先で兵士に斬りかかられている女性がいた。ツェイトのいる方向からだと言った兵士が視界を遮り、女性の姿がはつきりと見えないが、倒れながらも何かを庇う様に抱きしめている。

本当に容赦がない。

もつとも、今の自分も人の事を言えたものではないが。とツェイトは外骨格で覆われた顔を顰める。

暴漢やテロリスト、戦場にいる一部の兵士達の非道な行いはテレビ等の様々な情報媒体で知ってはいるが、それを直に目にするのはツェイトは今回が初めてだ。

何故この様な事を、等と疑問を挟むような面倒はしない。只ひたすらに、眼前の兵士を粉碎するべくツェイトは進むだけだ。

低い地響きがハッキリと周囲に聞こえる音が女性を襲う兵士の耳に入り、何事かと後ろを振り向く。

そこには、全身に返り血を浴び、燃え上がる炎の中、ゆらりと鬼火の如く揺れる白い光を灯した眼を持つ甲虫の巨人が自身の下へと迫る姿があった。

それに慌てた兵士は何かを閃き、女性が抱きしめていたものを無理やり奪い取る。そして、それに手持ちの剣を付き付けてツェイトの前に見せ付けた。

ツェイトは兵士の腕の中にあるものを見てピタリと止める。

兵士の腕に捕まり、顔に刃を付きつけられていた者は、昨日出会った幼い少女のニニだった。体の所々が土と血で汚れているが、目立った外傷は見られない。

兵士の後ろにいる女性は、見ればニニの母親だった。ニニを庇っていたからだろうが、体中に切り傷があり、特に両足は血で染まっている。ニニの体に付着している血は彼女のものなのだろう。ニニの母親は奪われた自分の娘の名を弱々しく叫びながら手を伸ばすも、兵士がそれを踏みつけて黙らせる。

人質となったニニは、母のそんな様を見て泣きながら母の名を叫ぶ。しかし、それも兵士が剣を首筋に斬れない様に押しつけて無理やり大人しくさせた。

兵士はツェイトに人質が有効である事が分かると、ニニを盾にしながらジリジリと後退して行く。

ツェイトはそれを見て、静かにニニに話しかけた。

「ニニ」

突如声をかけられたニニは涙と鼻水でグシャグシャになった顔でツェイトを見る。

体中に付着した血に思わずヒツと声を上げるが、その顔を見上げると、ツェイトはあの夕暮れ時に見た時と同じような眼で、しっか

りとニニを見ていた。

「目をつぶるんだ」

ニニはツェイトの言葉に従いギュツと眼を瞑り、それを確認したツェイトは前進する。

何故だ、娘の命が惜しくは無いのか？ とでも言う様に、激しく震えながら兵士は必死に人質であるニニに刃をチラつかせてアピールするが、ツェイトはそれを無視して目の前まで接近した後、拳を脇の下まで引き絞り、放った。

ツェイトの振るった拳は眼を瞑っているニニの眼の前でピタリと止まった。拳を振るった際に起きた風が、ニニの体を通り前髪がふわりと揺れる。

それと同時に、ニニの背後にいた兵士の体が見えない力で肉片となって後方へ吹き飛ばされた。

これは、拳から放った衝撃波を障害物の向こう側にいる相手へ送る、NFO内に存在する技能だ。技を放った際、使用者と相手の間に挟まれた障害物は、傷一つ付く事はない。現にニニにはフツと風が通っただけで済んでおり、ツェイトの繰り出した破壊力は全てその背後にいた兵士へと叩きこまれた。

この技は、ツェイトがNFOにいた時、まだ昆虫人だった頃に格闘技専門の職業に就いて習得したものだ。

壁の向こう側や、結界などの障壁を展開する相手等に効果のある妙技で、大多数の敵味方が入り乱れる様な乱戦の場合は、味方に当てずにその向こう側にいる敵を倒す事が出来たりと、割と便利な技としてツェイトは時々使っていた。

しかし、まさかこんな場面も効果を発揮するのは予想外だったが。

いきなり自分を拘束していた兵士がいなくなった事で倒れかけた二二に、ツェイトが片手で支えると、眼を開けて母親の下へと駆け寄り、その胸の中で泣きじゃくった。

母親は傷こそ多いが、昆虫人の生命力の高さのおかげか致命傷のモノは無いらしく、駆けよって来る二二を強く抱きしめた。

「大丈夫ですか」

「本当にありがとうございます。二二が無事で、本当に……」

二二の母親は、ツェイトの雰囲気は一瞬気圧されそうになりながらも二二が無事だった事で、ホッと安心してツェイトに礼を述べたが、それを見てツェイトは驚く。

自分の怪我の方が深いと言うのに、それよりも娘の安否を喜ぶ所は母親なんだな、と。

「立てますか？ 安全な所へ送ります」

二二の母親の両足は出血こそ治まって来ている様だが、それでも先程まで流れていた血で真っ赤に染まっているのだ。最悪、足の腱なぞ切られていたら幾ら昆虫人でも今はまともに動く事が出来ない筈だ。

傷がどの程度かは分からないが、二二の母親は歩く事が現状出来ないらしい。ツェイトの提案を承諾した。

「……お願いします。それと、後でセイラムを探してあげてください」

セイラムを？

まさか兵士達に戦いを挑んだんじゃないだろうかと、ツェイトは村に入る前に懸念していたセイラムの事を思い返した。

「あの娘、両手を怪我してるのに兵士が村に入って来たのを知って、武器を持って飛び出して行ってしまったのです……」

ツェイトの嫌な予感が的中した。何回無茶するんだ、鉄砲玉かあいつは！

大人しくすると言っ言葉を母親の腹の中にでも置いて来たのかと悪態をつきたくなったが、その怪我は元々自分を助ける為に負ったものだと言っ事を思い出して、ツェイトの胸は罪悪感で絞めつけられた。

セイラムの事は気になるが、しかしこの親子をこのままにはしておけない。怪我で動けない所を兵士達に見つけられ、再び襲われでもしたらそれこそ最悪だ。

「分かりました、必ず探します。ですが、その前に貴女達の方が先です」

行きましたよう。そう言っツェイトは二二の母親を二二とまとめてその大きな背中に背負い、安全な場所を探して駆けた。

二二達親子を背負っ村の中を移動していたツェイトは、村長の屋敷に避難している村人達を見つける事が出来た。

屋敷の入り口まで駆け寄ると、辺りを窺っていた村人達がツェイ

トの存在を見るやホツとし、ツェイトが背負っている二二達親子を急いで屋敷の中へと避難させた。

当初は屋敷も兵士達の攻撃を受けていたのだが、そこをウィーヴイルが駆け付けて敵兵をまとめて斬り伏せたのだそうだ。部屋の敷地が広い為、負傷した村人達の治療と看護用、そして避難場所として村長が全ての部屋を貸し出している。

二二達親子を無事その場所へ送り届けた後、出かける間に屋敷内から村長のキイトが現れ、ランを見なかったと訊いてきた。どうやら飛び出して行ったセイラムをランが追いかけて行ったらしいのだ。

幼馴染に振り回される苦労人、そんな印象をツェイトはランに持ち始め、彼の搜索も頼まれる事となった。

どこだ、どこにいる。

ツェイトはセイラム達を探すべく、村の中を探した。

村中を荒らしまわっていた兵士達は、ツェイト達が介入した事で徐々に形勢が逆転して退いていったらしい。所々には打ち倒された兵士達の亡骸が転がっていた。

彼らがいなくなった事で探しやすくなった。しかしウィーヴイル、ラン、セイラム。この三人が何処にも見当たらない。

村中探してもどこにも見当たらないと言う事は、まさか村の外へ出たのか？ そうなってしまうと、この近辺の土地勘が無いツェイトでは探すのが難しくなる。強化された五感を最大に活用しても上手く見つかるかどうか分からない。

ツェイトが焦り始めて来た時、村の裏側にある森から甲高い声が聞こえて来た。それは今日数回耳にした、緊急時に使用される笛の音だった。

裏の森？

そこで思い付く。

考えてみれば、最初に兵士達が侵入して来たのはあそこだった。この村へ襲撃をかけるのなら、侵入経路を確保するだろう、そして退路の確保もその道を利用するかもしれない。兵士達がいる可能性は高い。そして、セイラム達も。

ツェイトは全身をバネの様に大きく屈伸させてその次の瞬間、大地を少し吹き飛ばしながら弾け飛ぶようにして跳躍し、音の発生源である裏の森へと跳んで行った。

「お前達、どうして村を襲った!？」

ツェイトが向かう前、村の裏側の森の奥にはセイラム達の三人が各々の武器を手に兵士達と対峙していた。

時間は既に夜の為、本来ならば森の中は月の光が差し込む以外は闇に染まっている筈だった。しかし今は、村から上がる火の手による明りが、皮肉にもその一帯にささやかながらも明るさを与えていた。

ウィーヴィルがランとセイラムを守る様に兵士達の前へ出て大鉈を構え、ランはその背中越しから弓を引き、セイラムは何時でも飛び込める様に深い姿勢で槍を構える。

彼女達は途中でウィーヴィルと合流し、本当ならばセイラムを安全な所に戻すつもりだったのだが、セイラム本人がそれを頑なに拒んだのだ。

なので止むを得ず、そのまま周りの兵士達を叩きのめしながら進んで森の奥にいた本隊と思しき集団を見つけ、今に至る。

兵士達と遭遇した際に、笛を使ったので応援が来るのも時間の問題だ。

セイラムの両手は外骨格の上から包帯が厚く巻かれているが、戦いの最中に傷が開いたのだろう。槍を握るその手に巻かれた包帯はじんわりと血が滲んでいた。

そこにはセイラム達だけではなく、この一連の騒動を引き起こした兵士達も相対するように武器を構えていた。その数は一桁程度まで激減してるが、誰ひとりとして逃げるそぶりは無い。

そんな兵士達の奥に、一人だけ身なりの違う者がいた。

他の兵士達が身に付けている軽鎧とは違い、その者が装備している鎧は暗闇の中に染まる様に黒く、プレートアーマーと言う全身装着型だ。所々に鋭い刃物の様なパーツが備え付けられており、頭にかぶっている鉄仮面は虎の頭部を模した造りになっている。その手には薙刀に似た槍を持ち、その背丈はウィーヴィルと同じ2m間近と言った所か。

雰囲気と立っている位置からすると、その者は一介の雑兵では無く、指揮官に位置する者であると言う事が窺い知れる。

新しく用意した槍を構えながら問いかけるセイラムに、指揮官が口を開いた。その声は鉄仮面の影響でくぐもってはいるが、ツェイトと同年代位の男性のものだった。

「娘、お前がいるからだよ」

指揮官の男にそう言われてセイラムがえっと眼を見開く。ランは眉を顰め、ウィーヴィルは大鉈を構えたまま苦虫を噛んだ様にして指揮官を睨みつける。

「何故だ、何故そこまでしてセイラムを狙う」

弓を引き絞り、何時でも放てるように構えるランが訊ねる。

「それだけの価値が、その娘にはあると言う事だ。どれだけ我らの兵が犠牲になろうとも釣りがる程のな」

それは、案に何度でもこの村を襲うと言っている様なものだ。そして、それと同時に此処にいる兵士達に価値が無いと言っている様なものでもある。しかし、兵士達はその様な事を言われても全く身動きすらしない。それがかえって、セイラム達に薄気味悪さを感じさせた。

「その娘を渡せ。そうすれば、これ以上お前達に危害を加えはしない」

「断る。貴様らなぞにセイラムをくれてやる訳にはいかん。それに、ここまでの事をしでかしたお主たちを許す気は無い」

「そうだ。それにお前が村に送った兵士達はウィーヴィル達と皆で

倒した。それでもそんな事が言えるのか」

ウィーヴィルが迷うことなく切り返し、ランや村人たちもそれに続いて強気に発言するが、指揮官の男はフンツと鼻を鳴らす。

「まさか、もう勝ったつもりか。おめでたい奴らめ」

何も知らぬ愚か者に教えを説く様に、指揮官の男は話し続ける。

「例えお前達が今回我らを退けようとも、我らは何度でもお前達を攻め立てるぞ。お前達が娘を渡すまでは」

「ふざけるな！ これ以上村にちよっかい出されてたまるか！」

激昂したランが、叫びと共に矢を放つ。放たれた矢は、狂いなく指揮官の男の下へと飛来して行った。

当たった。そうランが確信した次の瞬間、指揮官の男は数ミリにまで迫ったその矢を残像が見える程の反射速度で回避した。あまりの速度にセイラム達は反応する事が出来なかった。

「は、早……」

「つけ上がるなよ小僧……！」

回避運動の勢いを殺さず、たった一度の瞬きの間に指揮官の男はランとの距離を一瞬の内に詰め寄り、姿勢を低くして懐まで潜り込んで来た。

ランは驚きのままにそれに応戦しようと背中に背負ったの矢筒から矢を取りだそうとするが、間に合わない。

指揮官の男が逆袈裟掛けに槍を振り上げて、ランの左わき腹から右肩まで切り裂こうとした。

しかし、それを阻止した者がいた。

ランに迫る凶刃を防いだのは、ウィーヴィルだった。

誰もが指揮官の男の突発的な動きに反応できないものかと思われたが、ウィーヴィルだけがそれに反応する事が出来た。

ウィーヴィルは指揮官の男の槍の一線を真横から大鉈の腹で受け止め、気合いの掛け声とともにそれを切り払った。

しかし。

「老いぼれめ！」

「ぬうつ！？」

切り返された指揮官の男は低い姿勢のまますかさず回し蹴りを放ち、ウィーヴィルの大鉈の腹の部分蹴り上げた。予想外の行動と蹴りの威力にウィーヴィルは大鉈を構えたままのけ反る様な態勢になってしまい、胸ががら空きになってしまった。

その隙を指揮官の男は許さなかった。

「どけ！」

回し蹴りの際の回転の勢いを止めぬまま、それを利用してがら空きになったウィーヴィルの胴体へ指揮官の男は横薙ぎの斬撃を見舞った。

「うお……お……」

真横に斬られたウィーヴィルは、斬られた胴体から血を噴き出し

ながら力なく両膝を突き、大銃を手放してその場にうつ伏せに倒れた。

音を立てて倒れたウィーヴィルの腹部からは夥しい量の血が流れ、その周辺に赤い水溜りを生み出して行った。

「ウィーヴィルさぁん!!」

ランが必死に声をかけるが、ウィーヴィルはピクリとも動かない。セイラムは言葉を発することなく、眼を見開いてウィーヴィルが地面に倒れこんでいる姿を見る。

口元で、何かを呟きそして、セイラムはわなわなと体を震わせて叫んだ。

「うぉぁぁぁーっ!!」

先程の指揮官の男の速度にも負けない勢いと速度で、セイラムは両の手から血が噴き出す事すら躊躇わず指揮官の男へ槍を突き立てんと飛び掛かった。

しかし、セイラムの怒りは指揮官の男には届かなかった。

セイラムの放った槍の一突きは、指揮官の男の槍の一振りと共に槍の刃の根元を叩き割られた。

更に、指揮官の男はおまけと言わんばかりに槍を手元でくるりと素早く回してセイラムの額目がけ、石突きを叩き込んだ。

「あぐっ!!」

脳天が揺れる様な衝撃を受け、セイラムは呻き声を上げながらの

け反る様にして後頭部から地面へ叩きつけられた。

しかしまだ終わらない。更に指揮官の男は追い打ちをかける様に、倒れたセイラムの腹部を思い切り踏みつけた。

「グウウ！…エエ…ッ」

「セイラム！？ クソ！」

セイラムを助けようとランが弓を引くが、兵士達が指揮官の男を守る様にして陣形を組み、矢の射線を遮るようにして立ちほだかつた。

ランがまともに攻撃が出来ない状況を確認した指揮官の男は、セイラムの腹を踏みつけていた足に更に力を入れた。

踏まれたセイラムは、苦悶の声と共にその縛めから逃れようと指揮官の男の足をどかさうともがくが、動かすどころかずれる気配すらない。

「ぐあああ……この……」

「お前を生かして連れてくる事が我らの目的だが、無傷である必要はない」

指揮官の男は薙刀状の槍の刃を振り上げ、セイラムの二の腕へと狙いを定めた。その意味する所をセイラムは察し、更に力を入れて暴れ出す。

「これ以上暴れない様、四肢を潰す。お前達昆虫人の事だ、手足の欠損と多少の流血程度では死にはしまい」

「や、止める！ くそ、邪魔だお前達！」

セイラムへと振るわれようとしている刃を見て、ランは邪魔をす
る兵士達へと矢を放つ。

しかしランが焦っているからか、それとも指揮官の男の取り巻き
の為実力があるからか、兵士達はランの放つ矢を上手く鎧のある部
分で受けたり回避して致命傷を受けずに戦っている。

ランは兵士達の相手で手一杯、戦力の要であるウィーヴィルは先
の指揮官の男の一撃で地に伏せたまま動かず、セイラムはその身に
凶刃を振り下ろされようとしていた。

状況はセイラム達にとっては絶望的。万事休すかと思われた。

だがその時、それは現れた。

突如森の遥か上、上空から木の枝をへし折りながら、巨大な物体
がセイラム達がいる場所へ落下して来た。

落下して来た地点は狙ったか偶然かは分からないが、丁度兵士達
がいた場所のど真ん中。兵士達を押し潰しながら着地したそれは、
着地と同時に大地を大きく揺らしながら衝撃波を周囲に放ち、辺り
にある落ち葉や草木を吹き飛ばした。

ランや生き残った兵士達もそれに巻きこまれてしまうが、指揮官
の男もその衝撃にたまらず吹き飛ばされ、結果としてはそれがセイ
ラムの拘束を解く事になった。

「何だ！」

指揮官の男も突然の事態に驚きの声を上げ、衝撃波で吹き飛ばされるも低空で一回転して上手く地面に着地する。

そして、己の任務を邪魔立てする乱入者を仮面の奥にある眼で睨みつけた。

指揮官の男の踏みつけから逃れられたセイラムも件の衝撃波で地面をコロコロと転がされたが、途中で踏ん張り、腹を抑えて咳き込みながらそれを見て、そして眼を見開く。

森の天井が突き破られた事で、その場は月の光が他よりも強く射し込んでいた。

月光に晒されて淡く輝く紺碧色の外骨格。

大地に二の足を踏みしめるようにして雄々しく立つ4m弱の巨体。反りを作りながら天へと伸びる、巨大な片刃状の角を額から生やした甲虫の巨人がそこにいた。

「つ、ツエイ、ト……」

笛の音を聞き付けてやって来たツエイトは、セイラムの言葉に反

応してセイラムを見やり、辺りを見回し、ウィーヴィルの方に視線を向けて止まった。ウィーヴィルは血溜りにうつ伏せの態勢で体を沈めたまま動く気配が無いのだ。

まさか、そんな……ツェイトの頭の中では最悪の光景が描かれていた。

「その姿、報告にあつた未確認の昆虫種族か!?」

指揮官の男の声に反応し、ツェイトはそちらへと向きを変えた。

見てくれからすると、一人だけ姿が違うあの鎧の人物がこの兵士達のリーダー格なのだろうと言う事が、何となくツェイトは理解出来た。

村を襲い、この状況を生み出している者がある男。ツェイトの感情に呼応するように、体から発する電気の出力が上がって行く。

「次から次へと邪魔……ッ!?」

指揮官の男は忌々しそうに独りごちつつ、槍を構えてツェイトと戦う姿勢を見せたその瞬間、ツェイトのいた場所が大爆発を起こして土煙を上げた。

同時に、ツェイトが稲妻を伴いながら指揮官の男との距離を触れるか触れないかの距離にまで詰めていた。その右腕は、先の虫の異形を仕留めた時の様に青白く発光している。

電光を纏った手刀が、下段から上段へ勢いよく振り上げられた。

「なん、だあがががああ!?」

突然の事態に指揮官の男は驚きつつも、ランの矢をかわした時に見せた反射速度で身を捻り、辛うじてその一撃を回避した、かに見えた。

だが、その際ツェイトが纏っていた電撃に触れてしまった事で感電し、更にツェイトの怪力から繰り出された事によって生じた衝撃波で、その身を落ち葉の様に舞い上げられてしまった。

感電によって麻痺したのか、思うように動けない指揮官の男は投げだされた人形のように地面に激突し、それから一刻遅れて空から何かがガシャリと音を立てて落ちて来た。

それは、指揮官の男の右腕だった。

ツェイトの手刀を指揮官の男は確にかわした。しかし、それでも衰える事の無いツェイトの手刀による斬撃は触れていない筈の指揮官の男の腕を、鎧ごと切り落したのだ。

指揮官の男の傷口からは血が流れていない代わりに煙が上がる。恐らくツェイトの電撃によって生じた熱で焼かれ、無理やり塞がったのだろう。

「う……ぐううおおおおあ……ッ!」

焼き切られ、熱を持った肩の付け根を片膝立ちのまま槍を持った手で抑えながら、全身から煙を上げる指揮官の男は痛みに呻き声を上げた。

指揮官の男は、戦意を失うどころか怒りに満ちた声を上げてツェイトの方へ視線を向けた。

「こ、このデカブツが、よくも……」

許さんぞ……！ 怒りに声を荒げる指揮官の男だが、ツェイトも指揮官の男を許す気も、逃がす気も無い。

このままトドメをさすべくツェイトが近づこうとしたその時、指揮官の男の足元に光る円陣が浮かび上がって来た。

「忘れるな。その娘を渡さぬのならば、我らは何度でもお前達の村を焼く！」

それが何を意味するのか、良く考える事だ。 指揮官の言葉に、セイラムの体が跳ね上がる様に震えて反応した。

捨て台詞を吐くと、光の円陣が指揮官の男を素早く光で包み、指揮官の男と一緒に消えてしまった。入念な事に、切り落された腕も同様に消えていた。

逃げたのか。

手下の兵士達を見捨てて？ ツェイトが生き残った兵士達に視線を向けた時、兵士達の様子がおかしい事に気が付く。

兵士達は手に持った武器を取り落とし、胸を抑えて急に苦しみだしたのだ。相手をしていたランもその様子を訝しげに見ていたが、そこで驚愕する。

兵士達の体が突然、溶け出した。

人が徐々に溶け出し、体内に収まっていた臓物や骨が露出してはすぐさま同じ様に溶けていく様はあまりにもグロテスク。

異臭を放ちながら崩れていくそれにランは顔を強く顰めて口を押さえ、セイラムは顔を青ざめさせて両手で口元を覆っていた。

全身が服や鎧ごとドロドロに溶け始め、人の形を保つ事も出来な

い位になった所で、今度はその溶解物が徐々に小さくなっていき、最期はその場に何も残さずに消えてしまった。

良く見れば周りの兵士達の死体も同様に溶け始め、同じ様にして消えてしまっている。この様子だと、村の兵士達の死体も同じ事になっているのかもしれない。

終わった。

指揮官の男が退いた事で周りにいた兵士達も溶けて消えてしまい、その場にはツェイト達4人だけとなった。

村の方からはツェイト以外にも笛の音を聞き付けたのであろう村人達の声と足音が聞こえてくる。

村も兵士達がいなくなった筈だ。今の所はこれで大丈夫、そう思いたい。ツェイトは怒りの感情が急に鎮まった事に気付く事無く胸をなでおろしそうになったが、まだ予断を許さない事が一つある。

「ウィーヴィル！」

ハツと思いだしたようにセイラムがウィーヴィルの下へと駆けだし、ランとツェイトもその後を追う。

「ウィーヴィル！ 大丈夫なのか？ ウィーヴィル！」

セイラムがウィーヴィルの体を仰向けにして、呼びかける。腹部からの出血はもう止まっているが、ウィーヴィルは呼びかけに応える様子が無い。

「……ウィーヴィル？」

まさか、本当に？ 皆の頭の中で想像したくない事が思い浮かび、セイラムの目尻から涙が滲み出て来た。

「この場にいる者達が絶望に顔を歪み始めたその時、ウィーヴィルの眼が突然バチツと音が聞こえそうな勢いで開いた。

流石にこのタイミングでこの様に眼を開くとは想像できなかった三人は、三者三様に驚いた。

ランは「うわっ！」と飛び退き、ツェイトも無言のままに一步後ずさる。心配そうに呼びかけていたセイラムに至っては「ヒィっ！？」とまるで気味の悪いものを見たときの様な悲鳴を上げる始末だ。

「……………聞こえとる。耳元でわめかんでくれ」

「ウィーヴィルさん！ だ、大丈夫なんですか！？」

ランが上体を起こすウィーヴィルを気遣いながら訊ねると、ウィーヴィルは痛みに顔を少し歪ませながら自身の腹部の斬られた傷口を見た。

「どうやら、腹の筋肉で何とか止まってくれたみたいだな」

でなければ、今頃内臓が飛び出て悲惨な事になっている筈だろうからな。とウィーヴィルが自分の事ながらも客観的に言っと、セイラムとランは顔を青ざめさせた。

「歳は取りたくはないな、どうも打たれ弱くなった様だ」

どうやら指揮官の男に斬られた時に失神してしまっていたらしい。指揮官の男が逃げる頃には意識は戻っていたらしいのだが、血の流し過ぎで急には動けなかったとの事。

呻きながら傷口を抑えるウィーヴィルの顔は、死とは縁の遠い顔をしていた。

血を流し過ぎた所為で多少青褪めてはいるが、顔に精気が宿り、額から生えた一对の触覚もウィーヴィルの気力に合わせるかのようにはしゃキツと上へ伸びている。

元気なウィーヴィルを見て三人はハア〜と安堵して肩を落とす、セイラムがポツリと呟いた。

「でも、無事で本当に良かった」

「心配をかけさせてしまつて済まなかったな。だが、お前の先程の悲鳴は中々に堪える」

腹の傷より効いたかもしれん。セイラムの呟きをしっかりと聞いていたウィーヴィルが肩をすくませながら言っと、セイラムがバツが悪そうに眼をそらした。

緊張がやや抜けた彼らのもとへ、応援に来てくれた村人達が駆けつけて来た。ウィーヴィルの傷を見た村人達は慌てていたが、本人が元気そうな事に気付いて安心する。

村の方も兵がいなくなつて落ち着いたとの事なので、セイラムやランがその話を聞いてホッと安心した。

これにてこの騒動は一件落着、した……かに見える。

しかし、一部の者達にとっては、この騒動が本当の始まりに過ぎないように思えて仕方が無かった。

第5話 前編（後書き）

流石に三万文字近くもある文章を端末などで読むとなりますと、かなり手間になるのではないのかと思います、分けさせていただきまし
た。

第5話 後編（前書き）

文字数が多くなってしまったので前編後編に分けさせていただき
ました。

何かおかしな所がありましたら、ご指摘お願いします。

第5話 後編

場所は真夜中の村長キイトの屋敷の中、昨晚会合があった場所と同じ広間の場所。そこに昨晚の様に村人達が集まり、会合を開いていた。

避難所としての役目を終えた屋敷は、未だに怪我の深い者達の病棟代わりに一部の部屋を開放している状態だった。今集まっている村人達の中にも、体中に傷の手当てを受けた者がおり、中には会合が終わればそのまま屋敷の中にあてがわれた自分の病室へと戻る者等もいる。

幸いな事に死者こそ出てはいなかったが、長い期間安静にしていなければならぬ様な重傷者が多数出ている。

二二の母親もそうだった。あの時足に負っていた怪我は臍にまで達してしまっていたらしく、暫くは上手く歩く事が出来ないらしい。種族としての生命力の高さが幸いして、永遠に治らないというものではないのが彼女達親子の救いだらうか。

そんな怪我した体を引き摺ってでも村人達が参加しようとするこの度の会合の内容は、今回の兵士達の襲撃で分かった情報の共有と各自の状況報告だ

家や畑、家畜を焼かれた、家族が負傷した、村にどれほどの被害が与えられたのか。

兵士達を倒した、という追加事項があっても見逃せないその惨憺たる内容に一同は顔を顰めた。

それと、兵士達の実態だ。

ツェイト達が森の奥で見た時に様に、村に転がされた兵士達の亡骸も同様に溶けて消えてしまった。

中にはマスクをはがして正体を暴こうとしたら、それで溶けた兵士もいたらしい。そのあまりにも徹底された証拠隠滅に、内容を今一度確認した村人達は慄いた。

襲っては来るものの、正体が分からず、そして正体がばれる恐れがあつたら容赦なく溶けて何も無かつたかのように消えていく。まるで、幽霊を相手にしているような不気味さを村人達に印象付けた。

そしてある意味、これがもう一つの本題だ。

兵士達の今後の動向。村人達はこれが気になって仕方が無かつたが、彼らの目的を聞いて驚愕する。

あの兵士達は、セイラム一人の為に大人数を動員して村を襲つたのだ。しかも、彼らのリーダー格と思しき人物の発言が正しければ、彼女を捕らえる為なら何度でも襲うと言う。

その場にいたランと、傷の手当てを受けて腹に包帯を巻かれたウィーヴィルはその事については隠す事無く全て話した。

指揮官の発言に居合わせていたウィーヴィル達は、村に戻る際その事について隠すべきかと予定していたのだが、当人のセイラムがそれを止めた。

自分一人の為に、村の皆に迷惑をかけたくない。そう言って、今回あつた出来事を全て話す様に促したのだ。

その際見せたセイラムの顔が、何処か思いつめた様に見えたのに3人は気に掛かつた。

兵士達の目的を知った村人達がセイラムに向ける視線は様々だった。

疑問、驚愕、困惑、憐憫、そして、憎悪。

死者が出ていなかったからこそ注がれた視線は強くは無かったが、冷たく暗い眼差しを向ける者も少なからずいた事を渦中のセイラムは気付き、顔を俯かせ、新しく巻き直された包帯で覆われた手を強く握りしめた。

キイトは今回騒動を起こした兵士達の事について、セイラムと、そしてその親であるウィーヴィルに思い当たる節は無いのかと改めて問い質す。

しかし、問われたセイラムは分かりません、と本当に何も分からず困惑した表情で答え、その親であるウィーヴィルもただ静かにワシも覚えが無い、と答えた。

しかし、その返答にふざけるな、それで納得できるものか。と声を荒げて立ち上がった男がいた。

それは、セイラムに憎悪の視線を向けた者の一人だった。報告では、その男は兵士達によつて家を焼かれ、家族が負傷したと体を怒りで震わせながら言っていた。

自身の大切なものを傷つけられた事によるその怒りは他の皆も痛いほど分かる為、彼を咎めようとする者はいなかった。

いや、もしかしたら出来なかったのかもしれない。村人達は、自分達の感情を代わりに吐き出してくれる代弁者が欲しかったのだ。キイトも彼の気持ち分からない訳ではなく、村の皆の気持ちを考えると無碍に止めるわけにもいかず、男の発言を許した。

「あんた達親子は、元々はこの村に流れ着いて来た余所者だ。大方外で起こした問題のツケが今になって回って来たんじゃないのか」

どうなんだ！ 男は怒りを吐き出す様にウィーヴィル達親子を睨みつけながらそう言い放つ。

ウィーヴィルは男の怒りに晒されても臆する事はしなかったが、申し訳なさそうに深々と頭を下げた。

「……ワシらは本当に何も知らぬのだ。すまぬ」

「すまないだつて？ まだしらばつくれるのか……っ！」

「およしなさい」

今まで事の成り行きを静かに見ていた村長のキイトがウィーヴィルに掴みかかるうとした男を手で制した。

「貴方達の気持は分かります。しかし、あの兵士達を退けられたのも、ウィーヴィル達の力による所が大きい筈です」

違いますか？ キイトはそう尋ねると村人たちは俯いて反論しない。男もそれに関しては何感しているのか一瞬口ごもった。しかし、それでも男は引き下がらない。

「ですが、どうするのですか。このまま兵士達の件は放置するつもりなのですか？」

確かにウィーヴィル達は多くの兵士達を倒した功績があるだろう。だが、本人達も自分達と同じ被害者だったとしても、事件の原因と

なってしまったのなら看過出来るものではない。問題を先延ばしにする様な事があれば、取り返しのつかない事になってしまう。男の怒りから放たれる言葉は八つ当たり気味な所があるが、決して間違だけでも無い。

「その件につきましては、私も考えてました」

キイトは男にそう答えた後、ウィーヴィルをチラリと見やる。それに気が付いたウィーヴィルは小さく、そして重く頷いた。

ウィーヴィルの様子を確認したキイトは、一瞬だけ悲しげな顔で眼を閉じ、そして告げた。

「セイラムを、この村から追放します」

キイトの言葉に、その場にいた村人達が激しくざわめきだした。ツェイトもこの判断に驚き、庭に静聴していたその身を障子窓に手を駆けて乗り出しそうになってしまった程だ。

「本気なのか？」「だが、そうしなければ村は……」「何故この様な事に……」

セイラムを庇おうとする者、妥当だと村長の判断に一応は納得する者。村人達の様々な意見が飛び交う中、最初の発言以降黙っていたセイラムは、失神するのではないのかと思う程に顔が真っ青になっってしまった。

ざわめく大人達の中で、ランがキイトに慌てて意見した。

「お婆様！ セイラムを見捨てるのですか！？」

「私は、村の皆と一人の娘の命を秤はかりにかけるつもりはありません」

キイトが普段は見せない冷徹な態度でランの言葉を切り捨てる。

それは、集団を統率する者としての責務か。

しかし、ランにはそれを受け入れる事が出来なかった。

「しかし、これではセイラムは……」

生贄ではないですか。絞り出す様に口にしてランは両膝に手を置き、頭を俯かせた。

ランも事の重さを理解しているが故に、それ以上の行動に出せなかったのだ。

一度の襲撃でこれ程の被害を与えられ、しかもこれがセイラムがいる限り何度でも繰り返されると宣言されたのだ。

一体彼らの組織にどれほどの人員がいるのか定かではないが、そう何度も責められては村が保たない。

そして何より、兵士達の被害に遭ったこの場にいる村人達の心情を慮おもんはかって、安易な発言をする訳にもいかなかった。

沈むランを一瞥した後、キイトはこの判断に異議がある者はいますかと村人達に訊ねるが、誰も異議を唱える者はいなかった。彼らも考えに違いはあれど、キイトと同じ結論に至ったのだ。

セイラムが村にいられる期間は三日間。それまでに村から出る様にとキイトはセイラムに言い渡し、この会合はお開きとなった。

会合が終わった後、セイラムが一目散に屋敷から飛び出して行った。それはあの場の空気と、自身を責める様な視線から早く逃れたいがためか。

それを見たツェイトも慌てて後を追おうとした。普通ならばそつとしてあげたい所だが、今のセイラムの心境と性格を考えれば、自棄になって村から出て行きかねない。

ツェイトが一步を踏み出そうとしたところで、ウィーヴィルに呼び止められた。

「ツェイト！」

「すみません、セイラムを見てきます」

「分かった。だがその後、今から言う場所へ来てくれないか」

話したい事がある。そう深刻な表情で告げたウィーヴィルを見て、何か思う所があったツェイトは指定された場所を聞き、分かりましたと一言答えて村人達が散会する屋敷を抜け、真夜中の村の通りを走り抜けた。

セイラムの脚力とツェイトの脚力ではツェイトに分がある。その為セイラムに追い付く事はすぐ出来た。

「セイラム」

ツェイトが声をかけると、セイラムがビクリと足を止めて弱々し

く振り向いてくる。その顔は、先日見せた時の様な明るさが無くなり、精神的に追い詰められているせいか憔悴に満ちていた。

セイラムの様子を見て、ツェイトはかける言葉が思い付かない。気休めの言葉も、今の彼女にとっては害にしか成りえないかもしれないと思ってしまったからだ。

数秒の沈黙が二人の間に続いた後、先に口を開いたのはセイラムだった。

「……………ごめん」

突然の謝罪に一瞬困惑するツェイトだが、あの時虫の異形との戦いで吐き出したセイラムの言葉を思い出す。

だが、ツェイトは謝るべきは自分なのだ、とセイラムに返してツェイトも謝った。

「それは俺もだ。もっと早く踏ん切りがついていたら、セイラムに怪我をさせなかった」

今もツェイトの中では、セイラムに血を流させてしまった事への後悔の念が色濃く残っている。

「……………私なんて、私の所為で村の皆を巻き込んだ」

それに比べれば、こんなもの。包帯の巻かれた手を軋ませる程に握りしめながら、セイラムは苦々しく呟き、一刻の間を置いてツェイトに告げた。

「明日の早朝、村を出る事にするよ」

明日？ 三日間は猶予があつた筈だぞ。 ツェイトが驚きながら訳を聞くと、早く出かければそれだけ兵士達は自分を狙つて村に手を出さなくなるはずだと返つて来た。

こんな時でも、自分よりも他人の事を考えるのか。

いや、他人ではないか。およそ16年間村の中で生きて来たセイラムにとって、村の皆はもっと特別な存在なのかもしれない。あの様な憎悪の眼で見られても、それを己の非とするセイラムの優しさが、ツェイトにはどこか痛々しく感じた。

「私の方がツェイトより先に村を出る事になつたのは驚いたけど、縁があつたら旅先で会うかもな」

そういつてセイラムは口元を無理やり吊り上げて笑つそぶりをするも、それは誰から見ても強がりには見えぬ。

「明日は早いだろうから、帰るよ」

また寝坊したらたまらないからな。 ツェイトの返事を待たぬまま挨拶を手軽く済ませて後、セイラムは早々に家へと走って行ってしまった。

ツェイトは、その背中を只見ている事しかできず、最後に見せたセイラムの顔が頭から離れなかつた。

泣いていたのか。

複雑な気持ちを胸に抱きながら、ツェイトはセイラムの安否を確認した後ウィーヴィルに言われた場所へと向かった。

そこは、ツェイトが普段寝床としていたウィーヴィル達の家の中庭から少し離れた森の中だった。人の手による灯りはそこには無く、月明かりだけがその場を照らす。

そこでは岩に腰掛けて静かにたたずむウィーヴィルが一足先に待っていた。ツェイトが来た事を俯かせていた顔を上げて確認すると、口を開いた。

「夜遅くに済まなかったな。セイラムはどうだった？」

「……明日の早朝には村を出ると」

「……そうか」

ウィーヴィルが苦々しい顔つきで短く答え、ツェイトは驚かないウィーヴィルに何処か違和感を感じた。

「驚かないのですね」

「わしが村長に事前に進言したからな……」

その言葉に、ツェイトは自分でも驚く位に声を荒げてしまった。それは、先程見たセイラムの表情が忘れられなかったからか。

「何故そんな事を！」

「一度は事実を隠そうとしたワシが言える事では無いのかも知れな

いが……村と、そしてセイラムの為だ」

「村は、分かります。ですがあの娘への処置、あれが彼女の為だって言うのですか」

セイラム一人で村の外に放り出せば兵士達の格好の的だ。幾ら身体能力が高いとは言ってもセイラムのそれでは限度がある。いずれは兵士達の数の力に押しつぶされてしまうのは容易に想像出来てしまう。

「そうだろうな……ワシも、自分が酷い事をしている自覚がある。ワシは間違いない酷い親だ」

ウィーヴィルの顔は苦渋に満ちていた。それは、セイラムに村から追い出させると言う選択を取った事への後悔が強いと言う事を意味しているのか。

しばしの沈黙が二人の間が続いた後、ウィーヴィルは改まって話した。

「お主に知っておいてもらいたい事がある」

元々此処へはウィーヴィルが話したい事があるとの事でやって来たのだ。ツェイトは気を鎮めてウィーヴィルの話に耳を傾ける事にした。

「セイラムの事だな」

ツェイトはある程度察しがついていたのか驚きはしなかったが、何故ここでセイラムの話が出るのか疑問に思った。

「あの娘は、ワシの本当の娘では無い」

薄々気づいているんじゃないのか？ そう言われたツェイトは何も答えない。しかし沈黙が肯定と言う名の答えでもあった。

元々外見の年齢的にかなり歳の離れている二人だ。それに、セイラムの体中にある外骨格は昆虫人と言う枠から逸脱しているものがある。

今この場にはいない母親の遺伝かもと言う可能性も考えられたが、その母は一体何者なのだという疑念が浮上するも、そう言う訳では無いらしい。

ならばセイラムは一体誰の、とツェイトが訊ねると、ウィーヴェルは今のツェイトにとっては爆弾発言に等しい事を言っただけだ。

「セイラムは、プロムナードの娘だ」

「……………？」

今何と言った？ プロムナード？ 娘？ セイラムが、プロムナードの……娘！？

体はまるで銅像の様にピクリとも動かないツェイトだが、その内心ではウィーヴェルの言った言葉を噛み砕きながら理解を混濁させている。まさかセイラムが親友の娘だなどと言う話を聞かされれば、ツェイト個人からしてみれば、うろたえずにはいられない。

だがそれと同時にセイラムの体について合点がいった。ハイゼクタの様なあの外骨格は、プロムナードの遺伝なのかと。

セイラムは、ウィーヴィルがプロムナードと別れて再び一人旅を再開した時に突然現れたプロムナードに託された。そして、彼女を育てるべく、縁のあるこのカジミルの村に厄介になる事となったぞうだ。

何故セイラムの事を早く言わなかったんだ、という非難の言葉がツェイトの口から出かけたが、昨日、一昨日の自分の状況でそんな事を言われたら余計混乱していた可能性もあるので、ウィーヴィルのこのタイミングでの発言は賢明なもの一応納得した。

「セイラムに、この事は？」

「ワシの本当の娘ではない事は既に知っているが、プロムナードの事は何も知らされていない。プロムナードが知らせるなど釘をさしていたので……な」

何故あいつはそんな事を、それとも知られると不味い様な状況にプロムナードはいるのかと、ツェイトは友人の取った行動の意図を讀もうと思案する。

「そしてこうも言っていた。「もし自分の娘だと知られたら、間違はなくこの娘は狙われる」ともな」

それがあの兵士達、と言う事が。

しかし何故プロムナードの娘なら狙われるんだ？ プロムナードが何かしたのか？

ツェイトの疑念は減るどころか募るばかりだった。虫の異形の事といい、セイラムとプロムナードの事といい、そして、自分自身に感じた違和感。

「お主に、頼みがある」

「……何でしょう」

今まで話の流れと、其処から頼み事と言われてツェイトはその内容が何となく予想出来ていた。

ツェイトが頼まれた事、それは

翌朝、今だ太陽が昇らず、夜の帳が上がり切っていない早朝の頃。誰も起きる気配の無い静かなカジミルの村の大通りを、セイラムは独り歩いていた。ツェイトやウィーヴィルに別れを告げることなく、静かに村を出ようとしていたのだ。

普段着ている丈の短い巫女服の様な服装の上から獣の皮で出来た蓑状のものを羽織り、風呂敷包みを懷で袈裟掛けにして持ち歩いている。

槍を肩に担ぎながら、大通りの中を静かに歩くその足取りは、どこか寂しげであった。

「……はあ」

「おはよう」

「うわっ!?!?」

大通りを越え、入り口の柵を通り抜けた先で軽く溜息を突いた時、真横から声をかけられてセイラムは素っ頓狂な声を上げてその場から飛び退いた。

そしてその声の主を見て驚く、柵を背にして胡坐をかいて座っているツェイトがいたのだ。

柵の方がツェイトよりも大きかった為か、それとも思いつめてるあまりに周りに気がつかなかったのか、セイラムはツェイトの間近にまで近付いた所で、ようやくその存在を確認出来たのだ。

「ツェイトっ何で……見送りに来たのか？」

何故と問いかけた所で、セイラムはツェイトが自分の出発を見送りに来たのかと考え、表情を暗くした。対するツェイトはその問いに敢えて答えず、代わりにセイラムにあるものを手渡した。

「その前に、これを」

ツェイトは手に持っていた物をセイラムの前に差し出す。ツェイトの手が大きい故に、その手の中に何か持っているのをセイラムは気付けなかった。ツェイトの大きな手の中に収まっていた物は、手折りでつくられた簡素な封筒だった。

セイラムがおずおずとそれを手に取り、中に入っていた書簡に眼を通す。

読んでいる最中にセイラムは泣きだしそんな顔になるが、鼻をすすって再び文章を読み進めていくと、今度は眼を見開いて驚き、ツェイトを見た。

「ツェイト、これって……」

「その手紙に書かれた通りだ」

胡坐をかいていたツェイトはすつくとその場から立ちあがり、尻に付いた土と草を手で払い落とし、セイラムを正視して告げた。

「俺と、一緒に行かないか」

時間は遡り、ウィーヴィルがツェイトに頼み事をする所まで戻る。

ツェイトが頼まれた事は、セイラムの傍にいてやって欲しいとの事だった。つまり、セイラムと一緒に村を出ると言う事だ。本来ならばあと数日はこの村で厄介になる予定だったが、思わぬ事態で予定が一気に繰り上げる事になる。

「身勝手な事だとは自覚している。だが、これ以上はこの村に留まらせる事も出来ぬ。今回のあの男との戦いでも分かったが、ワシではもうあの娘を守り通す事が出来なくなってきた。だから……頼む」

セイラムを、守ってやってくれ。そう言うや否や、ウィーヴィルはその場に両膝を突き、額を地面にぶつけるような勢いで土下座をした。

ツェイトは慌ててウィーヴィルに頭を上げてくださいと頼んだ。

その光景は、まるで娘を嫁に出す父親と彼氏の様であったが、そんな甘いものではない。

娘を狙って襲ってくる輩が漏れなく付いて来ると言う、爆弾付きの不良物件の様なものだ。彼女と共に行くと言う事は、危険が常に隣り合わせとなってしまうのだ。故にウィーヴィルは己の頭を地面に付けて此処まで頼みこんでいるのだろう。先の兵士達の指揮官と戦った際に負った傷で、自分では庇う事が出来なくなりつつある事を自覚し、全ての事情を知るツェイトに縋ったのだ。

その姿は血が繋がってはいないとはいえ、紛う事無く父親のものだった。

しかし、ツェイトはそれでも解せない所があった。

「……ご存知でしょうか？ 私は、いずれ元の世界へと帰らなければならぬ身です。そうになると、あの娘はいずれ独りになってしまいます」

ウィーヴィルはツェイトやプロムナードの素性を知っている身だ。その上でセイラムを託すと言うのなら、自身を助けると言う最初の約束とは矛盾している。それとも約束を反故にする程の父性が上回ったのだろうか。

「これは、プロムナードの願いでもあるのだ」

「プロムナードが？ 俺にあの娘を託す様にと……そう言ったのですか？」

「ああ、そうだ。理由は終ぞ教えてはくれなかったがな……」

土下座の体制から頭を上げ、姿勢を正したウィーヴィルは予想外

の返答をツイイトに返し、返された本人は低く唸りながら考え込んだ。それが本当ならば、セイラムを追いだすと言うのも、自分と一緒に行かせる為の方便にも聞こえてくる。

訳が分からない。あいつは元の世界へ帰る気が無いのか？ いや、20年も此処で暮らせばそんな心変わりも起きるのか。しかし何の為に……

プロムナードはツイイトに比べて感情で動くタイプの男だが、馬鹿では無い。

彼は直感で動く事が多いが、目的と理由、因果関係のある程度しつかりさせてから行動に移せるくらいの思慮深さも兼ね備えている。

そんな彼が、ウィーヴィルや自身に育児放棄紛いな真似をするのは何故だ？

狙われているが故に、止むを得ずウィーヴィルに託したと言うのは一応理解出来る。しかし、其処から更に自分にセイラムを託すような真似をするその意図、それが分からない。

何か理由があるのか？

思考に思考を重ねて、プロムナードの意図を汲み取って予測を立てても終ぞ分かる事が出来なかったツイイトは、セイラムと一緒に行けばそれも分かる事か、これにも何か訳があるのだろうと割り切る事にした。

「わかりました。彼女も連れて行きましょう」

「ワシは、お主に何と言えば良いのか……」

無念そうに顔を顰めるウィーヴィルにツェイトは良いんです、と静かに首を横に振った。

「セイラムの素性を知らされて、プロムナードから頼まれた事なら、あの娘の事をますます見捨てられなくなりましたから」

そして話は今に至る。

ツェイトに事情を告げられたセイラムは、震えながらツェイトに問いかけた。

「……良いのか？ ツェイトは、まだ村にいるつもりだったんだろ？」

「ある程度はウィーヴィルさんから教えてもらっているから、後は現地で慣れれば良い」

習うより慣れろと言っ言葉も存在するのだ。

リアル世界で開拓者と言われた者達は、見知らぬ言語と文化の地に足を踏み入れても臆すること無く切り拓いて行った。

この世界もまたそうだ。

ネオフロンティア、新たな開拓地。言語と文字さえ分かっていたらば上等。文化と歴史をある程度把握していれば尚の事だ。

そして自分自身の今の体もある。歴史に名を残した先人達に比べれば、随分と優しい境遇に感じる。少なくとも今は。

「そ、それに私は、狙われているんだぞっ」

「だから、俺がいるんだ」

迷うことなく言いきるツェイトにセイラムは啞然とする。以前の様な苦悩していた素振りが何処にも見られないのだ。

ツェイト自身でも啖呵を切った自分に内心で驚く。昨日まではワイルドマツクの死でナイーブだった筈なのに、兵士達の襲撃を退けた後からどうもその手の感情が嘘の様に無くなっているのだから。敵対していたとはいえ、兵士達に対して虐殺まがいの事をしでかしたにもかかわらず、吐き気も怖気も感じられない。前までの自分ならば恐れおののいている筈だと言っのに。まさか、この体になつたせいでおかしくなってきたのか？ それとも環境がそうさせたのか。

セイラムが顔を俯かせながら、体を震わせて再度問う。

「……本当に、良いのか？」

「ああ」

「こんな私で、本当に良いのか？ ウィーヴィルに言われたからとかじゃ、ないのか？」

「これは俺の本心だよ」

ウィーヴィルの言葉というのにも無きにしも非ずだが、本心が大半を占めているのも確かだ。そして、その中にはもしかしたら彼女と一緒にいればプロムナードと会えるのかもしれないと言うという、根拠の無い打算も含まれている事にツェイトは密かに罪悪感を感じてもいた。

「……………う……………う……………」

今まで押さえていた涙線が決壊した様に、セイラムは俯いたまま黒い眼から大粒の涙を流し出してしまった。今の今まで思い詰めていたものが限界に達したのだろう。

「お、おい、泣かないでくれ。村の人が起きる」

「だ、だつてえ……………」

意外と涙もろい、等と思いながらも慌ててセイラムを泣きやませようと四苦八苦するカプトムシの巨人。

ハイゼクタ のツェイト、推定年齢26歳。NFOの世界では幾多の敵を屠るも、女の涙には少々弱かった。

セイラムが落ち着いて来た所でツェイトはセイラムに渡した手紙には書かれていなかった事も話した。ウィーヴィルは村に残って皆を守る事に尽力するらしい。当初はウィーヴィルも一緒に行こうかと考えていたらしいのだが、寄る歳波と、今だ立て直しの真っ最中の村を放つてはおけないとの事だ。

セイラムの親と言う事もあり、村人達からは多少なりとも悪感情を持たれるかもしれない。ウィーヴィルはウィーヴィルで辛い日々を過ごす事になるだろう。

「ランには何も言わなくて良いのか？」

出発する際、ツェイトはある事を思いだしてセイラムに訊く。

それは彼女の幼馴染であるランの事だ。結局一言も話す事無く村から出て行ってしまふ事になってしまったが、ランがどのような性格なのかは先日的一件で短い間一緒にいたのでちょっとは理解出来たつもりだ。本質的な所は真面目で良い奴なのだろう、彼は。

それ故に、このまま黙ってセイラムを連れだしてしまう事に少し気が引けたのだ。ランはセイラムに好意を持っているらしい。そうでなくとも、セイラムの事を色々と気にかけていたのだ。せめて少し話をしてやったほうがいいのではと、ちょっとお節介な心が疼いたのだ。

しかしセイラムはその提案に首を横に振った

「ランにも色々と迷惑をかけたから色々と言いたい事はあるけど…
…会いに行けば、あいつの事だから騒ぎ出しそうだ。それだと皆が起きてしまふかもしれない」

「いや、でも、本当に良いのか？」

「何でそこまでランの事を気にしているんだ？」

話した事なんて無いんだろ？

本当に何も分からないまま首を傾げてそう述べるセイラムを見て、ツェイトはランが哀れに思えてきてしまい、心の中で合掌した。

嗚呼若者よ、お前の恋心は意中の者に届くどころか空中分解して果てたぞ。

セイラムがその手の感情に鈍いのか、それとも今までランのアップローチの仕方の問題があつたのかは定かではないが、二人の仲は良いい友達同士で終わってしまいそうである。

これ以上突っ込んだ事を話すとボロが出そうなのでいや、別にとツイイトはこの話を切り上げる事にした。

二人は村の入り口の先にある丘まで向かい、カジミルの村を改めて其処から眺めた。

ツイイトが初めてこの場から見た時と比べると、いくらか住居が燃え落ちたり破壊されていた。兵士達の遺した傷跡が後を引いているのが見て分かる。今二人がいる丘の上も、先の虫の異形との戦いで草の絨毯が広がっていたのが焼け野原になってしまっていた。

ツイイトは視線を村から隣にいるセイラムの方へチラリと移すと、やはりまだ村での事を気にしているらしく、暗い顔で村を見つめていた。

考えてみればセイラムは16歳、リアルだったらまだ高校生の年齢だ。その歳で憎悪の眼で見られ、兵士達から狙われ、拳句の果てには村から追い出されてしまうと言うのは精神的にはとても辛く、酷な話である。

暫く村を見た後セイラムはギョツときつく目を瞑り、数刻それを続けた後、村に背を向けた。

「……行こう」

「もう、良いのか？」

「ああ、気は済んだ」

彼女なりに村への別れは告げたのだろう。気持ちを切り替えたセイラムの表情は先程よりも暗さは無くなり、代わりに何かを胸に秘めた様に硬く、鋭かった。それはどこか危うさを孕んだ様に見えるのは、ツェイトの気の所為なのだろうか。

セイラムの雰囲気違和感を感じながらも、ツェイトはある事を思いだした。

「なあセイラム、此処から近くの街までどれくらい掛かるんだ？」

「ん？……私達昆虫人の足で行けば、地方の都までは一日も掛からないけど、ツェイトの足なら半日以内で着くんじゃないかな」

ツェイトの今後の目的はプロムナードを探し、元の世界に帰る事。元々カジミルの村にいたのも、都市がその道中にあるからその為の準備の為の滞在という目的であった為だ。

それがどうしたんだ？ セイラムはツェイトの質問に首を傾げ、答えを聞いたツェイトは顎に片手を当てて考え込む。それは今後の行動と、それに伴うであろう兵士達と遭遇する確率だ。

件の兵士達がセイラムの事を狙っていると言うのなら、もしかしたら自分達がこの先向かうであろう場所にある程度は当たりを付けている可能性がある。外か中かは分からないが、近場の街で待ち

伏せをされて罾を仕掛けて待ち構えている可能性を危惧したのだ。

兵士達を率いていた指揮官の男は、ツェイトの一撃で片腕を失うと言う重症を負った為、彼自身が出るかどうかは不明だが、先行している兵士がいるかもしれないので安心は出来ない。

なので、出来るだけ彼らの予想の先に行くような手が欲しい。

あれなら多少は時間が稼げるか？

ツェイトはそれに関して最適なものが自身にある事を知っている。一応この世界に来た時には軽く試して問題無かった事は確認済みだ。

よし、これでいくか、とツェイトは考えをまとめてそう決断した。

「なら、もっと遠くへ行くと言うのは？」

「もっと？ それだと城下町とか大きな都まで行く事になるけど、私達でもかなり掛かるぞ」

「それなら尚更好都合だ」

ツェイトの言葉に怪訝そうにセイラムが何か言おうとしたその時、ツェイトの背中の外骨格が音を立てて勢いよく開いた。

それはまるで、昆虫類にある鞘翅の様だ。

そしてその外骨格が開いた内部から、折り畳まれていたものが飛び出るような勢いで展開される。その表面は薄く、葉脈の様に筋が広がっており、ツェイトの外骨格の色よりも薄い青色に染まっていた。それが意味するものはつまり……

「飛べるのか!？」

「……悪い、教えて無かったな」

隠していた訳じゃないんだが、とツェイトは驚くセイラムを見て頬を掻き、背中の翅をゆっくりと動かして動作確認をする。

森でセイラムと出会ってからずっと走って移動していたが、ツェイトは空を飛ぶ事が出来る。

ツェイトが思い付いた案とは、空から遠くまで移動するという方法だ。そうすれば地上で移動しか出来ないであろう兵士達との距離も遠のくし、その距離だけ出くわすのに時間を要し、彼らを撒く事が出来ると予想したのだ。

「何で最初に会った時は飛ばなかったんだ？」

そうすればもっと楽に村に帰れたんじゃないのか？ と初めて出会った時の事をセイラムは思い出し、ツェイトに訊ねた。

ツェイトの脚力も十分なものであったが、飛ぶ方が早いんじゃないかと言うのがセイラムの意見だった。

「それは飛べば分かる。さ、乗ってくれ」

翅を広げた背中では背負う事が出来ないの、必然的に前で両腕を人が座れる様に組み、セイラムをそこに乗せる事になる。ツェイトは翅を広げたままセイラムが乗りやすい様に片膝を突いて屈んだ。セイラムはツェイトの言いたい事が理解でき、軽い身のこなしでツェイトの腕の中に収まる様に座りこむ。

戸惑いもなく座りこむ姿にツェイトはちょっと戸惑った。負ぶさ

った事もあるので今更と言えは今更だが。

「じゃあ、行くか？」

「あ、ああ。よ、よろしくお願いします」

飛ぶ事に慣れていないのか、セイラムは緊張しながら何故か敬語で答えてきた。

そんな様子がおかしかったのか、ツェイトは外骨格の内側で僅かに苦笑し、翅を高速で羽ばたかせた。

すると、ツェイトの巨大な翅が高速で動く事によって辺りには強風が巻き起こり、低く腹に響き渡る様な重低音が響き渡る。

その翅音は、まるでヘリコプターが飛び上がる際に聞こえるローターの轟音の様であった。

ツェイトが敢えて飛ぶ事を避けたのは、この翅音に依る所が大きい。これは、ツェイトの巨体とその重量を飛び上がらせる為に此処まで羽ばたかなければいけないと言う、一種の弊害である。

もし村に向かう時飛んで行ったのならば、その翅音による轟音で兵士達に所在がばれてしまう可能性が高い。だからツェイトは敢えて走る事を選んだのだが、結果として別の要因で居場所が割れてしまった為、その努力も水の泡となってしまったが。

もしかしたら、この翅音で村人達が起きてしまつかもしれない。ツェイトは急いでこの場を発つ事にした。

「飛ぶぞ。俺の腕にしっかりと掴まっているんだ」

「え、ええ！？ あ、うん。分かった」

ツェイトの翅音の所為で小さな声はかき消されてしまつて、自然とツェイト達は声を大きくして話す。

セイラムが腕に強くしがみついた事を確認したツェイトは、その巨体を徐々に宙へと浮かびあがらせる。そして、途中から急に速度が上がリ、辺り一帯に轟音を鳴らして激しく羽ばたく蒼い翅は、ツェイトの巨体を遙か上空まで飛ばして行つた。

「セイラム、大丈夫か？」

場所は地上から最低でも四千メートル以上は離れた上空、村からも結構離れている。太陽の昇らぬ暗い朝の空を、ツェイトは飛んでいた。

気温は地上よりも大分低くなり、肌を刺す様な冷たい冷たい風が強く吹き込んで来る。下に視線を向ければ、雲が自分達の下を流れているのが見える。

ツェイトは自身の腕の中で、毛皮で出来た蓑で体を丸めているセイラムの様子を見る。

「は、初めて空にきたけど、こ、ここ、こんなに寒いなんで」

ツェイト達がいる場所の気温はおよそ一桁台、間違つても半袖で来るような場所では無い。

しかし蓑の下が上下半袖のセイラムは毛皮の蓑に包まり、全身を

小刻みに振るわせ、齒をカチカチと鳴らしながら吹き荒ぶ寒風とその寒さに耐えていた。

「つ、ツェイト、も、もももうちよつと低く飛べないのかかが！？」

震えながら喋っている所為か、途中から正確に聞き取れなかったツェイトだが、セイラムの言いたい事は理解出来た。しかし、今ここで高度を下げるわけにはいかない。翅音との大きさと言つのもあるが、他にも、この時間にこの高さで無いと駄目な事があるのだ。

だからといってそれでセイラムが凍えるというのは本末転倒。なのでツェイトは一つ手を打つ事にした。

ほんの一瞬、ツェイトの頭部の角がパリツと静電気が起きた時の様な音を立ててから数秒後、ツェイトの体に異変が起きた。

それに最初に気付いたのは、ツェイトの腕の中にいたセイラムだった。

「あ、あれ？ 暖かい？」

その正体は、電気を生み出す際にツェイトの体から発する熱だ。

とは言つても、虫の異形や指揮官の男の時の様に焼けるようなものではなく、触れた者を温める程度のものだ。

殺傷レベルまで電気の出力を上げれば全身は高熱を発し、触れる者の肌を焼け爛らせてしまうが、逆に極最小限に押さえれば、この様に即席の暖房器具となる。

程良い暖かさなのか、震えが大分治まったセイラムは、ツェイトの腕に、さながら抱き枕にしがみ付く様にして全身を押し付けていた。それでもしないと体が温かくなならない、と言つのもあるのだろ

う。先程の寒さに震えて強張っていたセイラムの表情は、ツェイトの体から発する熱で暖められたおかげで随分と気持ちさそうに眼を細めていた。

「……はしたないから自重してくれ」

「寒くてそんな事言っつてられないんだよ」

恥が怖くてやっつてられるかと言うかのように、セイラムはツェイトの腕にしがみ付く事を止めない。

ツェイトからすればセイラムの今の態勢は、子供がじゃれついて来ている様な感覚なのだが、客観的に見ればセイラムの今の姿はうら若き乙女がする態勢では無い。

とはいえ、ツェイトがこの高度を維持しているのが原因なので、ツェイトはそれ以上は咎めなかった。

ツェイトの体から発する熱のおかげで寒さがだいぶ和らいだセイラムは、先程から一向に動く気配の無いツェイトの顔を見上げた。ツェイトがある一方を見つめたまま移動しようとししないのだ。

「ツェイト、なんで行かないんだ？」

「もう少し待つと分かるよ」

「分かるって何が……」

そこまで言いかけた所で、セイラムは突然地平の彼方から眩しい光が出て来た事に気が付いた。

あまりの眩しさに片手で光を遮りながら、その光の出所を見て、言葉を失う。

遙か大地の向こうからゆっくりと顔を出しながら昇るそれは、太陽だった。

地平線の手前から時間をかけて昇り、地上のもの全てに等しく光を注がんとする程の勢いで輝きを放つそれは、とても力強かった。

日に照らされて、暗い色に染まっていた山々は一面緑色に彩られていく。

その広がる青空も、大地に広がる森と山も、空を流れていく雲も、どれもが輝いて見えた。

初めて見る大自然の新たな一面を眼のあたりにし、眩い光に眼を細めてセイラムは見惚れた。

「凄い……陽の光って、こんなに綺麗だったんだ」

「……だな」

この世界に来て初めて上空から日の出を見たツェイトも、セイラムのこぼした言葉には同感だった。

ツェイトはこの世界に来て飛べる事が分かってから、いずれはやってみたいと思っていた事なのだが、予想以上の美しさだった。

「もしかして、これ待ってたのか？」

暫くその光景を二人で見えていたが、そこでセイラムが向きをツェ

イトに変えて訊いてくる。

「まあ、旅立つ前に縁起の良いものの一つでも見ておこうかなと思っ
つてな」

出かける時は気分良く行きたいじゃないか、そう付け足してツエ
イトはセイラムに話す。

本人の前では言わないが、暗くなりがちだったセイラムの気が少
しでも紛れれば、等と言う目的も含まれていた。

「そっか……そうだよな」

再び視線を陽が昇る方へと向けたセイラムの顔は、自然と頬が緩
み、口元に笑みが出来ていた。少なくとも、それはツェイトの体が
温かいからというだけではないだろう。

「ツェイト」

「うん？」

「……………ありがとう」

「……………」

翹音でかき消されてしまいそんな小さな声でセイラムが言うもの
の、それをツェイトの聴覚はしっかりと聞きとっていた。

そして、その礼は何に対してのものかは敢えてツェイトは聞か
ない。少なくとも、セイラムなりに気が晴れたのであるうその表情を

見て、この風景を見せた事が無駄ではなかった事が分ければ、それで十分だった。

「ようし、じゃあ行こうか！ 目指すは……ツェイトの友達がいる所、なのか？」

セイラムが威勢よく声を上げる。その顔には村を出たばかりの時の様な暗いものは無く、ふっきれた様に清々しい顔つきだった。額の触覚も上へとピンと伸び、気力は十分と言った所か。

そしてセイラムは、ツェイトに確認を取る様に訊き返して来た。元々これは、ツェイトがプロムナードを探す旅に、セイラムが付いて行くという形での旅なのだ。肝心の本人から確認を取らないと意味が無い。

「あいつのいる所を探すにしたって情報が欲しい。だから。セイラムが言ってた城下町か都……だったか？ そこに行こうと思う」

プロムナードが何処にいるかは分からないが、行先は人が多くて情報が入りやすそうな場所が理想的だ。そこに行けば、何か手掛かりが掴めるかもしれない。

それに、もしかしたら他のプレイヤー達もそこにいるのかもしれない。プレイヤーの方が他のプレイヤーの事を詳しく知っていると考えるのはそう難しくは無いだろう。それにもしかしたら、彼ら同士で既にコミュニティを形成しているという可能性もあり得る。

「そうか……実は私も行った事が無いから少し楽しみなんだ」

「行った事が無いって事は、ウィーヴィルさんから教わったのか？」

「うん、ウィーヴィルは昔から私に色んな事を教えてくれた」

少し寂しそうに語るセイラムを見て、ツェイトはもしかしたらウィーヴィルはこんな時が起きた時の為に彼女に教え込んだのではないのだろうかと予想する。最悪、セイラムが一人でもやっていける様にするために、と。

それにしても、とツェイトは自身の腕の中に収まっているセイラムに眼を向けた。

まさかプロムナードの奴に娘が……ねえ。

話を聞いた今でも、何処かで信じられないと思う気持ちが僅かに残る。

始まりは、川を流れて来た彼女を拾った事が発端だった。

それがどういう因果か、助けた娘は自分の友人の娘だと言う事が判明する。世の中とは狭いのだか広いのだかよく分からないものだがまあそれも良いか、とツェイトは思う。

助けるって、言ったしな。

誰でもなく、それはツェイトが自分自身に戒める様に言った言葉だ。

こうなれば一蓮托生、とことん付き合ってやるうじゃないか。彼女と出会ったこの縁が、いずれは自分をプロムナード出会えるもの

と願って。

「それじゃあ場所、分かるか？」

「えーっと……あっちだ！」

「よし、それじゃ飛ばすぞ」

ツェイトがセイラムの指さす方向に向かって飛翔を開始した。

太陽の光を浴びて、蒼く輝く甲虫の巨人は、腕に抱いた昆虫人の少女の導きに従って大空を駆けて行く。

彼らの行く先に何があるのかは当人達も、そして、誰も分からない。

「セイラム」

「ん？ 何だ？」

「改めていうのもおかしいけど、これからも宜しく」

「……ああ、宜しくな！」

だが少なくとも、今の彼らに不安は無かった。

第5話 後編（後書き）

ようやく村から出ました。此処から先は友を訪ねて三千里状態です。

毎回拙作を読んでもいただき、そして感想を書いていただきありがとうございます。

アドバイスにもなりますし、励みにもなりますので、感想欄はいつも楽しく読ませて頂いてます。

第6話 前編（前書き）

ようやくと更新出来ました。

前話ほどではないにせよ、文字数が多いので前編後編に分けさせて
いただきます。

第6話 前編

そこは、ネオフロンティア大陸の何処とも知れぬ場所。

窓の無い壁に、所々設置されている非常灯の様な灯りが、薄暗い通路に僅かな明りをともしていた。

その通路を、金属特有の甲高い音が通路に響き渡る。

足音の主は、槍を背負い、黒いフルプレート製の鎧を見に付け、虎の頭部を模した鉄仮面を頭にかぶった男。先のカジミルの村の襲撃事件の首謀者であり、セイラムを狙う兵士達のリーダー、指揮官の男だ。彼の足音以外は何一つ音が聞こえない為、金属で出来た脚甲が地面を荒々しく蹴る音がやけにうるさく感じる。

指揮官の男の体は、襲撃の際にツェイトによって手痛い傷を負わされた筈だが、今はその痕跡が何処にも見当たらない。

ツェイトによって肩からごっそりと斬り飛ばされた腕の部分は、最初から何事も無かったかのようにくっ付いており、その姿と歩みも電撃で重度の火傷を負った重症人のそれとは程遠い、精力に満ち溢れた力強い戦士のものだった。

速足で通路を通る彼の後ろからは、数人の兵士達が彼を引き止めるように近付いてきた。

「御戻り下さい、サバタリー様」

「博士は只今ご多忙の身、誰ともお会いにはなられないかと……」

「ええい邪魔だ木偶どもが！」

怒鳴り声と共に一線。人間業とは呼べない程の速度で背中 of 槍を抜刀し、そこから繰り出されるその斬撃が、止めようとしていた兵士達の首を飛ばす。

それだけに留まらず、指揮官の男……サバタリーの放った斬撃は周囲の壁にまで届き、周囲には横一文字の亀裂が入り、その際の衝撃で建物が僅かに揺れた。

後に残るのは血の海に沈んでいる、頭と胴体が泣き別れになった数人の兵士達の亡骸。それもあまり時間をかけずして溶け出し、最期には血も何も残らず消えてしまっていた。

兵士達の最期を見届け、フンつと腹立たし気に鼻息を鳴らした。

「……役立たずの肉人形風情が」

「何事ですか」

突如、女性の声がサバタリーの後ろから聞こえた。濁りの無い、清らかな音色の様にも聞こえるそれは、聞く者の

耳に不快感を与えることなくさらりと耳に流れ込んで来る。

サバタリーは背後から聞こえる声に気付き、睨みつける様にして振り返る。

薄暗がりの中から滲み出る様に現れたのは、白い髪を背中まで伸ばした一人の女性だった。修道服とナース服を掛け合わせたような白衣の衣装を身に付け、顔には青い十字が描かれた布で出来た白い仮面を付けたその女性は、最初からその場にいた様に静かに立って

いた。見る者によつては生気を感じられないその仮面の女性が、とても良く出来た人形に見えるかもしれない。それほど白衣の女性から生気を感じられないのだ。

女性の方から声があったが、正確にはその女性が話しているのではない。女性が両腕で抱えている水晶から声が発せられているのだ。その声の主こそがサバタリーの探していた博士と呼ばれる者だ。声の主である水晶はその中心部から光を放ち、怪しく点滅を繰り返している。

この水晶が本人と言う訳ではない。水晶を介して、別の場所から声の主は話しかけているのだ。

「……トリアーヂエ博士」

「随分と荒れている様ですが、館内では静かになさい。それで、何用ですか？」

トリアーヂエは挨拶する時間も惜しいと言わんばかりに、手短かにサバタリーが自分に会いに来た要件を淡々と訊ねた。

「私のこの縛めを解いてもらいたい」

その言葉に、水晶の光が点滅を止める。まるで聞き捨てならない言葉を聞いたかのように。

サバタリーの全身を覆う黒いフルプレート。それは装着した者の身を守ると同時に、力がある一定以上出せない様に抑え込む為の機能が備わっている。尤も、身に付けているサバタリーも好き好んでその様な面倒な代物を装備している訳では無い。

「それは今回の負傷に関係している事で？」

「そうだ、現状のままでは任務遂行に支障が出ると判断する」

そう言っつてサバタリーは、脳裏に刻まれた忌々しい甲虫の巨人の姿と、その時の苦い記憶を思い出す。

巨体に似合わない加速で一瞬のうちに自身の懐に潜り込まれ、あまつさえ己の腕を切り落す所業にまで至った。そして己自身は、相手に一撃を加える事も出来ないままに手傷を負い、おめおめと逃げ帰って来たのだから屈辱以外の何ものでもない。

腹の立つ事であるが、あの巨人は強い。それがあの僅かな時間ではあるが、虫の巨人と対峙したサバタリーの感想だった。

サバタリーは、自分が手傷を負った事を偶然などと決めつけて、甲虫の巨人を過小評価する気は無かった。故に、水晶の向こうにいる声の主に頼み込んだのだ。あの巨人と戦える程の力を得る為に、サバタリーの態度に尋常ならざるものを感じたトリアージェは、成程、貴方がそう言うのならばそうなのでしょね。とサバタリーの言葉に納得の意を示した。

「帰還した偵察兵から報告は来ています、手酷くやられた様ですね。回収出来た兵達も、偵察に残した者以外は皆処分せざるを得なかった様ですし」

カジミルの村を襲撃した兵士達の全てが溶けて消されたかと思われたが、偵察に専念していた兵たちの中にはいたのだ。彼らは一切戦わず、その場で見聞きした事をひたすら記録し、サバタリーの戦線離脱に呼応して彼らもその場から離れていたのだ。

「兵達はまだ調整が必要だ。昆虫人相手とはいえ、戦を知らない村人相手に後れを取っているようでは、今後の我らの計画遂行にはと

てもではないが役に立たん」

「分かっています、そこは何とかしましょう。……ところで、擬虫石の性能はどうですか？ ワイルドマツクの死体に使ったとの事ですが」

あれか、とサバタリーは一刻間をおいて答える。

兵士達が襲撃を駆ける前に、村の入り口方面に現れた虫の異形は、サバタリー達が差し向けたものだったのだ。

「中々の力だったが、あのデカブツにはあまり効果が無かった」

「確か、青い甲虫の姿をした巨人……でしたか」

「そうだ。しかもよりによって、例の小娘を連れて村を出たと追加報告が来ている……！」

余程件の巨人の事が頭に来ているのか、サバタリーは身に付けているガントレットがメキメキと悲鳴を上げる程に、強く拳を握りしめてその腕を震わせていた。

その様子を水晶越しに眺めていたのであるうトリアージエは、小さく溜息を突いた後サバタリーの頼みを承諾する事にした。

「……拘束具解除の件は承知しました。すぐに解除しておきましょう」

「助かる」

短く礼を告げ、サバタリーは白衣の女性に背を向ける。もうこの場には用が無いとでも言う様に。

「これからどちらへ」

「知れた事を、任務を再開する」

それだけというとサバタリ は先程取って来た道を速足で歩いて行き、その場から去って行った。

「青い、虫の巨人……」

ぼつり、とトリアージェが噛み砕く様にその名を口にする。

そして白衣の女性の体が歪み始め、気が付けばその場から音もなく消えていた。

薄暗い通路はサバタリーが暴れた際に出来た傷跡だけを残し、再び静寂な空間へと戻って行った。

ネオフロンティア西部地方一帯を領域に持つ亜人諸国連合、その一加盟国である昆虫種族の国ワームズ。

連合の領域の中でも南西に位置し、優れた身体能力をもつ種族である事が起因して、連合の中でも優秀な戦士が輩出される国の一つとして数えられている。

虫を象徴に持ち、他の諸国とは一味違った文化を持つが、それもこの国ならではの特徴として他の亜人諸国から来た者達からは認識

されている。

そのワームズの首都ディステイナ。

中央に置かれた王家の住む城を中心にして広がるワームズ最大の都市にしてワームズの中心、いわば心臓部である。

碁盤の目の様に区画整理された町の通路は、上空から見ればその精度を窺い知る事が出来、飛行可能な種族達の間では一種の観光名所として有名であった。

その様な都市の入り口から中へと少し通った場所、人の往来が激しい中央の大通りから離れて辺りを見渡す二人組がいた。ツェイトとセイラムだ。二人はカジミルの村を早朝に発ち、昼に入る前にこの都市に着く事が出来たのだ。

互いに右から左へと首だけ回して眼の前の光景を一瞥。そして人の多さと街並みにはあーっと感嘆の声を上げた。その様は、田舎から上京してきたおのぼりさんみたいである。

セイラムは木造の高い建物が並ぶ街並みを嘆息と共に見回し、ツェイトは別の意味ではあっと驚きの溜息をついていた。

これは凄いな。

NFOでは、ここまで大きな昆虫人の町は見た事が無かった。ゲームでは亜人の集落程度の規模でしか無かったそれが、ここではどうだろう、町に入る前に上空から見た此処の広さは、まるで江戸時代の城下町の様ではないか。中に入る前に上空から見た所、碁盤の様な作りをしている為、どちらかと言えば京都などのそれに近いかもしれないが。

そして何より、この街を行く人々の姿だ。

街を行き交う人の中には、昆虫人以外の亜人種族達も見受けられた。

2 m後半程の身長で、額から一本の角を生やしたオーガの女性。全身が良く分らない鉱物で出来ている鉱石族ミネリアンと呼ばれる種族の男性。背中に鳥類の翼を生やし、鳥の足の様な形状をした手足を持つ鳥人族エイウェス。どれもこれもツイイトがNFOで見た事のある種族だ。

中には、モンスターにしか見えない大きな一つ眼を付けた黒いタコの様な異形が、頭の上にちょこんと乗せた全長15センチほどの妖精の少女に、多数ある触手を器用に使って、本を見せては親しげに会話をしている所まで見られる。

何も知らない人間から見れば、この光景はさぞかし人外魔境なものに見えるだろう。

ファンタジー世界でのグローバル化と言うものはこういうものなのか。ツイイトは、かつてNFOの事を「サラダボウル」とネットの掲示板で揶揄されていた理由が良く分かったような気がした。

そして、それと同時に以前セイラムが言っていた言葉に納得した。セイラムと初めて出会い、そこで村に誘われた時、自身の体で村に入れるのかと懸念していたツイイトに大丈夫だとセイラムが答えたのには、この様に異種族同士が交流できる場が形成されている事を知っていたからなのだろう。しかし。

「ごめん、考えてみれば予想出来ただけど……」

「まあ、今に始まった事でもない」

もう慣れたと、微妙な表情のセイラムをツイイトは宥めた。

現在ツェイト達が行く道では通行者達がツェイト達、正確にはツェイトの姿を足を止めては凝視して来るのだ。その中には、ツェイトの事をまるで仏像を拝むように手を合わせている者までいるのが、ツェイトは少し気になった。

ツェイトの体は良く目立つ。姿形や大きさもそうだが、このような場合では特にその体色だ。

日の光を浴びて輝くその暗く蒼い外骨格は、例え市井に紛れても一発で見つける事が出来てしまいそうな程に注目を浴びてしまうのだ。

夜の森の中といった限定的な場所であったならば、その色合いは一種の迷彩色としてツェイトの身を隠す事が出来る。だが、現在晴天真つ盛りのこの明るい場所ではそれは逆効果。一面雪景色の世界のど真ん中に黒塗りのダンプカーがドンと置いてある位に見つけやすく、目立ちやすかった。これから度々件の兵士達から追われるであろうツェイト達にとって、それは大きなリスクになり得るだろう。

だがしかし、それは考えようによってはプラスの側面もあるといえはある。

ツェイトの姿はNFOの世界では有名だ。NFOでも片手でしか数えられない程の巨体を誇るプレイヤーキャラクター。更に、絶対数が極めて少ないハイゼクタの中でもとりわけインパクトの強い姿をしているツェイトは、一目見ればそう簡単には忘れる事は出来ない。

もしもNFOプレイヤーがこの世界に来ているのならば、ツェイトの姿を知って何らかの行動を起こして来るかもしれない。

中には、何らかの理由で敵対感情を持つプレイヤーも出てくる可能性が十分にあり得るが、選り好みが出来ないのがツェイトの今の状況だ。

一か所に留まり続けられるのならば身を隠し、もつと賢い方法が出来たのかもしれないが、ツェイトはプロムナードを探し回らなければならぬし、兵士達の追跡からも逃れなければならない。先のような選択はツェイト達には無いのだった。

プレイヤー達に自身の存在を知らせる為に目立つのは必要かもしれない。だが、兵士達や問題ごとに巻き込みそうな輩とは関わり合いたくない。相反する願望によって生じるジレンマに、ツェイトは歯痒いものを感じざるを得なかった。

「でも、町に入れた事はありがたいな」

町に行く人々を眺めながらツェイトは呟く。

ツェイト程の体格の者は流石にいなかったが、怪物扱いをして追出す様な素振りはない。強い視線を感じはするが、それでもツェイトは道行く人々の一人として見なされている。それを知り、少なくとも連合の領域内では、此方が悪事を働かない限りは悪い様にはされそうにない事が分かっただけでも、ツェイトにとっては大きな収穫だった。

「取りあえず、ここを離れよう。このままじゃ他の人の迷惑になる」

大通り、ひいては他の道路の横幅も、体の大きな種族が通る事も考えられているのかかなり広い。とはいえ、それでもツェイトの様なガタイの者は流石におらず、出来るだけ隅にいるとはいえ、ツェイトがこのまま立つていたら道行く人達の邪魔になりかねない。いや、間違いなく邪魔になるだろう。

「んー？ 分かったけど、何処へ行くんだ？」

「これだけ大きな街だ、プロムナードを知っている奴が一人や二人

位はいるかもしれない。とりあえず町の中を回ってみよう」

今のツェイトの目的は、プロムナードを探す事。NFOプレイヤーが此方の世界へ来ているのなら、相手によっては彼らと接触をしたいとも考えている。なので、町の中を動き回っている間にこの世界に飛ばされ、この街に滞在しているプレイヤー達の方から接触して来ないものかと少し期待していた。

まだ物珍しそうにキョロキョロと辺りを見回しているセイラムに声をかけ、ツェイトはその場を後にする事にした。

「それにしても流石は国の主要都市だけあって、凄い人ばかりだな」

「ツェイトは森に住んでたみたいだから、やっぱりこう言う所は初めてなのか？」

「確かに、初めてだな」

この姿になってからは、と口に出さずにツェイトは心中でそう付け足す。

NFOの頃は街中には入れななかったので、買い物をする場合は街の外で露店をしている商人のPCかNPCを利用しなければならなかった。なので、この様に平然と街の中に入る事に少なからず違和感を覚えてしまうのは仕方が無いのかもしれない。

「セイラムはどうなんだ。最初に会った時、町に行った事がある様な言い方をしていたけど」

「ああ、狩りで獲れた獲物や薬草を売りに近くの都に行った事はあ
る。でも、この城下町程大きくは無かったな」

「成程、な」

「でも気をつけるよ。こう人の多い所って言うのは変な奴も集まりやすい、あまり裏通りの奥とかに行くとか絡まれたりする。まあ、ツェイトならそんな事無いと思うけど……」

「随分と詳しいけど、それは経験談なのか？ それともウィーヴィルさんから聞かされたのか？」

「……両方だ」

そう返したセイラムの顔に、若干苦虫を噛んだ様な表情が浮かび、地雷を踏んでしまったかとツェイトは少し慌てた。

「……何か、嫌な事を思い出させたか？」

「いや、別に何も無いよ。前にちよっかい出されそうになった事があるけど、逆に殴り返してやったしな」

そう言っつて、セイラムは槍を担いでいない手ぶらな方の手でパンチをする素振りを見せた。ツェイトは虫の異形との戦いの時でしかセイラムの戦い方を見てはいないが、あれならそこいらのゴロツキ程度ならのす事も出来るだろうと、ある程度はセイラムの腕を信じていた。

「そいつは頼もしいな」

「……何かお前が言つと変な感じだなあ」

ツェイトはホツと胸を撫で下ろすとともに、セイラムとの会話の

中である事に気付いた。

何となくではあるが、セイラムが自分に対して余所余所しさというか、遠慮気味だった態度が無くなり、まるで同年代と接する様な親しげな態度で接して来ているのだ。

町の中を移動している際にも他愛の無い事で話しかけてくるので、それが一番眼に見える変化であろうか。

ツェイトはセイラムの態度が良い意味で変わった事を嬉しく思い、振られてきた話をボロが出ない程度に、あれこれと返しては逆に質問を投げかけていった。

というのも、その原因は以前ツェイトがセイラムに告げた、自身の年齢に依る所が大きかったりする。

ツェイトの歳は26歳、対してセイラムは16歳。人間として見れば、女子高生とおじさんに片足を突っ込んだ男位の差があるのだが、昆虫人の世界ではたかが10年程度の差なぞ、彼らの年齢概念からすれば人間で言う所の1歳程度の違い位にしか思っていないのだ。コレが他種族ならセイラムの態度も変わっていたかもしれないが、同じ昆虫種族という事実がその感覚を助長させたのだろう。ツェイトの本来の肉体年齢が如何程のものかという事は抜きにして、

ツェイトの体格状の問題と、先程のセイラムの言葉に従い、小さな通りは極力避けて大通りだけを通って行く内に、ある場所が二人の目にとまった。

「ツェイト、あれって」

「ん？ あれが組合の支店って奴か」

最初に気付いたセイラムがツイイトに声をかけ、その場所を指差す。

そこは、クエスター組合ワームズ地域ディステイナ支店。このネオフロンティア大陸全土で活動しているクエスターと呼ばれる者達が利用する施設だった。

クエスターとは、簡単に言えば何でも屋に近い。言い方を変えれば冒険者と言った所か。

その大本は、ネオフロンティアの世界に散らばる大戦争期前の文明の名残……遺跡の発掘やまだ見ぬ未開の土地を発見、開拓する者達の事を指していた。だが現在では、町の外を徘徊するモンスター退治から町の住民から頼まれた小さなお使いまで、何でも請け負う便利屋へとその在り方を変えていた。とは言え、仕事内容は組合の方が選別しており、あまりに後る暗いものに関してはお断りしているらしい。

所属するのに種族は問わず、そして組合に所属する者達の職業も剣を振るう者、魔導を嗜む者、何かを生産する者と千差万別だ。

本来は洋風の建物らしいのだが、此処の支店はワームズの文化に合わせて和風寄りに作られており、町屋と呼ばれる昔の日本の都市住宅に似ている。

ただ現実のそれとは違い、大人数が入れる位に建物の面積はかなり広く、高さもあって大きな屋敷に見えなくもない。一国の主都にあるだけあって、その大きさは地方の支店とは比べ物にならないだろう。

それなりに年季が入っているのであろう、若干老朽化が見られる壁面がその建物に貫禄とノスタルジックさを醸し出していた。

支店の前では、クエスターと思しき者達一行がクエストの打ち合

わせを行っていたり、仕留めた獲物が入っているであろう袋を担いで支店内に入って行く光景が見られた。

そこへ重い足音を立てながら此方へと向かってくる虫の巨人と、その横をちょこちょこ歩くボーイッシュで手足が外骨格で覆われている昆虫人少女の二人組がやって来るとなると、その異様な組み合わせ……特に少女と一緒にいる青い甲虫の巨人、ツェイトの姿に誰もが視線を釘付けになる。

オーガをも凌駕する巨躯を持ち、堅牢な鎧の如き外骨格で全身を覆われたツェイトは注目の的だ。

他種族のクエスター達は、仲間の昆虫人のクエスターに何だあいっとは訊ねるも、聞かれた本人も分からない、あんな奴初めて見たと驚きながらツェイトを見ていた。他にも、見た事の無い種族に興味の視線を向ける者がいたり、その眼差しは様々だ。まるで値踏みされている様な視線に、少しばかり居心地の悪さを感じながらも、ツェイトとセイラムは組合支店の入り口まで到着した。

入口をジツと見つめ、ツェイトは残念そうに溜息をつく。

「参ったな、やっぱり入れないか」

「ツェイトが大きすぎるんだ。何を食べればそんなに大きくなるんだよ」

「……樹液と発酵食品ってとこだな」

ちよつとやけくそ気味に答えたツェイトは、忌々しそうに入り口の天井付近を睨みつけた。天上の高さはツェイトよりちよつぴり高かった。角が無ければ無理をすれば入れたかもしれないが、ツェイトの額から伸びる巨大な角がそれを許さない。

大通りにあつた建物を見てある程度は予測が付いていたが、ツェイトの身長ではこの都市の建物、ひいては眼の前にあるクエスターの支店に入る事が出来なかった。

オーガの様に、2 m後半の身長の種族までに対してはある程度は対応している建物は多いが、ツェイトの様な4 m級の者が入れる所は、本当に大きな建物や施設じゃないと入れない。元々、NFOのプレイヤーの中でもツェイトの様な巨体を持つPCは本当に少ない。何らかのスキルやアイテムを使用して体の大きさを変えろと言う手もあるが、それとて一時的なものだし、ツェイトはそんなスキルもアイテムも持ち合わせてはいない。

元々住居に入れない様な仕様だったので気にしなかったツェイトだが、大勢の種族が利用するであろう施設ならば、自分でも入れるのではないのかと期待を膨らませていた。しかし、その結果がこれだ。風船のように膨れ上がった期待は一気に萎み、ツェイトも萎んだ様にガツクリと肩を落としてしまった。

そもそもこの場へ立ち寄ったのは、ツェイトはセイラムと一緒にクエスターの登録をしようと考えていたからだ。村にいた頃にウィーヴィルから話を聞くに、登録の際の手数料さえ払い、指定の手続きを行えば後は支払う必要は無いらしい。かく言うウィーヴィルも、昔クエスターだったらしい。クエスターの恩恵で旅が出来たとはウィーヴィルの弁だ。

クエスターに登録すれば、道中倒したモンスターを売って路銀に出来るし、登録証を持っていればそれだけで証明書になる。他国へ移動する際、関所でそれを見せれば済むのでツェイトは是非とも取っておきたかったのだ。

「うーん……なんなら、私が行って話をしてこようか？」

ツェイトの姿を見かねたセイラムが、そう提案する。一応セイラムもクエスターの支店については近場の都へと足を運ぶ際に何度も目になっているし、ウィーヴイルに連れられて中を見に行った事もあるそうだ。なら、それが妥当な所なのだろうかと考えた所で、ふとツェイトの頭にある懸念がよぎった。

セイラムを中に行かせて、もし何か問題が起きたらどうしようかと。

何分セイラムは狙われている身だ。故に彼女を一人にさせてしまう事に対してツェイトは少々過敏になってしまっていた。

最悪の場合は、建物を破壊してでもセイラムを助ければ良いだけの話だが、ハッキリ言って非常識極まりないので、それは本当にどうしようもなくなった時の最後の手段だ。この様な王家の天下の御膝元で問題なぞ起こしたくない。そもそもそんな事が起こるかすら分からないのに、そこまで考えるのも少し早計過ぎる感が否めないが。

過保護な親の心境ってもしかしてこう言うものなのだろうかとか今考えていた事を客観的に振り返って、ツェイトは俺にもその気があるのだろうかと思息をついた。

さてどうしたものかとツェイトとセイラムは頭を悩ませていると、二人へと近づく者がいた。

その者は、ツェイトの姿を見て半信半疑で声をかけて来た。

「おい、お前さん……ツェイトか？」

自分の名を呼ぶ者が、セイラム以外にこの場にいる。ツェイトは

驚いて声の主の方を見た。

その者は、頭を黒い手ぬぐいで眼深に巻いた昆虫人の男だった。御丁重に手ぬぐいには触覚が通る様に目立たない程度に小さな穴が二つ空いてある。

下は足首の締まったズボンに似た物を穿き、さらしを巻いた上半身の上から墨染のはつぴを羽織ったその姿はどこか職人を彷彿させ、足には所々に金属が使われている足袋状の履物を履いている。

特に目を引くのは、彼の背中に背負った巨大な筒状の物体だ。男の背丈は180?前後だが、背中に背負っている筒もそれに迫る程の大きさだ。

金属製の六角柱の物体の表面を、太めの荒縄が隙間無く巻き付けられており、筒の芯の部分は円柱状の穴が空いている。そしてその筒の横から、取っ手の様な物が突き出ており、引き金と思しき部分も見受けられた。

男は手ぬぐいで影の掛かった眼でツェイトを見て、面喰った表情をしている。

対するツェイトもその男を見て硬直する。

何せその顔は、ツェイトがNFOの頃に見知った者だったからだ。

「ヒグルマ!？」

「……やっぱりお前さんだったか」

ヒグルマと呼ばれた男は、ツェイトだと知ると安堵のため息をついた。

ツェイトは、ここに来てようやく自分以外のNFOPプレイヤーと出会う事が出来たのだった。

第6話 後編

「おい、ダン！ ツェイトだ、ツェイトの野郎が来たぞ！」

城下町内にある、少々くたびれた長屋が並ぶ住宅区の一画。道中少々道が狭くなっている所がある為、ツェイトはセイラムを連れて建物に接触しない様に気を付けながらヒグルマの後を付いて行き、今の場所へと辿り着いた。

ヒグルマが軽く木製の壁面を手の甲でノックしながら、中の住人をぶつきらぼうに呼び出す。

するとなにい！ と慌てた声が部屋の奥から聞こえ、声の主が音を立てながら玄関の戸を開けた。

その者は、頭にハサミ状の角を生やし、岩に似た形状の外骨格で全身を覆った人型の虫の異形だった。

背丈は角の長さを省けばヒグルマと同じ位で、外骨格の隙間から覗かせる眼は昆虫人の眼に似ていて黒一色。口元はツェイトとは違い外骨格のマスクが無く、牙がむき出し状態だ。

彼の名はダン。ツェイトやヒグルマと同じNFOPレイヤーで、ツェイトと同じハイゼクターだ。種類はアリジゴク型である。

驚きつつもダンは、ツェイトとの再会を喜んでいた。

「うわ、本当だ！ マジでツェイトだよおい」

「ダンもこっちに来ていたのか」

ツェイトも現れたダンを見て眼を丸くした。

というのも、半モンスターの様なハイゼクターが、一般住宅から違和感なく出て来た事に対してシユールなものを感じたのだ。

「お、おう。にしても、こっちに来てても相変わらずでえ体してるなあアンタは」

「……今回のおかげで、俺の体は都会向きじゃないと言う事が良く分かった」

「ははは、まあアンタならそうだな」

ツェイトのぼやきに、ダンは牙がむき出しの口を開けてガラガラと笑う。

ツェイトはNFOの世界で交流が無いわけではない。むしろ、NFOが始まった時からついこの間までの10年間、長い間NFOをプレイしているので、付き合い度合いを無視すれば結構知り合いは多い。今回出会ったこの二人もNFOの頃に何度か世話になった人物達だ。

「おいご両人。積る話もあるだろうが、此処じゃちとツェイトにや狭いだろう。場所を変えよう」

ツェイトとダンが再会を喜び合っているとヒグルマが二人に声をかけた。

確かにこの場所はツェイトにとっては狭すぎる。それに、ここでは話ずらい事もある為それも含めての事だろう。

「それに、そっちの嬢ちゃんを置いてけぼりにしちゃ可哀そうだ」

クイツとヒグルマがあごで指した方向には、ダンの姿を見てポカ
ンと口を開けて呆けていたセイラムがいた。ツェイトの同類がいた
事に驚いたのだろうか。

「……………あつは、はい!？」

セイラムはヒグルマの言葉でハツと我に返り、慌ててつい姿勢を
ただしてしまった。

授業中に余所見をしていた生徒が先生に声をかけられた時の様な
セイラムの仕草に、ツェイト達NFOPレイヤーの3人は笑い出し、
対するセイラムは自分のした事が恥ずかしくなり、羞恥心で顔を赤
くしながら顔を俯かせ、手に持っていた槍の石突きで地面をガリガ
リとひっかいていた。

一行は場所を離れて、大きな川が流れている橋の近くまで移動し
た。ヒグルマは川沿いに生えている木に背もたれ、ツェイトがその
傍で腰掛けている。

セイラムは二人の話聞かせる訳にはいかないなので、ダンの計ら
いで距離を取ってもらっていた。

こんな時、セイラムが聞き分けの良い娘であった事をツェイトは
感謝した。そんなツェイトはヒグルマと一緒に顔を合わせる事無く、
川の流れをジツと見つめながらこれまでの経緯を説明する。

「そうか、プロムナードの奴を探してるのか」

「どこから手を付けたらいいものか分からなくて、取りあえずクエ
スターの資格だけでも思ったんだが……俺の体が中に入れなかつ

た」

「そりゃそうだ、お前さんの体じゃ此処はちよいと窮屈だろうよ」

ヒグルマは、支店の入り口で肩を落としていたツェイトの姿を思い出したのか、喉を鳴らして笑う。

ツェイトはそれを気にする事無く、ヒグルマの方へ少しだけ顔を向けた。

「ヒグルマは、此処に来てどれ位経つんだ」

「3年だ。ダンの奴と会ったのは2年前ってところか。こっちに来たらアイテムが全部ぶっ飛びしまったからほとんど文無しでな、ダンとクエスターやりながらこの長屋に厄介になっっているって訳よ」

まあ、幸いな事に肌身に付けていた物は無事だったんだがなつとヒグルマは何時の間に取り出したのか、先程から吸っていたキセルの煙をぶかぶかと吐きながら空を見上げた。ツェイトを含め、プロムナードといい、ヒグルマ達といい、プレイヤーによってこの世界に来る時間軸は様々らしい。

あの時支店にヒグルマがいたのは、何か適当な依頼がないか確認しに行こうとしていたらしい。そこでツェイトを見つけたと言う訳だ。一目見て相手がツェイトだと分かったとヒグルマは付け加えると、ツェイトは案の定自分の体が目立ちやすい事を改めて思い知った。

ちなみに、ツェイトはプロムナードの事をヒグルマに訊ねてみたが、彼にも行方は分からないのだそう。3年と20年では大分時間差が出来ている為、しょうがない事だろう。しかも、プロムナードはもうこの国にはいない可能性だってある。

ヒグルマとダンの他にも来ている奴はいるのかツェイトはヒグルマに訊いてみた所、案の定と言うべきか、この世界に来ている者はいるらしい事が分かった。しかし、その人数はかなり限定されたものだった。

「どうもこの世界に来ちまっているのは最古参組だけらしいな。しかも、話を聞くとこつちに来ちまった連中は皆あの10周年記念の時にログインしていたって話だ」

最古参組、それはNFOがサービスを開始した当時からプレイしていた者達の事を指す名称だ。ツェイトとヒグルマ、ダンも最古参組に入る。そして、この場にはいないプロムナードも。

総じて最古参組達のプレイ歴はサービス開始から現在に至るまでの10年、年齢も皆20代半ばを過ぎてている。ちなみにヒグルマはツェイトより若干年上で、ダンは同じ年くらいだ。

というのも、NFOに限った事ではないのだが、VRMMOというジャンルのゲームには年齢制限があり、最低でも15歳にならなければプレイできない様に法律で定められているのだ。これには、リアリティの追求されたゲーム内容も含まれたゲームもある為、子供の教育に良くない影響を与えると言うのが理由とされているが、もう一つある。

それは、専用の装置であるニューロバイザーから発せられる波長だ。

幼い頃から脳に微弱ではあるもののその波長を浴びせ続けていけば、それが原因で若者の発育に影響を及ぼすのではないのかという専門の学者達の発表があった為に、国がプレイできる年齢の制限を設けたのだ。

それ故に、どんなに若くても15からでしか始められないし、其処から最古参組の10年という経歴を加算すれば、25歳が最低限

界なのだ。

仮に既定の年齢に達していない者が年齢を偽証してプレイしようとしても、ニューロバイザーがその際プレイヤーの生体情報を読み取り、其処から年齢を計算する為すぐにばれてしまうのだ。

だからと言って、ニューロバイザーそのものに手を加えれば大丈夫なのではないのかと言われれば、そうはいかなかった。

過去に何度か同じ事を試みようとした者がいたのだが、ニューロバイザーの中には不可解な部品が多く、解析不可能なブラックボックスと化している物まであったのだ。

それに変な対抗意識を燃やし、その手に精通したプロに頼んで調べてもらった者もいたらしい。しかし、終そその仕組みが分からずお手上げ状態となり、結局NFOのプログラム改ざんを出来た者は誰もおらず、ニューロバイザーにはオーパーツが組み込まれているんじゃないのかという冗談交じりの皮肉がネット内で広がり有名となった。

「その情報は、何処で？」

意外にも限定された者だけしか、この現象に見舞われていないのかもしれない事に驚いたツイイトは、ヒグルマが何処からその情報を手に入れたのか訊ねた。

「シチブだ、あいつが地方を転々としながら情報を仕入れているらしくてな。以前出くわしたときに本人がそう言ってやがった」

「あの人も来ているのか……」

ツイイトの口元から乾いた笑い声が漏れた。もし今のツイイトに人間の様な顔があったら、口元を引き攣らせながら苦笑をしていただろう。

シチブとは、ツェイト達と同じNFOPレイヤーの名だ。別にツェイトはシチブという人物が嫌いなわけではない。アクが強いというか、キャラが強烈と言うべきなのか、とにかく個性的な性格をしているのだが、そこさえ気にしなければそれなりに良い友人になり得る。その個性を容認出来れば、なのだが。

「まあ、気持ちは分からんでもない。あいつはたまにこっちで露天商に混じって店開いてるぞ。もっと詳しく聞きたいのなら探してみな」

何か分かるかもしれないぞつと言うヒグルマもツェイトと同じ気持ちだったらしく、仏頂面の口元をちょっと引き皺らせていた。

それに対してツェイトはそうしてみるよ、と返してプレイヤー達の事について話を戻した。

「案外、こっちに来た連中は少ないのかもしれないな」

「かもしれねえな、俺も全部把握してるわけじゃねえから正確な事は言えねえが」

ヒグルマ達の情報が正しいのならば、この世界に来た人間は大分限られてくるのではないのだろうか、とツェイトは思った。

最古参で、更に10周年の日にログインをしていた者。

最古参組は皆社会人だ。大抵の者達は職に就き、各々の生活を形成している筈だ。その中には仕事や生活の為にNFOPへのログインが疎遠になって行く者達も出てくるだろう。実際、それで止めてしまった者達は数多い、実質現役でプレイをしているNFOPプレイヤーは、プレイ開始の頃から数えるとかなり少なくなっているのではないだろうか。そこで先の条件が付加されれば、更に人は絞られていく。

「帰ろうとは、思わなかったのか？」

ふと、ツェイトは今まで気になっていた事を言い淀みながらもヒグルマに問いかけた。元の世界は恋しくは無いのか、と。

言い淀んでしまったのは、彼らが帰りたくても帰れず今の今まで時間が経ってしまったのなら、この質問はとも残酷なものなどでは無いのかと思ったからだ。

問い掛けられたヒグルマは、じつと視線の先にある川の流れを見つめ、一時の間を開けてから静かに答えた。

「……………まあ、帰ろうとは思ったな。元の世界での俺の体が気になるし、俺も人の子だ。親父とお袋が心配では、ある」

だがな、とヒグルマは吸っていたキセルをひとしきり堪能した後、上に向けていた火皿の部分を下に向け、手の甲に管の部分で軽く叩く事で中に詰めていた刻み煙草の吸殻をはたき落とした。

「……………今はちと迷っている」

「迷っている？」

「まあ、別に元の生活が嫌だって訳じゃあねえんだがな。そもそも帰り方すら分かつたらん」

顔を俯かせて、手ぬぐいが覆われていない後頭部をカリカリとかきながら、ヒグルマが何となく言い辛そうにしていた為、ツェイトは敢えて追及しなかった。自分も今はあまり他者に深く問い質され

たくない立ち場なので、調子に乗って墓穴を掘りたくないのもあったからだ。

少しばかり二人の間に沈黙が降りた所で、ヒグルマが思い出したように顔を上げ、ツェイトに近付いて軽く肩を肘で突いた。

「そついや、あの娘は誰だ？」

ヒグルマが、自分達から離れた所で驚きながらツェイトを見ているセイラムに視線を向ける。現在セイラムは何やらダンと話をしている様だ。

ツェイトが聴覚を集中させて耳を傾けて盗み聞きしてみると、自分の事をダンから聞いている事が分かった。ダンには軽く説明をしているが、何処かでボロが出なければ良いが、と少しだけ心配になる。

まさか、これか？　つとヒグルマが小指を立ててツェイトに見せるが、そんな訳ないだろうがと少し困惑した声でツェイトは返した。正直ツェイトはセイラムの事をヒグルマに全て話す事を躊躇った。下手に話せばセイラムの立場が危ぶまれるのではないのだろうかという危惧もあったが、ヒグルマ達を巻き込んだら申し訳が立たないとも思っただのだ。

そんな雰囲気を感じたのか、ヒグルマはツェイトが追求しなかったように、何も訊かなかった。

「訳ありなら深くは訊かねえよ」

「ありがとう。助かる」

「ま、駆け落ち中って事にしといてやる」

「馬鹿言つな。16と26じゃ歳が離れすぎだ」

「此処じゃ許容範囲内だぜ。良かったな、ガキが生まれたら顔出せよ」

「そんな事になったら、あいつの親父に殺されるかもしれん」

それから適当な会話を何度かやり取りをした所で、二人はセイラムとダンのいる所へと向かった。

二人の元へと行くと、セイラムが驚きと困惑、そして少し含み笑いが混ざった微妙な顔でツイイトを見ていた。その後ろでは、ダンが何やら面白そうに口元を歪ませている。

どうかしたのかと首を傾げたツイイトは、事の真相を知っているであろうダンに問い質した。

「おい、セイラムに何を吹き込んだ」

「吹き込んだとは人聞き、いや虫聞きの悪い事を言う。アンタの昔の事をちよつと教えてやつただけだ」

お前さんの事が気になるらしいぜ、と口元に人相の悪い笑みを浮かべながらダンは言う。対して話を聞かされたセイラム表情は、心なしか聞いてはいけない事を聞いてしまった様な、そんな顔をしていた。

「……………例えば？」

「昔隠し芸でアンタがプロムナードと髭付けてダンスを踊りながら、放り投げられたスイカを角で刺した事とか。あと火山地帯で温泉掘るとか抜かして、穴掘ったら山が噴火した事とかも話したいぜ」

「お、お前、そんな事教えたのか」

何を言ったのかと気になって聞いてみれば、実に下らない事だった。まあ、そんな下らない事をしてしまったのは自分なのだが。

当時の事を思い出して何故あんな事をしたのだろうかと、ツェイトは今頃になって恥ずかしくなり、片手で顔を覆った。

「良いじゃねえかよ、アンタはそれ位の茶目っ気がある方が可愛げがあつて受けも良くなるぜ」

只でさえおつかねえ面してるんだからもうちょいフレンドリーに行こうぜと、あまり人の事を言えない姿のダンがおどけた仕草でツェイトを茶化すが、ツェイトは気を悪くした素振りもなく、苦笑交じりに溜息をつくだけに留まった。

「お前ほどひょうきんにはなれないよ、俺は」

「宴会の場でスイカを角に刺したり、トチ狂って山から溶岩と一緒に流されて来た奴に言われたかないね」

「く、ふふ……あははは！」

そう返されてツェイトは言葉に詰まり、そんな姿を見たセイラムがとうとう笑い出した。

セイラムの頭の中では、ツェイトがさぞかし愉快的な事をしている

光景が浮かんでいるのだろう。口を抑え、可笑しそうに笑う姿を見て、ツェイトは咎めるに咎められず、ダンを恨めしそうにその青白く光る眼で睨むだけだった。

「ひいさん」

賑やかに世間話をしていたツェイト達の耳に、誰かの名を呼ぶ声が聞こえた。場所は、ヒグルマ達が住んでいる長屋のある方向からだ。

声をかけた人物は、中世日本に見られる下町長屋に住むおばちゃんと言った感じの身なりをした昆虫人の女性だった。

最近ではおなじみになりつつあるが、この女性も御多分に漏れずツェイトの姿に驚いていた。チラチラとツェイト見ながらもツェイト達の方へ顔を向けているので、4人の内の誰かを呼んでいるのだろう。長屋の住人という事はダンかヒグルマの2人だろうか。そこでヒグルマが女性に向けて声を返した。

「あん？ どうしたい！」

「何時もの綺麗なお侍さまが、ひいさん達の事探してるよー」

「……わかった！ 今からそっちに行くって伝えておいてくれ！」

「あいよー」

伝言を伝えると、用が済んだのか女性は長屋の方へと戻って行った。

「ひいさん？」

「近所じゃそう呼ばれてんだよ。しかしあいつか、何の用だ？」

どうやらひいさんとはヒグルマの愛称らしい。この世界に来てから3年間の間に愛称で呼ばれる位にはこの場所に馴染んでいる様だ。ひいさんこと、ヒグルマがキセルをペン回しの要領でくるくると指で回しながら首を傾げて長屋へと戻ろうとした時、先程女性がいた方角から別の人物が現れた。

その者は、長い黒髪をポニーテールにして纏め、黒袴と深緑の着物に身に付けた侍姿の若い昆虫人の麗人だった。

中性的な顔立ちをしてはいるものの、服越しから見える女性特有の体型がその侍が女性だと言う事を強調している。切れ長の黒一色の目と、キュツと眉を寄せた端正な顔立ちは、一見すると生真面目な印象を見る者に与える。

腰には立派な黒塗りの脇差と刀を一本ずつ差しており、身なりの小奇麗さからしてそれなりに身分の高い位にいるのか、はたまたその者に仕えているのではないのだろうかという事が考えられた。

先程の女性の言葉の内容からすると、彼女がヒグルマ達を探していたのだろう。此方から行くと伝えた筈なのに来ていと言う事は、何か切羽詰まった用でもあるのだろうか。

「知り合いか？」

「まあ、そうなるわな」

ツェイトがボソリとヒグルマに訊くと、少し煮え切らない様子で答えた。

そうこうしているうちに、件の女侍は焦った表情でこちらへと駆けよって来る。

「花火屋、聞きたい事ガツ!？」

花火屋、というのはヒグルマの事を言っているのだろう。というのも、ヒグルマは花火師と言う昆虫人独自の職に就いているのだ。そんなヒグルマに声をかけようとした女侍は、ツェイトの巨体を見上げてビタツと硬直した。フリーズする事数秒後、女侍はおほんつと咳払いをして気を取り直し、さっとヒグルマの方へと向きを変える。

「若様が此方へ来られなかったか？」

「うん？ いや、来ちゃいねえが」

「ぬう、此処にもおられないとは……」

女侍の顔に焦りの色が濃くなり、顎に手を当てて気難しげに唸った。

何やら只ならぬ事態と思ったヒグルマは、何があった、と神妙な顔で女侍に訊いた。

すると女侍はチラツと困った顔でツェイトとセイラムを見る。それに何かを察したヒグルマは、ツェイト達二人に席を外す様伝えた。

「何だろう、何かあったのかな」

「少なくとも、他の人に聞かれたら都合の悪い事が起きたんだろうな」

「どうしてそう思うんだ？」

「あの場で、俺達をのけものにする理由が他に思い付かない」

「あ、そうか」

声の聞こえない場所にまで移動したツェイトとセイラムは、先程の女侍の話が少し気になっていた。

恐らくは最初に口にしていた若様という人物に関わる事なのだろう。その者の居場所を探していると言う事は、若様とやらが誰にも告げずに出かけたのか、それとも……。

そこでツェイトは考える事を止めた。これはヒグルマ達の問題だ、同郷の仲とはいえ、其処に無理に顔を突っ込んでそのとばっちりで受けたら不味い。特に今の自分達の様な状況では。

セイラムもその事は分かっているのだろうが、如何せん煮え切らない顔をしてヒグルマ達の方角を見ていた。ツェイトは念の為にセイラムに釘を刺す事にする。

「頼むから、ヒグルマ達に手を貸そうとか言わないでくれよ」

「……分かってるよ。でも、ツェイトは良いのか？ 知り合いなんだろう」

「知り合い同士でも、踏み込んだじゃいけない事だつてある。何より、内容次第ではヒグルマが俺達が手を出す事を許さないかもしれない」

「え、どうして？」

「そう言う奴なんだよ、あいつは」

そうなのか？ とセイラムは少しだけ煮え切らない顔でヒグルマ達が今いる方向へと視線を向ける。

すると思いのほか早く話はすんだのか、ヒグルマ達がこっちにやっつて来た。その中には先程の女侍も一緒だ。何やら自分の事をジッと見ているのがツイイトは少しだけ気にかかる。

「待たせたな」

「いや。何かあったのか？」

「ああ、ちと仕事だ。今すぐにも出かける心算だが、お前達はどうする？」

「俺達は、クエスターの登録をしに行こうと思う。結構利用する機会があるだろうからな」

「あー………そういやお前さん達それであそこにいたんだっけな」

和やかな雰囲気では二人が話していると、女侍が焦って急かしてきた。どうやらあまりのんびりしてられない状況なのだろう。

「花火屋、あまり時間はかけられないぞ」

「おお、そうだな。じゃ、此処にいる間に何かあったら俺達の住んでる長屋に来な。ある程度なら話は聞いてやる」

そう言うと、じゃあなつとヒグルマは片手を上げ、女侍は軽い会釈をして行く。その際、ダンがセイラムに向けて手を振っていたのでセイラムがそれに槍を軽く振って返していた。

「随分仲が良くなったみたいだな」

「え？ ああ、色々ツェイトの事を教えてくれてさ。く、ふくく……」

セイラムはツェイトの顔を見て何かを思い出したのか、無理やり口を閉じて笑うのを堪えていた。

どうやらダンは他にもツェイトの過去の逸話を教えたらしい。

ツェイトは相方のプロムナードと共に名前や姿は有名な所為か、彼ら二人が起こした事は割と知られやすい。その内容がどうであれ。

まあ、良いか。

セイラムが笑っているのならば良い。仏頂面や悲しい顔をされるよりは大分マシだ、とツェイトは一応ダンには感謝をする事にした。己の過去の苦い思い出をべらべらと話されたのは少しばかり頂けなかったが。

3人を見送ったツェイト達は、早速クエスター組合の支店のあった所まで戻ろうとした所でふと思った。

組合の支店って、どっちに行けばいいんだっけ？

二人のいる場所は城下町の中でも外れの方にある住宅地帯、通りは迷路の様に入り組んでいており、此処に来るまでそれなりに時間が掛かったため、戻るのにも大分時間を要する事は確かだろう。

セイラムは憶えていないのかとツェイトが問えば、セイラムはツェイトが憶えているのかと思って憶えなかった……と申し訳なさそうにしていた。ツェイト本人もヒグルマ達と出会った事の嬉しさと今後の事について思考を回していた為、あまりその点については考えていなかった。

つまりは二人ともほとんど先程の道を憶えていないのだ。

「……全く憶えていないわけじゃないから、それを頼りに戻ってみようか。近くに川もあるんだ、それを辿れば何処か大きな通りに着くだろう」

「本当に大丈夫なのか？」

「駄目だったら地元の人に訊いてみれば良いさ」

やっぱりそうなるかあとセイラムが溜息で返した。

「ツェイトが飛んでくれれば楽なんだけどなあ」

「冗談言うな、俺が飛ぶ所見ただろ。周りの家が吹き飛ぶぞ」

「分かってる。「冗談だよ」

でも面倒だなあ、というセイラムのぼやきをBGMに、ツェイト達は大通りを目指して住宅区の中を歩きだした。

「あれ？ 町の外れに出たぞ！」

「……おかしいな。さっきのおばちゃん達の言葉通りなら、大通りへ行ける道に繋がる筈だったんだが」

現在ツェイト達は大いに迷っていた。思いの外道が入り組んでおり、中にはツェイトが通れない様な場所や、歩けば底が抜けるような場所まである為そこを通らずに歩いているのだが、如何せん上手く進む事が出来ないでいた。

ツェイトの身長の高さを活かして上から道を覗けるのではないのかとも考えられたのだが、住宅の中には数階建ての木造建物も多くあり、思う様にいかなかったのだ。

二人の視界の先に広がるのは、手入れがされていないぼうぼうに生えた雑草地帯と、首都を囲う城壁だった。

先程井戸で洗濯をしていた主婦の方々に道を訊ねて教えてもらったのだが、どうもツェイトが間違えたらしく見当違いの方向に着いてしまったらしい。

「……城壁を伝って行けば、入り口に着く筈だ。其処から大通りに

行けば今度は大丈夫、行けるぞ」

「……大丈夫かなあ」

セイラムが疑わしげにジト目で睨むが、睨まれたツェイトには自信があつた。まあ、壁沿いに進めば入り口か出口に着くと言う、迷路の法則で思い付いた事なのだが。

二人が城壁に近づこうとした時、ツェイトが何かを見つけ、セイラムを引つ掴んで建物の影に隠れた。その際、突然だった為かセイラムの口から蛙が潰れた様な声がした。

いきなり何をするんだとセイラムが声を荒げようとしたが、ツェイトはセイラムの口を手でそつと塞ぎ、くいつと顎で建物の向こうを示した。

セイラムがそつと建物の隅から顔を出すと、その向こうでは数人の昆虫人の男達が辺りを警戒しながら何か作業をしているのが見えた。いずれも見てくれはお世辞にも綺麗とは言えず、顔つきも脛に傷を持つゴロツキという言葉が似合う者ばかりだ。

この様な町はずれでこつそりと、しかも人目を憚る様になると言う事は、後ろ暗い事をしているのだろう。

ツェイトもセイラムの上からそつと顔を出し、彼らが何をしているのか観察していると、ある物を見つけて眼を鋭くさせた。

彼らゴロツキは、一人の昆虫人の子供を運んでいたのだ。手足を縄でしばり、口には声が出せない様に布が巻かれているが、意識が無いのか、その子供は動く気配が無い。

誘拐か、と顔を顰めてツェイトはどうするかセイラムに視線を向

けると、そこにはセイラムの姿は無かった。もう既に、ゴロツキ達へと疾風の様な勢いで走りだしている所だった。

確かに、あんなの見せられたら放つてはおけないか。

普段のセイラムの人柄からして、あの男達のやる事を見逃す事が出来なかったのだろうが、もしかしたらあの子供に兵士達に狙われている自分の姿を重ねたのかもしれない。

セイラムの心境が何となくわかったツェイトは、何も語らずにセイラムの後を追うべくその巨軀に似合わぬ軽やかな足取りで駆け出した。

ツェイトよりも一足先にゴロツキ達へと突っ込んで行ったセイラムは、己の心に燃え上がる感情を隠す事無く剥き出しのままに槍を構えて走る。

セイラムの心は、憎悪に彩られていた。その暗い感情をぶつける相手は、子供を連れ去ろうとしている無法者達。

(お前達も、お前達もそうやって……っ)

自分も狙われている立ち場にあり、そのせいで自分を含め多くの人達を辛い目に遭わされたため、今のセイラムはそれらの事柄に対して非常に神経質になっていたのだ。

そして今日の前で、自分よりも幼い子供が攫われている。それがセイラムのトラウマに触れ、怒りの引き金になったのだ。

ゴロツキ達が気が付いた頃には、既にセイラムがゴロツキ達目がけ

て飛びかかっている所だった。槍を両手に構え、姿勢を低くして飛びかかるその姿は、獲物へと襲いかかる獣の様である。

セイラムは、呆気にとられているゴロツキ一人の側頭部目がけて槍の柄を叩き込んだ。

直撃を受けたゴロツキの男は、声を上げる事無く真横に転がり、叩き込まれた方の耳から血を流して気を失った。

「な、何だこいつぁ!？」

「構うものか、やっちまえ!」

襲撃者と判断したゴロツキ達は、子供を連れ去るのをいったん止めて、懐に潜ませていた小太刀を抜き、セイラムを囲むようにして構えた。

それに対するセイラムは、臆することなく槍を構え、憤怒の表情でゴロツキ達を睨みつけた。

そして、其処から更に乱入者が一人現れる。セイラムの後を追って来たツェイトだ。

「げえ! 何だこいつばああ!？」

飛び込んできたツェイトに驚くゴロツキに有無を言わせず軽く掌底を振り上げる様にして打ち込み、蹴り飛ばされたボールの様にそのゴロツキを遠くまで叩き飛ばして、ツェイトはセイラムの横に立った。

後から聞こえる重い物体が地面に落ちる音と共に、ゴロツキ達は一様に突然現れたツェイトの姿とその巨体に眼を剥く。

ツェイトが構え、ゴロツキ達を睨みつける様に一瞥すると、ツェイトの姿と先程吹き飛ばされた仲間の姿を思い出したのか、ゴロツキ達は顔を青くして気を失っている仲間を抱え、その場からさっさと逃げだしてしまった。幸いにも、子供は置き去りにしたらしい。

ゴロツキ達がいなくなった事を確認すると、ツェイトは構えを解いて溜息をつき、セイラムを咎めた。

咎められたセイラムは何時もの表情に戻り、叱られた子供の様に顔を俯かせる。

「おい、無茶をしないでくれ」

「ごめん。でも私、あいつらが許せなくて……」

そこまで言われてツェイトは怒気を鎮めた。かく言う自分も、あの子供を助けようかと考えていたのだから、セイラムをとにかく言える身では無いのだ。

「この子、どうしようか」

セイラムに言われてツェイトは今も気を失っている子供を見る。先程セイラムが縄と口に巻いていた布を取っただけのため、苦しくは無い筈だ。

歳は10歳前後と言った所か。まだ幼い顔つきと長髪故に少女に見えなくはないが、服装からして男のなのだろう。

服装は子供ながらに小綺麗な袴と着物を身に付けており、髪は背中まで綺麗に伸ばしている。いっちょ前に腰には子供の背丈に合わせられた長さの刀が差してある。帯刀させたまま拘束していたのは、ゴロツキがこの子供を甘く見ていたに違いない。

その身なりから察するに、良い所でのお坊ちゃんなのではないだろうか。何となく雰囲氣的にも女侍に似ているので、あながち間違っ
てはいないのではないかもしれないとツェイトは予想した。

「こんな状態だ、起きるまでは面倒を見ておいた方が良いだろう。

一端、安全な場所に行こう」

「安全な場所って？」

「ヒグルマの住んでいる長屋の方へ行ってみようか。あいつらが戻
って来ているか分からないけど」

それに、ツェイトは少々気になっている事があった。それは女侍
が出会いがしらに口にした若様という言葉。それが、先程誘拐され
かけていたこの少年侍の存在と合致している様に思えたのだ。

もしかして、何やらとんでもない事に巻き込まれかけているんじ
やなかるうかという考えが浮かんだが、しかしこの子供をこのまま
にしておく訳にもいかなかった。

「それは良いけど場所、憶えてるのか？」

あの入り組んだ道の中から長屋へ行けるのか？ とセイラムは暗
に問う。

そこでツェイトは自身にとっては通りづらいあの道を思い出し、
頭を抱えた。

第6話 後編（後書き）

という訳で友をたずねて3千里。大江戸（？）編でございます。

悪役サイドの描写は、何処まで書けばいいのか未だ判断が難しいので結構ばかりして表現しました。

出来れば無理やり説明口調で捻じ込むのではなく、話の流れに違和感なくネタをばらして行きたいです。

追記

感想受付の制限をすべて外してみました。

ご感想、ご指摘などお待ちしております。

第7話（前書き）

お待たせいたしました。

今回は文字数が少なめです。理由は後書きにて説明いたします。
では、どうぞ。

第7話

ゴロツキ達から子供を助けたツェイト達は、ヒグルマ達の長屋を目指して住宅区内を練り歩いていた。

時間は昼を過ぎた頃、区内では幼い子供達が何をして遊ぶつかと話し合い、主婦達も再び自分達の仕事に取り掛かる姿があった。

助けた子供を腕に抱きかかえたツェイトは、辺りをキョロキョロと見回しながら歩いているセイラムの後ろをのっしのっしと地面を踏み鳴らして付いて行く。ツェイトの前を歩くセイラムがちよこちよこと動いたたびに、頭部の触覚もそれにつられてユラユラと揺れていた。

ツェイトが道をほとんど憶えていない為、ならば今度は私が、とセイラムが山で鍛えた勘を頼りに先導を買って出てきたのだ。しかし数十分後、最初は胸を張って自信ありげに「こつちだ」「あつちだ」と指示していたのだが、目的地にたどり着く気配が無く、徐々にその氣勢が下がって行き、終いには「こつちだったよ……な？」という何とも頼りない言葉をツェイトに反して来る始末。詰まる所、セイラムも迷ってしまったのだ。

地元民達にとっては大した事が無いのだろうこの道は、初めて来た者にとっては迷路以外の何ものでもない。が、この場合はツェイトの体格が災いしたとしか言えない。

振り返り、先程通って来た道を見直した後、セイラムは黄昏る様に空を見上げて、とうとう白旗を上げた。

「ごめん。道、間違えたかもしれない」

「かもじゃなくて、間違えたんじゃないのか？」

「……うん」

セイラムは、ガツクリと力なくうなだれた。山で鍛えた勘とやらも、都会の中では意味を成さなかったようだ。

哀愁漂わせるセイラムの背中を見たツェイトは、ちょっとかわいそうになり、一応フォローをする事にした。

「あー……まあ、元々お互い憶えてなかったんだ、しょうがない。気にせず行こう」

「うう あー……さつき、自分で言った事が恥ずかしい……」

先程、セイラムは頭を抱えていたツェイトに向かって私に任せろ！ と胸を叩いて豪語したのだ。結果は、御覧の通りである。

「そこまで恥ずかしい事かなあ」

「他人事だと思って簡単に……あ」

ふとセイラムは、ツェイトの方へ振り返った。

「“あんな事”をしたから、ツェイトは恥ずかしいものなんて無いのか？」

ヒグルマ達と別れる前に、ダンがセイラムに話していたツェイトのあられもない逸話の事だろう。余程話の内容が受けたのか、セイラムは少しだけ笑みで口元を引き攣らせていた。

「……そこでその話を蒸し返すんじゃない」

ツェイトは過去の恥部を掘り返されて恥ずかしさが蘇り、外骨格の内側の顔面に、再び熱が籠って来るのが分かった。手で覆いたくなるも、それが出来ないのは両の腕で子供を抱き上げているからか。

「ん、んう……」

二人のやり取りが耳に入ったのか、ツェイトの腕の中で眠っていた少年の口からむずがる様な声が漏れた。

セイラムにも子供の声が聞こえたのだろう。ツェイトに近付き、つま先を伸ばして少年のいるツェイトの腕の高さまで視線を上げようとすると、高さが足りなかった。

それを見かねたツェイトがぐつと屈むと、セイラムがツェイトの腕に手をかけて子供の顔を覗き込んだ。

「気が付いたのか？」

「みたいだな……あつ」

子供が目を覚ました。目を擦り、辺りを手で探り、妙な硬さに気が付いてあれっ？ と首を傾げた後、上を見上げ

ると、ツェイトと視線が合った。

「う、うわああー!?!」

腕の中にいた子供が、ツェイトの顔を見た途端悲鳴を上げて飛びあがった。何だかこの反応にデジャヴを感じつつも、パニックを起こして腕の中から逃げようとする少年をツェイトは落ちないように優しくつかみ上げる。

「うわぁー！ い、嫌だ、離せ！」

「おい、そんなに暴れたら落ちるぞ」

子供の悲鳴に気付いた近隣に住まう住人達が、戸から顔を出して何だ何だと此方を覗きこんで来た。

傍から見れば、ツェイトが嫌がる子供を掴み上げて、何か悪さをしようとしている様にも見える。

そう見えたのだろう一人の中年の女性が、肩を怒らせてツェイトの前へずかずかと歩いて来た。恰幅の良い、いわゆる肝っ玉母ちゃんな様な外見をした女性が、ツェイトを怒鳴りつけてくる。

「ちよつとあんた！ 小さな子供をひつ捕まえて何してんだい！」

「えっ？」

その言葉にセイラムは含まれておらず、あくまでツェイト個人に對しての非難だった。傍にいたセイラムも、何の事だと困惑して女性を見ていた。

「そんな有難い見てくれしてくせに、やってる事が真昼間から子供を虐める事だなんて、恥ずかしくないのかい!？」

「ま、待つてください。私達はこの子を……」

有難い見てくれ？ 何の事だと思いつつも、ツェイトは目の前の中年女性の誤解を如何にして解こうかと頭を働かせる事に手一杯だったため、先の言葉はすぐに忘れてしまっていた。

町や村に入ってからはどうにも貧乏くじを引いている気がする。ツェイトは、森の中で自由気ままに過ごしていたNFOの頃が懐かしくなった。

「すみません……助けてもらったのに、悪人と思ってしまっ……」

場所は先程の所から離れた住宅区内。そこで、子供が心底申し訳なさそうに頭を下げている。その相手はツェイトだ。

あれからツェイトは中年女性に在らぬ疑惑をかけられて説教を受けていたが、思わぬ所から救いの手が差し伸べられた。それがこの子供からだった。

あの後、セイラムも加わってツェイトの無罪を主張をするも、それでもツェイト達の事を認めず、果てにはセイラムまで対象にしようとしていた。そんなやり取りを見ていて様子がおかしいと思った子供が、ツェイトの腕の中から彼を弁護して来たのだ。

セイラムに加え、子供までツェイトの無罪を主張するので、強気で責めていた女性も自分の勘違いだった事に気づき、ようやくツェイトに謝る事となった。

聞く所によると、その女性は正義感が強いらしいのだが、どうも勘違いをする事が多い為、空回りしてしまう事が多いのだそうだ。それでも、彼女を慕う者は多く、彼女を悪く思わないでくれ、と去り際にツェイトに言ってくる者が何人もいる為、ツェイトも何も言わないでおく事にしたのだ。

「まあ、いいさ。ところで、どこか痛い所とかはないか？」

ゴロツキ達に縛られて運ばれていたのだ、怖い目に会ったのかもしれない。幼い歳でそんな事をされれば警戒もするだろう。先程の子供の境遇を思い返してみれば、パニックを起こしても仕方が無いむしろ、この歳でこんな態度が出来るのだから大したものだ、とツェイトは子供を咎める事はしなかった。自分の顔に問題があったのだろう。

「えっと、大丈夫です。少し頭が痛いくらいですが、大した事はありません」

「そうか、無事ならそれで良い」

「気を付けるよな。お前、攫われそうになってたんだぞ」

セイラムが腰に手を当てて子供を軽く叱り付けると、子供もそれは承知しているらしく、しゅんつと顔を俯かせた。

小さな子供で、綺麗な立派な着物を身に付けているのだ。一部

の連中からすれば、カモがネギをしょっている様なものである。身ぐるみを剥いで、身に付けていた物を売り飛ばせば金になるし、子供も奴隷にするなり、売り飛ばすなり、身分が高いのならばそれを利用して身代金を要求する事だつて考えようによっては選択できる。残酷な事であるが、力の無い子供など、場所によっては良い金づるとして扱われかねない。

このネオフロンティアでも、人身売買を行う所はある。中には、口にするのもおぞましい所業を行う者達もいるらしい。

ツェイトはウィーヴィルからその事に関してあまり聞かされてはいなかったが、元の世界で人身売買の恐ろしさと言うものを少なからず知っていた為、子供の無事に一応は安堵した。

「すみません。本当はご……一緒に付いて来てくれる人がいたのですけど、何時も通っている場所だから一人でも大丈夫だと思って……」

「そう言う油断が、さつきみたいな事になるんだぞ」

「うう、返す言葉もございません……」

「そうだぞ、次からはその人と一緒に……あ」

セイラムの言葉に同意したツェイトは、ある事を思い出して子供に訊ねた。

「なあ、君と一緒に付いて来てくれる人って、もしかして深緑の着物を着た女の侍かな？」

その問いに、子供はキョトンとした顔をする。

「え、そうですね、知ってるのですか？」

「少し前に、君の事を探している様な事を言いながら、慌てて出かけて行ったぞ」

「ええー!？」

子供が驚いて数歩下がる。まるで、赤点のテスト用紙が親に見つかった様に見えたのは、ツェイトの気のせいだろうか。

そして納得する。成程、この子が彼女の言う若様か、と。

「ああ、叱られる……きつと凄く怒っているんだろうなあ……」

「……事情は知らないけど、大人しく怒られておいた方が良く思う。それだけ、君の事が心配だったんだろうから」

体を縮め、頭を抱えている子供には申し訳ないが、ツェイトは現在セイラムの面倒を見ている身だ。故に保護者としての感覚を持つツェイトとしては、心配している方の事も少しは分かって欲しいと思っていた。だからツェイトは子供のした事に賛同はしなかった。

「……そうします。これは、私の落ち度ですし、最悪、家族に迷惑をかけてしまう所でした」

中々に聞き分けが良い、それに賢い。これが幼い子供の話す事なのだろうか、とツェイトとセイラムはこの子供の返事にしばし驚いた。

「そうした方が良い……それにしても、随分と賢いな。君の歳は幾

つなんだ？」

「えっと、今年で10になります」

「10歳……俺がその頃は、こんなに利口じゃなかったなあ……」

これも英才教育の賜物なのだろうか、と感嘆と共に漏らしたツェイトの言葉に、セイラムが食いついた。

前々から何となく気が付いていたが、どうやらセイラムはツェイトの事が気になって仕方が無い所がある。それが如実となったのは、先のダンとのやり取りか。

「へえ、ツェイトにもやっぱり子供の頃ってあるんだ」

「俺が生まれた時からこの姿のままな訳ないだろ」

産む親が大変だろうに、とツェイトがおどけて返すと、セイラムはクスリと笑みをこぼした。

「まあそうだけど。じゃあ、子供の頃はどんな事をしていたんだ？」

「どんなって、そりゃあ……」

思い出そうとして、ツェイトはしばしポカンと呆ける。10年前の自分は、何をしていたのだろうか。思い出せそうで、ちっとも思い出せない。

まあ、16年も前の事だ。仕事に追われているうちに、昔の事を忘れるのなんて良くある事だ。若年性の健忘症では無い筈だ。きつ

と。

様子がおかしいツェイトに、セイラムが心配そうに訊ねて来た。

「おい、ツェイト？」

「……いやな、昔の事だったんであんまり憶えてないんだ」

「昔って……ツェイトは今26歳だろ？ 今から年寄りみたいな事言っでどうするんだよ」

「え！ 26!？」

ここでツェイトの歳に食いつく者がまた一人。子供は素っ頓狂な声を上げた。

「もっと年上の方だと思ってました。てっきり、二百歳くらいなのかと……」

「に、にひゃく」

「私の時よりも高いなあ……」

子供に悪気は無いのだろう。しかし無垢な子供の、悪意なき言葉の中に潜んだ残酷な言葉が、ツェイトの心を抉った。

凍りついた様に動く気配の無いツェイトを、身長差の問題上肩に手が届かないセイラムが、慰める様にポンポンと腰を軽く叩いていた。

この状況を生み出した当の子供は、何か不味い事言ったのかなと困惑気味に二人のやり取りを見ていた。

歳の事で傷付いて、歳下に慰められる事の虚しさよ。

嗚呼、悲しきかな26歳。それで良いのかカブトムシ。体の表面は硬くても、中身はもしかしたら意外と柔らかいのかもれないツエイトだった。

「すみません、さつきから失礼なことばかりしてしまつて……。私
の名前はシノンと申します。びんぼーはたもとのさんなんぼーです」

程なくして気を取り戻したツエイトとセイラムに、子供は先程の
発言の謝罪と共に自己紹介を行い、其処でツエイト達も名乗る事と
なつた。

そこでシノンの口から出て来た言葉に、ツエイトは思わずこけそ
うになる。いきなりツエイトの巨体でこけそうになるのだから、周
囲の地面に微弱な揺れが生じてしまい、セイラムとシノンが吃驚し
ていた。

何処かの名家の子かとは思つていたが、先程の名乗りからすると、
もしかしたら凄い家の出なのかもしれない。

この国の政治機構が昔の日本と同じなのは定かではないにせよ、
あの肩書きはあからさま過ぎる。恐らくは名前も偽名だろう。

「びん……なんだつて？」

「びんぼーはたもとのさんなんぼー。私の様な者はそう言うのだそ

うです」

小さな体で、胸を張るその姿に微笑ましさを誘われる。伝聞口調と言ふ事は、誰かにそう言われたのだろう。誰がこのシノンに吹き込んだのかは、何となくツェイトは見当が付いていたが、一応訊ねる事にした。

「それ、誰が言ってたんだ？」

「少し変わってますけど、とても頼りになる私の知り合いです。二人いるのですが、一人は貴方と同じで、私達よりも虫に近い姿をしていますね」

どうやらその知人とやらは、シノンから信頼されている様である。それでいて自分と同じ虫の姿をしていると言ふのならば、もはや確定だろう。あの二人だ。

「もしかして、そいつの名前はヒグルマか、ダンって名前じゃないのか？」

二人の名前を出すと、シノンは予想通り目を丸くして驚いた。

「二人を知っているのですか？」

「まあ、ちょっとした知り合いだよ」

「成程、お知り合いでしたか……ん？……ああ！」

何か合点がいったのか、シノンは両の手をポンと合わせてツェイト見た。その際のシノンの眼には、キラキラと何か期待が込められ

ている様な気がした。

「もしかして、貴方がツェイトさんですか!？」

その問いに、ツェイト達が驚く。とはいえ、自分の事を伝えた相手はヒグルマ達なのだろうと言う事は、先程のやり取りでツェイトには予想が付いていた。割とネタにされやすい体なので、何かの話題で自分の事を出したのかも知れない。

「そうだけど、どうして俺の事を？」

「前に、ヒグルマさん達が貴方の事を話していたんですよ。カブトムシの姿をしているとの事でしたので、凄く印象に残っていました」

初めて見た時は、吃驚して分かりませんでしたけど。とシノンは、先程の騒動を思い出して一瞬だけ顔を曇らせた。

カブトムシは、元の世界でも子供たちの間では人気だったが、この世界でも虫を愛でる文化はあるのだろうか。この世界の様に、昆虫種族が存在している世界では余計気になるものだ。

嬉しそうに話しているシノンに、ツェイトは適当な理由を付けてさりげなく訊ねてみる。

「俺は辺境の森に住んでいたから良く分からないんだが、カブトムシって人気なのか？」

「そ、それはそうですね！ カブトムシはクワガタと並んで、この国では力の象徴になっているんですよ！」

「……セイルムは、この事を知っていたのか？」

「うーん、憶えがある様な、無い様な……」

腕を組んで唸るセイラムだが、恐らくは知ってたが忘れていたのかも知れない。

それで町の人たちは俺の事を見ていたのか？ とツェイトはこの町に来た時に感じた視線を思い返した。自身の体の大きさも注目の理由に含まれているだろうから、一概には判断できないが、行く途中拝むように見ていた者もいた為、シノンが言っていた様に象徴として見ている者もやはりいるのだろう。

が、今はこの事はさほど重要ではない。今問題なのは、どうやってヒグルマ達の長屋へ行くかだ。

話が少し脱線してしまっただが、自分達の状況を思い出してどうすればいいのかと考えたツェイト。そこでシノンを見て閃いた。

「なあ、シノンはここ等辺をよく通るって言ってたよな」

「ええ。昔からよく此処へは来ていましたので、この住宅区の地理はそれなりに知っているつもりですけど」

しめた、地獄に仏とはこのことか。ツェイトはこの子供に仏の姿を見た。

「だったら頼みがあるんだが、ヒグルマさん達の住んでる長屋への道を教えてくれないか？」

そこでツェイトは自分達の状況説明も忘れずに付け加えておく。するとシノンは快く引き受けてくれた。

「でしたら一緒に行きましょう。私もヒグルマさん達の所へ行く予

定でしたので」

「そうか、いやあ助かった」

「本当だよまったく……私もうお腹が空いて仕方が無かったんだ」

話が纏まって安堵したツェイトの横で、セイラムがだらしなく口を開けながら腹をさすっていた。

そう言えば、この町に来てから何も食べていない。ツェイトは自身があまり空腹を感じていなかったのですっかり忘れていた。この町へ来る最中に、セイラムは袈裟掛けにしていた風呂敷の中から木の実を取り出して齧っていたが、それとて極僅かな量である。

空を見上げれば、太陽は既にてっぺんまで昇り終え、地平目がけて沈みはじめていた。時間的にはおやつのは3時とまでは行かなくとも、2時くらいにはなっていそうだ。

今日はまだ朝に軽く軽食を口にしたただけだったので、あまり腹の好いていないツェイトはともかくとして、セイラムは中々堪えているのではないだろうか。

「なら、ヒグルマの所に着いたら何か食わして貰おうか。まあ、あいつら貧乏みたいだから、茶漬けが出てくればめっけものかもしれないけど」

「でしたら、私が御馳走しましょう。お二人へのお礼をさせていただきますし」

そこでシノンが提案する。そりゃあそれだけ立派な服を着ているのならお小遣いもそれなりの額を持たされているのかもしれないが、ツェイトは断った。

「気持ち嬉しいけれど、子供におごってもらうのはちょっと、なあ」

子供の財布にたかる大人なんて、傍から見ると情けなくてしょうがない。

一端の社会人として、というよりは、ツェイトが今まで培ってきた倫理観がシノンの提案を拒んだ。簡単に言ってしまうえば、大人のプライド云々と言う奴なのだが。

「……と、俺は思うんだが、セイラムはどうする？」

ツェイトがそう思っているにしても、今腹を空かしているのはセイラムだ。彼女の意思がそこに存在していないツェイトの言葉など、この場では意味を成さない。

「私もツェイトに賛成かな。別に我慢できない程でもないし、お金だっけ持っているんだ」

苦笑しながら槍を担ぎ直すセイラム。どうやらツェイトと同意見の様だ。セイラムは一応お金を持っているが、それも大金と言う程のものでもないの、そう頻繁には使えない。少なくとも、今は使うべきではない筈だ。

二人の返答に、其処まで気にしなくても良いのに、と少し寂しそうにしていたシノンだが、突然声を上げた。

「あー！」

「え、どうした？」

「さ、財布が、無いんです」

体中を手さぐりで調べながら慌てるシノン。さっき連れ去られそうになった時に、ゴロツキ達に奪われてしまったのかもしれない。どちらにせよ、これで長屋に行かなければどうしようもなくなった事だけは確かになった。

「……それじゃ、行こうか？」

「そうしましょわ!？」

財布が無い事に肩を落としているシノンを、ツェイトが片手で持ち上げて左肩に乗せた。突然の事だったので、シノンは目を白黒させている。

「ごめん、恥ずかしかったか？」

考えてみれば、やたらと目立つ自分の肩に乗るとなると、多くの大衆の注目に晒される可能性がある。そんな所にいけば居心地が悪いかもしいれない。軽率だったかなと不安になったツェイトだが、そうでもないらしい。

「い、いえそうじゃなくて！ 私は一人で歩けますよ！」

「……そうか。でも、こっちの方が多分早く着く」

ツェイトとシノンの身長差は3〜4倍は違う。それに伴い歩幅も違う訳だから、どうしても移動する速度に差が出てくる。そこで、ツェイトはシノンにはナビ代わりとして肩に乗せる事にしたのだ。

そう訳を告げると、シノンはならお言葉に甘えてつとツェイトの肩に乗っかる事となった。

「ついでだ、セイラムもどうだ」

ちよいちよいと、片膝を着いたツェイトがセイラムを手招きする。セイラムは、山奥の村に住んでいたので歩く事は慣れてはいるだろうが、先程から歩き詰めだったし、腹も空いているのだ。結構疲れてるんじゃないのかとツェイトは考える。

「う、うーん……じゃあ、そうさせてもらおうかな」

頬を指で掻きながら躊躇していたセイラムも、村から旅立ったあの時の様に、ツェイトの胸の前で組んだ腕を椅子代わりにして座り込む事になった。

二人が座った事を確認したツェイトは、グツとその巨体を立ちあげさせる。その際、シノンが嬉しそうに声を上げた。さしずめ、アトラクシヨンの乗り物に乗った気分なのだろうか。

「角は危ないから触っちゃだめだ。掴むなら俺の頭か首辺りにしてくれ」

「はい、分かりました」

「よし。じゃあ道案内、宜しくな」

「はい！ えっと、此処からでしたら……」

シノンが道を示せばそこをツェイトが歩き出す。

その日住民区内では、少年と少女を乗せた巨大な甲虫の巨人が歩き回る姿がしばし確認される事となった。

「意外に呆気なく着いたな」

「私達の苦勞ってなんだったんだろう……」

「あ、あはは……」

呆然とする二人に、シノンはまだ苦笑するしかない。

ツェイト達はシノンの指示通りに道を通って行ったのだが、目的地であるヒグルマ達の長屋にあっさり到着してしまったのだ。

流石は地元育ち（？）は違うと言うことか。

そして、そんな彼らの前にいるのはヒグルマ達の三人。自分達の徒勞に虚しさを感じている二人とその他1名とは違い、彼らは目を丸くしてツェイト達を、正確にはツェイトの肩に乗っているシノンを見ていた。女侍に至っては、震え出す始末だ。それがどんな感情によって引き起こされているものかは不明だ。

「わ、若様っ！！」

ツェイトの元へと駆けよって来る女侍に合わせて、ツェイトも肩に乗せていたシノンを降ろした。すると駆けよって来た女侍が、シ

ノンの両の肩をガシツと掴み、掴まれたシノンはビクリと体を震わせた。

「何処へ行つてらしたのですか！ 皆心配したのですぞ！！」

叱り付けている女侍の表情は、怒りと共に安堵している様な複雑な顔をしていた。それだけシノンの事が心配だったという事だろう。

「……ごめん、次からは気を付けるよ」

「次からでは遅いのですよ、若！ しばらくは外出は禁止させていただきます」

「ええ！ そんなぁ……」

「当然です。若は、ご自身の身分と言うものに関して自覚が足りません！ そこを改めて貰わなければ、とてもではないですが迂闊に外へはお出しできません」

シノンと女侍の二人で会話が白熱している所、セイラムを降ろしているツェイトの元へヒグルマとダンがやって来た。

「子守をさせちまって悪かったな。それで、あの坊主は何処で見つけたんだ？」

「城壁の近くで、ゴロツキ達に運ばれている所を、な」

ツェイトの言葉に何っと、ヒグルマ達の眼が鋭くなった。

「その話、詳しく聞かせちゃくれねえか？」

場所は昼間、ヒグルマ達と話をしていた川のそば。夕方に近付いて来た為か、屋台を転がして店を開ける支度をしている者達がちらほらと見受けられた。場所が住宅区内の為、出稼ぎから返って来た者達が主な客層と言った所か。

「な、何と言う不届きな！ 若にそのような狼藉を働く者がいるとは！」

女侍、ミキリはツェイト達の説明を聞き、シノンにされた仕打ちに憤慨する。もし目の前に先の賊達がいたのならば、叩っ切っつまうのではないのかと言う程の剣幕だ。

先程移動する際にミキリが自己紹介をし、ツェイトとセイラムに礼を述べていた。見た目通り根は真面目らしく、頭こそ下げはしなかったものの、非常に感謝している旨を言葉と態度で告げていた。

一応ミキリはシノンとの話が済んだようだが、何やらシノンの方はもの凄く残念そうな顔で俯いていた。どうやら先程女侍が言った謹慎が決定となったみたいだ。実際に命令を下すのは彼女では無く、彼女の上司か、シノンの親になるのだろうか。

「……しかし危なかったな、もう少しで町の外に連れ出されてたかもしれないねえ。良い所で出くわしたもんだ」

「セイラムちゃん、あんがとうよ。おかげでシノンが無事に見つかったぜ」

顎に手をかけて思考に耽っているヒグルマの隣にいたダンが、セイラムに感謝した。

「い、いや気にしないで。私もあの時カツとなって動いていたから……あまり、深く考えてないんだ」

「だが、それでも無事にこうして若様を此処まで連れて来たのは他ならぬ貴女達だ。私からも重ねて礼を言う。本当にありがとう」

ひとしきり怒って冷静になったミキリも加わり、立て続けに礼を述べられた事に照れているのか、セイラムはあさつての方に視線を向けながら、己の触覚をつまんで弄っていた。

するとそこで、その場の空気を変える様にヒグルマがパシッとキセルで自分の掌を叩いた。

「お前さん達2人には借りが出来ちまったな」

「借りだなんて、そんな大層な事は……」

「俺達からすりゃ大した事よ」

ヒグルマに其処まで言わせるあのシノンと言う子供の事がツエイトは気になったが、下手な詮索は數蛇に繋がりがねないので口にはしない。それに、訊けば応えてくれるかすら分かりもしないのだ。

本人もそこらへんの事は伏せている様なので、ならばその事には触れないで別の話題に変える事にした。

「じゃあ、子守代として飯でも奢ってもらおうか」

「あん？ お前の？ ……何かしこたま食いそうだな」

「いや、俺じゃなくてセイラムだ。朝食食べてから殆ど何も口にしてないんだ」

「何？ そういっつのは早く言え。嬢ちゃん、何が食いたい？」

「え？ あの、ええっと……」

「……俺とは随分対応が違うじゃないか」

「おめえの図体で飯なんて頼まれたらこっちの財布がたまんねえんだよ。調子に乗って店ごと食うなよ？」

「おい、怪獣か俺は」

「怪人だな。どっちかっていうとよ」

軽口をたたき合い、戸惑い、笑い、苦笑する。様々な感情が飛び交せながら一行は進む。

空は青空から夕暮れ時へとその色合いを変えている最中で、美しいグラデーションを空一面に彩っていた。

「何い！　しくじった!？」

ワームズの城下町から少し離れた山の麓付近。その森の中にある小屋の中。本来其処は、木こり達が利用する休憩所として大分昔に立てられていたものだったのだが、現在其処を利用している者達は木こりでは無い。

声を荒げたのは、顔の右半分に大きな切り傷のある壮年の昆虫人の男。目つきは鋭く、こめかみから目を通り、顎にかけて刻まれた一本の切り傷が、その男をより凶悪な面構えにさせていた。

筋肉が男の着こんでいる作務衣の様な服を押し上げ、男の体つきを傍目から見ても逞しいものだと思わせる様に自己主張しており、その常人よりも太い両手足には、手甲と脚甲が装着されていた。積み上げられた木材の上に腰掛け、不機嫌な顔で目の前にいる者達を睨みつけている。

彼の前には、申し訳なさそうに身をすくませているゴロツキの男達が複数。そのゴロツキ達は、シノンを連れ去ろうとしていた連中であり、壮年の男の手下の者だった。

「俺達は高い金貰って雇われてんだぞ！　それでこのザマはどづいうこった!？　この馬鹿どもが！」

小屋を響かせんばかりに罵声を飛ばす壮年の男の迫力に、手下のゴロツキ達はビクリと身を震わせた。

「そ、それが……城壁を越える所で邪魔ものが入りやして……」

「……邪魔？ まさか、クエスターの二人組か！」

壮年の男は声を荒げる。脳裏に浮かぶのは2、3年前からこの国に姿を現し、確かな実力で名を挙げて来た2人のクエスターの男達。一人は背中に鉄の筒を背負った昆虫人の男。そしてもう一人は、アリジゴクの姿をした、自分達とは全く違う昆虫種族の男。

いずれもワームズ国内で起きた騒動に度々介入しては、騒動の解決に協力している者達だ。その名は世間でも、そして彼らの様な裏の社会とでも言うべき、犯罪者達の界限でも知られていた。

「あんの野郎ども……今度は俺達の仕事にまで首を突っ込んできやがったか！」

厄介なのは力だけでは無い。一介のクエスター風情ならば、何処ぞの権力によつて社会的に抹殺される事もあつたのかもしれないが、あの二人はそうはいかない。なぜならば、彼らの背後にいる存在が、更に強力な権力を以て彼らを守っているのだ。下手に手を出せば此方が危ない。如何にして2人を対処するべきか、壮年の男は思考をフル回転させていると、手下のゴロツキの一人が訂正した。

「い、いえ。それが、違えんですよ」

何？ とゴロツキの言葉を聞いた壮年の男は、先程まで取り乱していたのが嘘の様に落ち着きを取り戻す。

「奴らじゃ無い？ だったら、どこの誰がやった」

「へえ、それが……見上げるほどにでかくておっかねえカブトムシの男と、妙ちくりんな手足をした小娘の二人組でさあ。あいつらに

二人やられちまって、暫くはまともに動けねえ体になっちまいやした」

ゴロツキの言葉に、壮年の男は首を傾げる。

「何だそいつらは、あの二人の仲間か？」

「分かりやせん……何せ、突然の事だったもんで……」

「……連中じゃねえ、か」

壮年の男は、無精ひげの生えた顎をさすりながら思案する。カブトムシの男と言う存在が気になるが、だからと言ってこのまま引き下がっては腹の虫が収まらないのもまた事実。

手下たちがそわそわと見守る中、考えのまとまった壮年の男は膝を叩いて立ちあがった。

「此処は一つ、依頼主に話を通した方がよさそうだな」

「お頭、俺達はこれからどうするんで？」

「俺はこれから城下町に行く。お前らは俺が指示を出すまで隠れてる。特に今回仕事に出た奴は絶対に町に入るな。例の二人組に顔が割れちまってるだろうからな、人相書きでも出されちゃたまんねえ」

壮年の男がテキパキと手下達に指示を出し、手下達もそれに返事を返した。

粗方言い終えた壮年の男は、ぶっきらぼうに小屋の戸をあけると、軽やかな足取りで城下町へと向かって行った。

「……ったくよお、ボロい仕事かと思えばこれだ。面倒くせえっただらありやしねえ」

口では愚痴ってはいるものの、壮年の男の口元には確かに笑みが浮かんでいた。

第7話（後書き）

更新速度を上げるべく、試験的に文字数を少なくして投稿しております。

文字数を取るか、速度を取るか、それが問題です。

……いや、内容も大事ですよ？ うん、本当。

第8話 前編（前書き）

なんだかんだ言って、結局2万文字になってしまいました。
これ位無いと落ち着かない夕子なのでしょうが。
なので前編後編と分けさせていただきます。

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします。

第8話 前編

首都デイスティナで初めて迎えた朝、セイラムは横たわらせていた体をのっそりと起こした。布団代わりに被っていた毛皮の蓑は腰下へめくれ落ち、今まで温かった上半身に少しばかり冷えた空気が流れ込む。

くあつと欠伸をしながら背伸びをしたセイラムは、眠たげな目を手でこすり、暫く同じ場所をジツと見つめていたが、徐々に思考が覚醒して行き自分の今の状況を思い出した。

現在の場所は、川岸近くの少し大きめの木の下。セイラム達は、宿に泊らず野宿をしていたのだ。

先の誘拐未遂事件の一件で知り合ったミキリとシノンの二人が帰る姿を見送った後、ツェイト達はヒグルマ達と屋台の並ぶ川沿いで食事を取った。夜になり、何処で寝ようかと考えたのだが二人はそこで思い悩む。悩みの種は、ツェイト達の寢床である。

城下町の事に詳しいヒグルマ達に訊ねても、ツェイトの巨体が入れる様な宿屋は無いという返事が返って来た。多くの種族達が行き交うこの大都市で、ツェイトの体に合った施設が無いと言う事は、すなわちこのネオフロンティア、もしくはこの連合国内ではツェイト程大きな体の国民はいないのか、本当に稀にしか存在していないのかもしれない。

野ざらし状態で寝る事は想定済みだったツェイトであるが、なら

ばセイラムはどうするかと考えなければならぬ。セイラムは普通に入れるのだから、ちゃんとした場所で寝かせてやりたい。それに金銭的な問題もあるので、出来れば低コストが望ましい。

ヒグルマ達の家はどうかと考えるが、ツェイトの知り合いとはいえ、男の住む家に若い娘であるセイラムを入れるのはどうなのかと思う。ご近所の女性の住まいを借りる事も考えられたが、それも厚かましいのではと思うし。

其処でセイラムがツェイトと一緒に適当な場所で野宿をする事を提案したのだ。どうせ今後も野宿を機会が多くなるだろうから、今やろうが後でやろうが大差変わらない。と言うのがセイラムの言い分だった。セイラムは子供の頃から狩りでウィーヴイルと一緒に野宿をしていた経験があった為、それほど気にはしていなかったのだ。

結局野宿をする事になった二人。途中、町の中を見回りしている役人達に声をかけられたが、訳を話すと「それはまた、災難だな」と笑うべきか、同情するべきかよく分からないと言った顔でツェイト達を見逃してくれた。

そして、今に至る。雑草が生えていたので、砂利道の上で寝転がるよりかは大分マシではあるものの、それでも布団の上で寝ると比べれば、やはり快適とは言い難い。

セイラムは、ボーイッシュなヘアスタイルの己の頭をガリガリと片手で掻きながら、先程寝ていた場所の寝心地を思い出し、ちよつとだけ布団の上が恋しくなった。

そこでふと、何となしに頭を掻いていた自分の手を見る。

その手は、肘から指先まで黒く無骨な外骨格で覆われており、本来の昆虫人の女の子の手としてはいささかごつすぎる。足も同様に膝から下が外骨格で形成されており、脚装を身に付けている様である。靴などを履く必要が無いので便利と言えば便利かと当人であるセイラムは思う。

他にも、セイラムの体は所々同族である筈の昆虫人とは違い、全身に備わっている外骨格の個所がとても多い。手足は言うに及ばず、顔に至っては顎やこめかみにまである為、防護面積の小さいヘッドギアを付けている様である。

物心ついた時から自身の体がこの様な姿をしていたので別段不便さを感じてはいないが、それでも不思議に思った事は度々ある。何故自分は他の皆と違うのか、と。

育ての親であるウィーヴイルとは、血が繋がっていない事は既に知っている。

ならば本当の親は誰なのかと当時のセイラムが訊いた時、旅の途中でお前を拾ったので分からない、と辛そうに顔を歪めてしまったのでそれ以上訊けなくなってしまう、それ以降はその話題には触れないでおく事にした。別にそこまで知らなくても困る状況では無いのだからと、楽観的に考えていたのだ。

だが気にならないと言えば、嘘になる。今も心の奥では、本当の両親が誰なのかを知りたいと思っている自分がいるのだから。

そしてその気持ちは時間が経つ毎に増して行く。それは、あの兵士達が村を襲ってきた時からだ。

何故自分が狙われた。何故、私だけが。

自分の生まれに関係があるとするのなら、一体何の関係がある。別れを告げた村を思い出し、分からない事だらけで頭の中がもやもやしてきたセイラムは少しばかり気が滅入って来るが、頭を振って暗い感情を無理やり振り払った。

気を紛らわせる様に、セイラムは自分と一緒に寝ていた大きな同行者であるツェイトを見た。

(あれ、寝てる?)

まだ出会ってからそんなに日が経っている訳ではないのだが、ツェイトは自分よりも早起きだという印象がセイラムにはあった。

しかし今、その彼が寝ている。セイラムは、ツェイトの寝ている姿を見るのは初めてだった。

普段は螢火の様に青白い光が灯っている目の部分には何も灯されず、まるで機能を停止したアイアンゴーレムが木にもたれかかっている様に見えるが、外骨格に覆われたツェイトの逞しい胸部が僅かに上下しているのが見えるので、確かに生きている事が分かる。

ツェイトの体重が加わった事で、背持たれている本人の胴体程は太い筈の木が若干弓なりに曲がりかけている。それを見て、いったいどれだけ重いんだと驚きと呆れの混じった溜息をつくセイラムだが、一緒に歩いているときに聞こえる重い足音からかなりの重さが考えられた。

不思議な奴、とセイラムはツェイトとの出会いを思い出す。

凄い力を持ち、友達を探す為に住んでいた森を出て旅をしているという、友人思いな虫の巨人。

兵士達に追われて川に流され、目が覚めたときにその姿を見た時は思わず声をあげて身構えてしまったものだ。それ位ツェイトの姿はなんとというか、おっかない。特にあのような状況下におかれていれば尚更警戒しても仕方が無いだろう。

しかし話して見れば見た目の割に、と言えばツェイトには悪いが随分と理性的で穏やかな性格をしている。尤も、彼女にとってそれ以上に意外だったのは、その年齢が自分と10歳程度しか変わらないうと言っただけに尽きるのかもしれない。そう言った所が、セイラムから警戒心や遠慮を削ぐのに一役買っていたのは確かだった。

そしてその外見に繋がって来る事だが、その種族だ。

ハイゼクター。昆虫人とは違い、虫としての特徴を色濃く残した姿をした別の昆虫種族。

ついこの間まで聞いた事も見た事も無かった種族ではあるが、セイラムは全身が外骨格に覆われているその大きな姿を見て、自分の体との共通点をほんの僅かながらも感じていた。

だからこそ、セイラムはツェイトを知りたいと思ったのだ。それは男女としてのものではなく、己自身を知る為のカギとして、そして自分を助けてくれた恩人への純粋な好意として。

ツェイトと一緒にいれば、何か分かるかも知れない

根拠と言えるものは無い。セイラムがツェイトの姿と自分の体を見比べて、何となくそう思っただけに過ぎない。

自分の親のどっちかは、もしかしたらツェイト達と同じハイゼクターって奴なのかもしれないな、とセイラムは自分が気づかないう

ちに真実に指をかけていたのだが、寝起きの為、あまり頭の回らないセイラムはすぐに忘れてしまった。

その代わりに、ツェイトの寝顔と言う新しい一面を見て気を良くしたセイラムは、調子に乗って何かを思い付く。

辺りを見回し、誰もいない事を確認する。今の時間は太陽が顔を出し始めている早朝時、セイラムは知る由もない事だったが、この時間帯で起きているのは町の警備を任されている兵士達位なものだ。しかもそれは城壁と町の大通り付近に限った事。セイラム達がいる様な場所にまで来る事は、この時間帯だとほとんどない。

人の気配が自分たち意外はいないと分かったセイラムは、ツェイトに気付かれないようそつと懐まで忍び込む。ツェイトの顔を覗きこんでも、まだ起きる気配が無いと分かるとセイラムは、ツェイトの腹にそつと手をやった。

そこは、金属の様な硬さと同時に、何処か弾力の様なものも感じられる不思議な手触りと微かな温もりが感じられた。

その外骨格から感じた微熱は、以前行った電気熱のそれとは違い、生物が自然的に発する熱のそれ。すなわちツェイトが生物として生きている事を証明している。

触っても起きない事が分かったセイラムはこれに調子づき、自分の手の甲でコンコンと軽くツェイトの体を叩いてみたり、指でこすったり、顔を近づけてまじまじと観察したりしていた。

……凄いや顔してるなあ、と見つめる先はツェイトの顔。仰々しい鎧かぶとの様な作りをした外骨格で頭部を覆い、額から伸びた角は、鋭利な刃の様に鋭く、その長さは１メートル以上と下手な刃物より

長大でかつ、太い。

目に当たる2か所の真つ暗な部分は、ツェイトが起きている時は青白い光が灯っており、それがツェイトの顔により一層迫力を持たせている。

村の中や、今いる町の中ですれ違う女子供達がおっかなびつくりツェイトの顔を見てしまうのも仕様が無いのかもしれないなあ、とセイラムは納得すると同時にツェイトに同情した。

(これって、どうなってるんだ?)

ツェイトの顔を眺めていたセイラムは、何となしにその顔に片手を伸ばした。

地面に座り込み、顔を俯かせて寝ている今のツェイトならば、セイラムの身長でもツェイトの頭に何とか手が届く。

目標は、ツェイトの口を覆うマスク状の外骨格だ。セイラムは、あの外骨格の仕組みが気になって仕方が無かったのだ。

何度かツェイトの食事する所を見たが、その際この繋ぎ目が見当たらないマスクが中央から縦に割れ、ツェイトの頬を覆う外骨格の内側にスライドして収納されるのだ。そしてそのマスクで隠されていた口は唇に当たる部分が無く、剥きだしだ。咬まれば只では済まなであるうほどに鋭く尖った牙が、ギリリと隙間なく生え揃っている。

正直な事を言えば、セイラムはあの口がちょっと怖かった。

怖い事は怖いが、しかしそれでもあのマスク状の外骨格の構造が気になる。怖いもの見たさの、ささやかな冒険心に心を炊きつけられてセイラムは手を伸ばした。

顔に触れたら流石に起きるんじゃない、いやでも。腕を伸ばしては躊躇い、されども再度伸ばすと言った行動を何度か繰り返した後、セイラムは覚悟を決めた。

セイラムの武骨な手……しかしツェイトの手と比べればとても小さなそれが、ツェイトの顔に迫る。

それに伴い、触れてはいけないものに触れてしまう様な、妙な背徳感と高揚感がセイラムの心臓の鼓動を高鳴らせた。指先が目標に接触するのはもう僅か。

だが、そんな空気をぶち壊す様に、突如ツェイトの口部外骨格が勢いよく開いた。

マスクだけでは無い、目にもツェイトが起きている事を示す様に、何時もの青白い光が灯っている。

「ぴゃあっ!?!」

突然の出来事と、ドアップでツェイトの牙が剥きだしの顔を見た衝撃でセイラムは奇妙な声をあげてすっ転げた。

更に運の悪い事に、転んだ際に後頭部が硬い外骨格で包まれたツェイトの足に直撃してしまい、セイラムは眼から火花が飛び出でる様な錯覚を覚えるとともに、頭を抱えて鈍痛に悶え転がってしまった。

「お……おい、大丈夫か？」

まばたきをする様に眼光を何度か点滅させたツェイトは、自分の足に頭をぶつけてして呻くセイラムに、心配そうに声をかけた。

「ほ、星が飛んだ」

「星？ もう朝だぞ」

チラリと空を見上げたツェイトが惚けた事を抜かした。

「んな事は分かってるよっ」

自分の体に強打して呻き声をあげるセイラムを心配していたツェイトだったが、取りあえず元気そうなのでホッと一安心。ついでに口の外骨格も閉じておく。

「ところで、何をしてたんだ？ 俺の顔に何かしようとしていたみたいだが」

「え！？ あ、いや、その……」

ツェイトの問いにセイラム口ごもり、顔から冷や汗が流れ出す。額の触覚は忙しなく揺れ動き、今のセイラムの心境を代弁しているかのようにであった。

セイラムが視線が宙を泳ぐ事数秒、何かをひらめいた。

「そう、埃！ ツェイトの顔に埃が付いていたんだ！」

それを取ろうとしたただけなんだよ！ 手を慌ただしくバタつかせながら、必死になって自身の行動に対して正当性を訴えてくるセイラムをツェイトは「そうか……ありがとう」と微妙な声色でセイラムに礼を告げた。

実は、ツェイトはセイラムが近付いていた頃には既に起きていたのだ。

目を瞑っていたので見えはしなかったが、足音と気配でおぼろげにそれがセイラムだと分かった。しかし当の本人は起こしに来る訳では無く、自分の体を調べ始めたではないか。

ツェイトはそのセイラムの行動に興味がわき、静かに事の成り行きを狸寝入りを決め込みながら見守る事にしたのだ。勿論、度が過ぎるものならばすぐさま叱るつもりだったが、そんな感じでもなかった。

体を調べられている事にくすぐったさを感じつつ、タイミングを見計らって脅かしてやろうと思っていたのだが、セイラムは面白い位にかかってくれた。

事の真相をセイラムに言ってしまうても良いのだが、教えたら教えたで可哀そうな気がしたので、ツェイトは気付かないふりで通す事にした。

そんなツェイトの内心を知らず、セイラムはツェイトが気づいていないのだと思い、必死に弁明しているのだが、本人は気付きつつも知らないふりをしている。これではセイラムが道化である。

「おい、ちゃんと私の話、聞いてるよな!？」

「ああ、聞いてるよ」

「本当に私は埃を取ろうとしただけなんだぞ！ 本当だからな！」

朝空の中、セイラムの元気な声と、鶏の様な鳴き声だけがその一画から響いていた。

「え、試験？ クエストに？」

時刻は朝。町の住民が、今日一日を過ごせるよう精を付ける為に朝食を食べ始める頃だ。

川のほとりで、木で出来たどんぶりに盛られた汁物をのんびりぱくついていたツェイトは、牙が剥き出しの口をポカンと開けた。食事中の為、普段付けているマスクは頬部分の外骨格の内部に収納されている。

今日の朝食の内容はヒグルマ自家製のこった煮である。適当な食料を適当な形に切った後、鍋の中に味噌と一緒に煮込むという乱雑な、良く言えば男らしい料理である。

セイラムもツェイトの隣でお椀に盛られたそれをもくもくと食べながら二人の話に耳を傾けていた。

ツェイトにそんな声をあげさせた張本人であるヒグルマは、何時も背負っている大筒を背負っておらず、身軽な状態で朝の一件キセルに詰められた煙草を堪能していた。

「なんだ、知らなかったのか？」

「いや……」

セイラムは？ とツェイトは訊こうとしたが、セイラムも初めて聞いたらしく、え？ 何だそれ？ と言わんばかりに目を丸くしていたので彼女も知らないのだろう。

自分達の聞いた登録方法とは違う。ウィーヴィルから教えられた話では、手数料を払って手続きをすればそれで済むものばかり思っていたのだ。だからシノンと出会う前のあの時は、手早く済ませたおきたくて組合の支店へ行こうとしていたのだ。

予想外の内容に、表情のうかがえない顔をしているツェイトではあっても、しかしハッキリと困惑の声が出ていた。

「手数料を払って、手続きをすればすぐに登録できるとしか聞いていないぞ」

「ああ、十数年前に制度が変わっちまったんだよ。多分それ言った奴は、制度が変わる前の事を言ってたんだろう」

俺達も登録する時受けさせられちゃった、とヒグルマが付け加える。まあウィーヴィルも大分歳を取っている様だから、つい最近起きた制度変更の件については気付かなかったのだろう。

「どうもモラルや教養の無いアホが増えすぎたつてのが理由でな、それを見かねた組合の方が新しく設けちゃったつてのが経緯らしいぞ」

しかめっ面になりながらヒグルマはやや悪辣に言う。恐らくは、そんな極一部の輩の影響で自分達も面倒な試験を受けなければならなくなつた事に腹が立っているのだろう。それについてはツェイトもその意見には同感である。おかげで予定外の足止めを喰らいそう

なのだからはた迷惑な話である。

しかし面倒な事になった、とツイイトは食べ終えたどんぶりを掌で転がしながら考える。

試験から合格までの期間は最大で2週間、最短で1週間近くかかるらしい。そのアバウトな期間が気になるが、先の問題で発足された試験となれば、何らかの常識が問われる内容になるのだろう。ネオフロンティアの常識を軽く齧った程度の今のツイイトで、果たして合格ラインにまで達する事が出来るのかは、正直な所怪しい。そして、そんな知識の欠如を補填するべく試験勉強をする必要がある。そうなので、その期間も含めればどれだけ日にちが掛かるのかが全く見当がつかない。そもそも試験自体の難易度も分からないのだ。出来れば手早く済ませてしまいたかったが、予想外の長期滞在という憂き目に遭う事になりそうな予感を感じたツイイトは、嫌な事を思い付いた。

あまり長く留まっていたら、あいつらが来るかも知れない。

あいつら、とはセイラムを狙う兵士達の事だ。町に入り、同郷の知人と出会ってからは極力頭の片隅に追いやっていたのだが、此処に来てその不安が再びツイイトの心の中を占め始めて来た。

村を焼こうとするような奴らだ、この様な大都市で、しかも王が住まう場所を火の海にする様な事をしでかすのかどうかは分からないにせよ、追い付いて来たら何か仕掛けてくる事は考えられる。

他にもまだまだ問題はあある。

もし、あの兵士達がこの国に対して犯行声明を出し、目的としてセイラムを要求してきた場合、この国はどのような対処をするのだろうか。

規模の分からない一介のテロリスト風情の戯言など聞く耳もたんと排除に向かうのか、それとも小娘一人を生贄に奉げれば簡単に済む話だと判断して、セイラムを差しだすのか。

そんな状況下に陥った時、自分は、どうするべきなのか……。少なくとも後者に関しては断固として受け入れる訳にはいかない。

どれもこれもが可能性に過ぎない。だが確率はゼロでも無い。

どうする、思い切ってクエスターは諦めるか？　だがまだ兵士達は来ていない、早計過ぎる。それに連中が今いないのだから、今のうちに済ませてしまえば良いだけの事、むしろ今がチャンスかもしれない。これを逃せば、次もまた同じ機会が訪れるかと言われれば分からないのだ。

クエスターになる事による今後の利便性と、その為にこの町に留まり続ける事のリスク。果たしてどちらを重視するべきか、ツェイトはどんぶりを近くに置いて腕を組み、二つを天秤にかける。

「何だったら、俺達が使ってた参考書、貸してやろうか？」

此処でツェイトに救いの手が差し伸べられる。しかも少々意外な形で。

「え、参考書？　そんなものがあるのか？」

つまり筆記試験があるという事か。

この世界は昔、大きな戦争が原因で文明が衰退していたと聞かされていたので、参考書などと言う単語が此処で出て来た事にツェイトは驚いた。

もともと、山奥の村であるカジミルの村のウィーヴィルの家に和

紙の様な質感の用紙があつた事から、意外な事にこの国、または世界の印刷技術や識字率等は低い訳ではないのかもしれない。という予想はある程度出来ていた。村であれなら、国の首都ではそれ以上の物が店に出されている事は想像に難くない。

「ああ、俺達も手持ちの品を金にした後に慌てて買って、2、3日勉強して受かつた訳よ」

「……2、3日程度どうにかなるものなのか？」

ツェイトは訝しむようにヒグルマに訊ねた。まさかそんなものがあるとは驚きだ、しかし光明も見えて来た。短期の勉強で受かつたと言う事は、さほど難しいものではないものと考えられる。

「まあな。でも実際の所、2、3日もいらないかもしれねえなあ……」

そんな言葉を残して一端長屋へ煙草を補充しに戻るヒグルマ。どういつ意味なのだろうかと疑問に思ったツェイトだが、それは後ほど判明する事になる。

「まさか、試験を受ける羽目になるとは」

「ウィーヴィルも肝心な所で話が違つんだもんなあ……」

「ままならないもんだな、本当に」

良く考えてみれば、十分あり得た話なのだ。しかし、ウィーヴィルの言葉を全て信じたが故に、全く考慮していなかった。ウィーヴィルも知らなかった事態らしいので、ツェイトは彼を恨む気は無い。恨むべきは、そんな試験を導入させる原因となった者達だろう。

ヒグルマから伝えられた試験の話聞いた二人は揃って川沿いで座りこけ、ぼんやりと川の流れを眺めていた。最初は気晴らしに町の大通りにでも行こうかと考えたのだが、長屋へ帰るときにまた迷うのは御免被りたいし、試験と言う難題が二人の頭にちらついてそんな気にもなれなかったのだ。

「此処で呆けても仕方ない。早速勉強に入ろうか」

「勉強とか苦手なんだけど……体動かしてる方がよっぽど楽だ」

「そうぼやかさない。今の内に苦勞しておけば、後が楽になるんだ」

幸いな事に、参考書の厚さは漫画の単行本一冊程度、やれない事はない。それに、試験の日は今から二日後、試験自体も結構頻繁に行っているらしいので、絶望的な状況でもないのが救いか。

セイラムも読み書きは出来るので、後は本人の頑張り次第だ。試験を受けたヒグルマ達の話聞く限りでは、その筆記試験とやらは問題の問いに対して指定された4つの回答から適切なものを選ぶ四択形式だとの事。記述式にされるよりかはマシかもしれないが、それでも油断は出来ない。

ツェイト達は、ヒグルマ達から借りた紐で綴じられた冊子状の参考書を渋々とめくり、試験勉強に勤しむ事にした。

「ワイルドマツクの血って精力剤になるのか、すっぱんみたいだな」

「すっぱん？ すっぱんって何だ？」

「え？……あー、亀みたいな奴って言えば分かるかな。その肉が美味いと聞いた事がある」

「へえー、それってツェイトの住んでる所にしかないのか？ 美味いって言うんなら、食べてみたいな」

時折脱線しつつも学習していく二人。そんな最中、ツェイト達はページをめくるたびにツェイトは安堵のため息をついていた。

(これは、何とかかなりそうだな)

参考書に書かれた内容は、ツェイトにとってはそう難しいものはなかった。

簡単な計算式等が出てくるが、それらは小中学で憶えた基礎的な事を忘れていなければ大したものではないし、記載されていた基本的なモンスター関連の情報は、NFOの物と同じであった。その特性も同じなので取り立て新しく憶える様なものはそれほど多くなく、昔憶えた事を再復習している様な感じであった。

これだったら確かに自分達NFOプレイヤーならそう苦労する事も無さそうだとツェイトはヒグルマの先程の言葉に納得した。

勿論注意すべき所はある。例えば モンスターの肉を の地域の種族達は保存食にしている等、ゲームでは存在しなかった生々しい情報や、この世界の歴史や文化に関わるものだ。特に連合国内は異種族がわんさといるのでそれに付随して、記載されている内容

の割合も他のものより多い。まあ、内容自体はあまり突っ込んだものではなく、あくまでさわり程度なのでそれが救いだっただ。

これらは注意しておかないと間違えてしまいそうなので気を付けなければならぬ。以前ウィーヴィルからは軽く教わっているが、先のクエスターの登録の件もある為、念には念を入れておいた方が良さそうだ。

ツェイトは黙々とページを読み進めては、その大きな指先で器用に参考書のページをめくっていく。

借りた参考書の大きさは、人間サイズで言う所のA4サイズのノート程度。ツェイトにとっては、自分の手のひらの半分も無い大きさ程の、とても小さな物だ。しゅっと、ツェイトの外骨格と紙が擦れる音と共に新しいページを開いたツェイトは、其処で指を止めた。

【エヴェストリア大境界溝】

ネオフロンティア大陸の中心に存在し、大陸を東西に分断するよう割れている、あまりにも巨大な地割れ。

幅だけで数百キロ以上に達し、その長さは大陸を縦に真っ二つにしてしまっている程。深さに至っては誰も分からないと言う謎の亀裂地帯だ。ネオフロンティア大陸の面積は、驚いた事にオーストラリア大陸と同程度の様なので、地図から見れば太い線が引かれている程度にしか見えないが、実際に目にすれば凄まじい光景なのだろう。

NFOの時の世界は、総面積自体は関東地方程の大きさだった。それだけでも驚くべき事だが、此方側では何百倍にまで拡大しているのだ。その広さは世界地図越しだけでは想像だにできないものがある。

この地帯は、大戦争期の頃の影響による地殻変動で生まれたとも、

この世界が誕生した時から存在していたとも言われているが、真相は全く解明されていない。多くのクエスター達はその謎を解き明かす為にその裂け目へと降りて行ったらしいのだが、戻って来た者はおらず、何時しかその地はクエスター達だけでなく、この世界の住人達にとって侵入禁止の禁断の場所となった。

しかし、禁止されているもの程やってしまいたくなるのは、知性を持った生き物の性か。制止の声を振り払い、その地を攻略しようとする者はいつの時代にも現れるらしい。

(そして、その境界溝を越えた先には人間達の住む領界がある、か)
ツェイトは再びページをめくり、ある項目に目を通す。

【人間】

ネオフロンティア大陸の東部を領域にもつ種族であり、その人口は大陸で一番多く、亜人諸国連合の総人口とほぼ同じ。

身体能力や魔力に突出したものは無いが、総合的に秀でた種族で、他の種族にも引けはとらない。亜人諸国連合と違い、5つの国によってその領域は統治されているらしい。

連合や、特に人間達では大境界溝を越える事は困難なので、海に面した国から船を出して交易を行っている。と参考書には記されていた。

それが無難な所だろうな、とツェイトは交易方法の点について納得する。

何せツェイトの参考書を見る限りでは、この世界の文明では大境界溝を渡って移動などと言うのは非常に危険だ。

溝の幅が数百キロメートル以上あり、底無しと言っても良い程の深さをもつ大境界溝。仮に飛行可能な種族が飛んだとしても、渡り切る前に体力が尽きてしまつたら大境界溝へ落ちてしまい、それが死に直結する。そんな危険が伴うのならば海から行く方が遙かに安全である。

（人間の国、いずれは行ってみたいが……）

人間の項目を読むうちに、ふと感傷に浸ってしまったツェイトだが、どうなのだろうかと今の自分の現状を振り返る。今の自分の姿を見た時、人間達はどんな態度を取るのだろうか。

本来は自分も人間である筈なのに、何故だかツェイトは、その距離がとても遠く感じた。

一通り参考書に目を通したツェイトは、はたとセイラムの方を見た。集中して読んでいたからかもしれないが、セイラム方から物音が聞こえないのを不審に思つての事だつたのだが、視線の先にあつた光景を見てツェイトは外骨格で隠れた口元をひくつかせた。

セイラムは舟を漕いでいた。こつくりこつくりと頭を揺らし、何だか気持ちよさそうにスウスウと寝息を立てているではないか。しかも手元には、参考書の代わりに何故か雑草が握りしめられていた。恐らくは一度取り落した時、寝ぼけて参考書と間違えて掴んだのだろう。肝心の参考書はと言うと、何処か物悲しげな様子で足元に放置されていた。

しょうがない奴だな、とツェイトは困った顔（と言っても、外骨格で見えないが）をしてセイラムの肩に人差し指を乗せ、軽く揺す

った。

「セイラム、セイラム」

「う、ん……んー……」

ツェイトに呼びかけでようやくセイラムが起きた。

まだ眠そうな顔でツェイトの顔を見上げたセイラムは、視線をゆつくりと自分の手元へと移し、自分の手に握りしめられた雑草と石ころを見てハツとした。

「うわ！ 本が草になった!？」

「なるわけないだろ」

こんなんでちゃんと受かるのだろうかと少しだけ、ツェイトは心配になってしまった。

第8話 前編（後書き）

後編へ続きます。

第8話 後編（前書き）

現段階で確認した所、お気に入り登録数が600件に到達！
皆さま、本当にありがとうございます！

今後ともよろしければこの拙作に是非お付き合ってくださいませ。

第8話 後編

それから2日後、ツェイト達は再びクエスター組合が指示した場所に立っていた。支店入り口から横にずれた場所に立て看板が立てられており、『クエスター試験受験者待機場所』と書いてある。二人は入り口の外で受付をしている係員から受験票である数字の書かれた木札を貰った後、静かに其処で佇んでいた。

二人並んで立つ姿に、特にツェイトの姿をざわめきながら見つめる大衆がいるが、そんな事今のツェイト達は気にしない。それに、支店の前に立っているのはツェイト達だけでは無い。他にもクエスター志望で試験を受ける者達はあるのだ。

ツェイトとセイラムを含めて受験者数はおよそ20人。ツェイト以外は全員昆虫人で、男性以外にも女性の受験者もいた。

それも当然の事かもしれない。クエスターの試験を受けられるのは此処だけでは無い、国として成り立っている種族国家ならば何処でも受験は可能なのだ。

クエスターの支店はどんなに規模の小さな国でも一つは必ず存在しているのだから、態々別の種族の国まで足を運んで受けるのは、何か事情があつて他国で受けざるを得ない状況になつた者位だ。大抵の受験者は自分達の国で受けるのが普通なのだ。

受験参加者達は皆総じて歳はセイラムと同じくらいか、それりし少し上と言った具合で、その大半がさつきからチラチラとツェイトの事を覗き見している。

一人だけ、他の者より倍以上の背丈のゴツいカブトムシの巨人が立っているのだ。見るなと言う方が難しい。

そんな視線を屁とも思わないツェイト達二人が身に纏うのは、メラメラと静かに燃える様な気迫。その内の片方は、若干目の下に隈が出来ており今にも撃沈寸前の有様であるが、それでも倒れないのはこの一瞬に全てを叩き込みんと意気込む闘志がそれを許さないからか。

二人の背中中は、勝利を手にせんと戦場へ赴く戦士のそれか、はたまた現代の日本で例えるのならば、受験戦争に挑む学生のそれであった。

「お前ら、やる気あり過ぎだろ……」

ツェイト達に随伴するのはダン。岩の様にゴツゴツとした体を持ち、人型のアリジゴクの様な姿をした彼は、二人の姿を呆れた顔で見っていた。

ダンは、今だ道の分からない二人をクエスター支店まで案内してきたのだ。ちなみにヒグルマはと言うと、本日以来の予定がある為現在留守にしている。故に予定の空いているダンが二人の案内を受け持つ事になったのだ。

「あまりノンビリしていられないから、気合いを入れてみたんだが……」

「これが終われば……これが終われば寝れる。寝る………れる」

「いや、だからってよお、これはちっと」

やり過ぎなんじゃないのか？ 先程から念仏の様にかかをつぶやき、幽鬼の如く揺れ始めるセイラムの姿を見て、ダンは引きながらもツェイトに言う。

ツェイトも内心、セイラムの惨状（？）を見てやり過ぎたと反省していた。

一昨日の夕方まではのんびりとしていたのだが、それから二人は昨日今日とかけて徹夜を敢行したのだ。

勉強を始めたあの日、あまりにもセイラムが集中力が無いものだった為、ツェイトは兵士が来るかもしれない可能性をついばやいてしまったのだ。すると、セイラムの態度が変わってしまったのだ。

鬼気迫る様な顔で本を睨むその姿に、これではまるで脅迫だと自分の言った事に罪悪感を覚えてしまったが、これで試験が受かるのならば止む無し。そう自分に言い聞かせて、今日まで来たらこの有様である。

登録して金が貯まったら、せめて何か御馳走くらいはしてやらなければ申し訳が無い。そんな事を考えているうちに、入口から誰か出て来た。

年若い、恐らくツェイトよりも若いであろう昆虫人の青年だ。この支店の職員なのだろう、胸にバッジらしき物を付けている。待機場所に集まった受験生達に対して声を張り上げた。

「えー、皆さん！ この場で数字の書かれた木札をお持ちの方は、クエスター試験を受験する方々とお見受けいたしますが宜しいでしょうか？………宜しいですね？ では、試験会場へ案内しますので着いて来てください」

職員の手元を見、受験生達がゾロゾロと彼の後を付いて行く。そこでダンもツェイトの腕を軽く小突いた。

「じゃ、後は職員の手元を見れば大丈夫だろ？ 俺は時間潰

して来るわ」

「ああ、悪かったな。色々世話かけさせて」

「何の、これ位なら大したもんじゃねえさ。あと、セイラムちゃんの面倒ちゃんと見てやれよ」

じゃあなと片手を振り、ダンが人ごみの中へと消えていった。此処から先はツェイト達が頑張る番だ。

ツェイトは、正気かどうか分からない状態のセイラムと共に職員が先導する列の後を追って行った。

連れられて来たのは、支店から少し離れた組合の別館だった。

入り口には下駄箱があり、段差がある。どうやら靴を脱いで入るタイプの建物の様だ。御丁重な事に、下駄箱の所には裸足で来た者の為に手ぬぐいまで完備されてある。ツェイトやセイラムの様に、履物が必要としない者達の為の配慮なのだろう。

多目的ホールとして建てられているのか、中は和風テイストの大ホールの様な作りをしており、その奥から見える試験会場には、簡素な文机に座布団と和風の家具が用意されている。

中々設備が整っているが、それをうまく使えそうにない図体のデカイ受験者が一人いた。そう、ツェイトだ。

それは係員の眼から見ても一目瞭然であった事は言うまでも無かつたらしく、入り口で困った様に立ちつくしていたツェイトに声をかけて来た。

「えー……貴方には特別に席を設けますので、そちらを使ってください」

青年の係員が少々困った様にそう言うと、別の係員やって来てこちらですとツェイトを誘導する。はて、どんな席なのだろうかと不思議そうに係員の後をツェイトはついて行き、其処でツェイトが目にしたものは……。

(青空教室ならぬ、青空受験……)

ツェイトが連れて来られたのは空き地だった。やや開けた場所に係員の方々がせっせと机や筆記用具やらを用意してツェイトの席を用意してくれている。

有難いのだが、実にシユールな光景だった。空き地の真ん中にぽつねんと置かれた木製机と、その上に用意されたテスト用紙と墨、筆一式。椅子はツェイトの座高の問題上、不要と見なされたので用意されていない。一体何の冗談かと思ってしまうが、これが現実だ。ツェイトの体格が生み出す弊害が、この光景を作り出したのだ。

係員の指示に大人しく従い、地面に座り込んで机の上に裏返しで置かれたテスト用紙を見る。ツェイトからすれば、とても小さな紙だ。机なんかは良く出来たミニチュアの様である。

小さな紙。だかが紙、されど紙。しかしその紙1枚で人生が変わる時もある。今もまさにその岐路に立たされているのだ。そう、ツェイトが昔、大学受験をした時の様に。

(……?)

そう言えば、自分は何処の高校にいて、何処の大学を受験したのだっただろうか。目の前のテスト用紙に懐かしさを感じつつも、肝心の内容が出てこない。

思い出そうとするが、そんな余裕は今は無い様だ。係員が試験の説明を始めた。ツェイトは説明を聴いている内に、思考をテストの方へと切り替えた。

まあ、今この場でそんな事は些細な事だ。今必要な事は、この試験に合格する事なのだから。

「それでは、始めてください」

ツェイトは、裏返しにされていたテストをめくり、筆をとった。

(上手くいったとは思ったが、果たして何点取れてるのか)

およそ一時間後、試験は取りあえず問題も無く終わった。出題された問題の数は50問、中にはしっかりと読まないと答えられない様なひっかけ問題も混ざっており、ツェイトも度々引っかけりそうになった。どれくらい点数が取れたのかは結果が発表されるまでのお楽しみだ。

ツェイトは今、セイラムを迎えに行く為別館の入り口前まで来ていた。此方も試験は終わったらしく、入口からゾロゾロと受験生達が出て来た。だが、セイラムが一向に出てこない。

まさか、何か起きたのかとツェイトは不安に駆られたが、取り越し苦労であった。

少し間をおいて、昆虫人女性の係員がセイラムの肩を抱きながら出て来た。何故か、セイラムは頭から腰にかけて大量の墨が付いている。

ツェイトが寄って来ると、女性職員がビクリと身構えてしまうが、ツェイトがセイラムに何があったのか心配そうに尋ねて来る姿を見て態度を軟化させた。

女性職員に訊いた所、セイラムは試験中までは凄まじい形相でテストの回答を行っていたのだが、時間になった途端、まるで糸の切れた人形のように崩れ落ちてしまったらしい。体に付いた墨は、その際ひっくり返した自分の墨入れを頭から被ってしまったからだ。セイラムが着ていた巫女服の様な着物は、元からそれなりに汚れてはいたのだが、墨を被った事で余計汚れてしまった。それなのにセイラムは、実に気持ちよさそうにすうすうと寝息を立てて寝ている。テストが終わった事で緊張の糸が切れ、爆睡してしまったのだろう。

ツェイトは女性職員から寝ているセイラムを引き取って抱き上げると、女性職員が苦笑しながら話しかけて来た。

「もう既に聞いていると思いますが、本日の試験の結果は今日の夕方頃に入り口近くに貼り出されます。多分、この娘はこんな状況です。聞いていなかったと思います。ですので、起きたら伝えてあげてくださいませんか？」

「分かりました、ありがとうございます」

ツェイトの言葉に満足した女性職員はツェイトに礼をし、その場を後にした。

支店の入り口へ戻ってみると、其処にはダンがツェイト達を待つてくれていた。早めに来ていたのか、暇を潰す様に片足でトントンとリズムカルに地面を叩いている。そんなダンの事を、周囲のクエスター達がチラチラと見ていた。

周りの視線を気にする事無く待っていたダンだが、ツェイト達に気付くと軽く手を振り、ツェイトの腕の中にいるセイラムを見て驚いて駆け寄って来た。

「おお！？　おい、セイラムちゃんどうしたんだよ？」

燃え尽きた様に眠るセイラムの姿にダンは慌てるが、ツェイトが訳を話すと納得半分、呆れ半分と言った面持ちでセイラムを見た。

「……そりゃそうだ、2 徹近くもやってりゃぶっ倒れちゃうよ。そんで、肝心の試験の方はどうよ？」

「一応合格ラインには入っている筈だ。たしか、6 割取れば合格だったよな？」

どの試験にもある事だが、今回のこの筆記試験にも合格基準点が設けられてある。それが6 割、100 点中60 点以上取っていれば合格だ。

「おうよ。だが、これが終わっても後の試験が続いてるから気を抜くなよ」

「やっぱりあるのか」

はあつとツェイトは溜息をついた。そう、このクエスター試験は筆記試験ではない。試験に受かる度に次の試験へと繰り上げられて行くのがこの試験の仕組みなのだ。

ツェイトも試験が終わった後、係員の説明でその話を聞いてしばし目が点になったものだ。

その事について教えてくれなかったヒグルマは、ツェイト達が受かると思って黙っていたのか、それともただ単に忘れていただけなのか。ダンに関してはどうやら前者の気があるが、面白半分と言うのも含まれているのかもしれない。ダンと言う男は、そういう奴なのだ。ツェイトは今更ながらにこのアリジゴク型ハイゼクターの性格を思い出した。

試験全体の流れは最初に筆記、次に実技と2種類の試験を受け、それらを全てクリアすれば晴れてクエスターとしての登録手続きをする事が出来る。昔は手続きだけで済んだのに、この様に面倒な試験形式を取り入れたとなると、当時はさぞかし多くのクエスター志望の者達からは反感を持たれたのではないのだろうか。ツェイトは思った。

だが、クエスター達自身の質が問題視されて来た事によって定められた制度ならば、当然の措置かも知れないと何処か冷めた思考でこの制度に納得してしまってもいた。

「いったん戻ろう。取りあえず、セイラムのこれを何とかしないと」

「だな。あーあーこんなに汚れちゃってまあ……」

ツェイトとダンは今だツェイトの腕の中で寝こけているセイラムに目を向ける。流石にこの娘を墨で汚れたままにしてはおけないと思ひ、一端長屋の方へ戻る事にした。

「じゃあ近所の皆にちよいと頼んでみるか」

「何だか世話になりっぱなしだな、本当にすまない」

「なあに、後で纏まった金が出来たら一杯奢ってくれりゃあいいさね」

にししと子供の様に笑うダンが、ツイイトの腰をバンバンと叩いた。互いの外骨格の性質上、鉄と岩がぶつかり合う様な音が辺りに響き、町の喧騒の中に紛れていった。

「所でツイイトよ、お前気付いているか？」

町の往来を人ごみの流れに合わせてのんびりと歩く最中、ダンがボソリと小さくツイイトに告げる。

「100m以上距離を保ってつけて来る奴がいる。数は……1人、なのか？」

首や視線を動かす事無く、ツイイトも小さく返事をした。

ツイイトも薄々ではあるが、この気配は察知していた。これは、ハイゼクター、ひいては高い実力を持つNFOプレイヤーだからこそ出来る芸当である。

NFOのプレイヤーには、モンスターとプレイヤーを区別するリーダーの様な機能が備わっている。その索敵範囲は各プレイヤーのステータスや種族等に左右されるのだが、ハイゼクターはタイプによって違いはあるものの、どれも比較的高い部類の索敵能力を備えている。

ゲームの時と現在の違う点を挙げるのならば、NFOでは視界に

ソナーの様なウィンドウが現れるのだが、この世界ではただ漠然と「何かがいる」程度にしか認識できない。故にまだこの世界に来て日の浅いツェイトは、少々この違いに戸惑っていた。

「心当たりは？」

「いや、そんなものは……………あつた」

思い出すのは先日のお出来事。シノンを攫おうとしていたゴロツキ達だ。ツェイトの目立ちやすい体で追跡者たちの方へと視線を向ければばれるかもしれないので姿を確認する事が出来ないが、恐らくはあの連中の関係者だろう。あるとするならば、あの時の連中がツェイト達に報復しようと企んでいるのかもしれない。

思い当たる節を伝えると、先程のひょうきんな笑いはなりを擧め、禍々しくにダンは嗤った。その笑みは、追跡者であるゴロツキと思しき者への嘲りか。

「馬鹿な野郎どもだな。連中、誰を相手にしているのか分からねえと見える」

「物騒な言い方をするもんじゃないぞ。それに此処はNFOじゃない、勝手に違いすぎる」

「……………相変わらず慎重な事で」

しかも今の自分にはセイラムがいる、プロムナードと一緒にいた時程の無茶は出来まい。口には出さなかったが、ツェイトはチラリとセイラムを見てそう心の中で呟いた。

「しかし何だ。何時までもケツに付かれているのは気に入らねえな。……ツェイト、次の曲がり角を曲がったら一端待つてる、野郎の面を拝んで来る」

大通りを外れ、住宅区域にさしかかった所でダンがツェイトにそう言った。

「無理するなよ」

「此処じゃアンタより2年先輩なんだぜ？ こっちの勝手は分かっているつもりだ」

ツェイト達はダンの先刻通り、住宅区域に入り、最初の曲がり角を曲がった所で足を止めた。その瞬間、ダンが地面の中へ、まるで水の中へもぐる様な勢いで沈んで行った。

ダンがいた場所には、先程までは無かった筈の大量の砂だけが残ってる。ツェイトの巨大が都合よくダンの身を隠していた為、今この場でダンが何をしていたのかを知る者は、ツェイト以外にはいなかった。

(む、動きを止めやがった)

一般市民に紛れながら、ツェイト達の動向を探っていた昆虫人の男は、ツェイトの巨体が動きを止めたので慌てて近場の建物の影に身を隠した。

男の身なりは町の往来に出ても特に目を引く様なものでもない、ごく一般的な町民の身なりをしていた。しかし、その顔だけはどこか野卑じみており、堅気の顔では無かった。

（まさか、つけていたのがばれたのか？）

額から一筋の冷や汗を垂らしながら、男はしくじったのではと焦り出す。

この男は、先日シノンを誘拐しようとしたゴロツキ達のリーダー格である壮年の男の命令を受けて、ツェイト達の動向を探っていた。つまり誘拐犯達の仲間なのだ。

こっそりと、物影から顔を出してツェイト達を見る。正確には、建物が邪魔をしているのでツェイトの角を見たい。例えば曲がり角を曲がるうともツェイトの青い巨体が、特にその長大な角が目印になるので、男にとって彼の後を追う事は容易いものと思っていた。

（こっちを振り向いている様子は無い。大丈夫、あのデカブツ達は俺の事に気付いちやいねえ）

男はツェイトが此方に気付いていないと思い込み、安堵のため息をついた。

身なりと呼吸を整え、ツェイトの追跡を再会しようと男は物影から何事も無かったように出ようとした。

しかし、それは叶わなかった。突如その男の背後から二本の腕が伸びて来たのだ。

何が起こったのか分からない男は驚愕するが、それに声を上げる

事も抵抗する事すら出来なかった。両の腕の一本が、男の口を塞いでいたのだ。

そして、再び物影の中へと何ものかの両腕に捕らえられ、男は引きずり込まれていった。

引きずり込まれ、強引に地面に押し倒された男は自分を捕まえた者が何者なのかを認識した途端、顔面から血の気が引いた。

全身を岩の様な外骨格で包まれ、頭からは二本のハサミ状の角を伸ばした昆虫種族の男。昨今売り出し中のクエスターの二人組の片割れだ。

左手で口を塞ぎ、馬乗りの姿勢で男を上から見下ろしている。その眼は自分達昆虫人と同じ黒い瞳なのに、影が掛かっているからか、まるで深く暗い穴を覗いている様なおぞましさを男は感じてしまった。

堅気の人間の筈なのに、何でこんな空気を垂れ流すのか。本当にこいつは世間で持て囃されているクエスターなのか？ そんな疑問が男の脳裏に浮かぶが、のんびりと思考に浸っている余裕は無かった。

幸い両の腕は自由。男はアリジゴクの異形を押しつけようとするが、腕力に差があり過ぎるのかまるで歯が立たない。

止むを得ず、懐に忍ばせていた短刀を抜いて脇腹に突き刺そうともした。しかし相手は怯みもせず、代わりに短刀が折れてしまった。これはこれで刃が立たない、男はされるがままにならざるを得なかった。

「ようアンタ。さっきから俺達をつけてたみてえだが、何か用かい？」

まるで髑る様な声色で、アリジゴクの異形は男に問いかけた。
くそ、ばれてやがる！ 男は十数秒前までの大丈夫と判断した己
に対して罵倒と呪詛の念を繰り返す頭の中で叫ぶが、そんな最中
にも自分を捕らえたアリジゴクの異形は再度問い掛けてくる。

「目的は何だ？ 話すならこの手を退けてやっても良い」

だが、とアリジゴクの亜人は今まで空いていた右腕を男の顔の真
横、触れるか触れないかギリギリの場所の地面に手を置いた。

その途端、アリジゴクの亜人の右腕が甲高い音を低く鳴らしなが
ら細かく震えだし、手を置いていた地面が砂に変わってしまった。
地面だけでは無い、そこにあつた石までもが砂と化したのだ。

「口を離れた途端叫ばんでくれよ？ もし兄さんが叫んじゃったら、
俺は吃驚して兄さんの顔面を細かくバラしちまうかもしれない」

そんな事になつちまったら、お互い気分は悪いだろう？ 俺は互
いが得になる様な話がしてえんだよ。

優しく耳元で紡がれる言葉は悪魔のささやきか。そう言われて男
は、今まで溜めこんでいたのかと言わんばかりに顔面からぶわっと
汗を噴き出し、体が震えだす。

仮に此处で叫んでしまつても、きっとその後は碌な目に遭わせて
はくれないだろう。この男が相手だと、そんな感じがする。あの目
を見てしまつてからは余計に、だ。

後に迎える己の末路が、鮮烈なまでに男の頭の中で明確なヴィジ
ョンとして浮かび上がって行く。

ああくそ、やっぱり引き時を間違えちまったかと、今更ながらに男は後悔の念で思考が埋めつくされた。

「もどつたぜえー」

ダンを待っていたツェイトの横の地面から、気だるい声を上げながらダンが砂と共に出て来た。場所は丁度最初にツェイトと別れた時と同じ地点だった。

お疲れ、と労いの言葉をかけた後、ツェイトは何か収穫はあったのかと訊ねた。

「おう、手前の命が掛かった途端ぺらぺらと話してくれたぜ」

腕を軽く回しながらダンは気がるに口にするが、その内容は物騒であった。自然とツェイトも神妙は口調になってしまった。

「まさか、拷問にでもかけたのか？」

「俺を見損なわないで欲しいな、ちゃんと平和的に解決したぞ？」

その割には危ない発言が聞こえたんだが、とまでは流石にツェイトは聞かなかった。これ以上話を伸ばすのも野暮つたいと感じたからだ。

ダンの証言が正しければ、その後追跡者は役人の所に『武家の息子を誘拐しようとした犯罪者』と言う理由で放り込んでおいたらし

い。しかし、証拠が無ければ意味が無いだらうとツイイトは不審に思ったのだが、意外な所に証拠があった。

男の懐には、分不相応な立派な財布が入っていたらしいのだ。しかもサイズは子供が持つような大きさだ。おまけにしっかりと武家の家紋入り。そこから導き出される結論は、それが先日シノンが無くしたと思われた財布だったのだ。

一端の町民が持てる訳の無い物を持っている事から役人達もその男を怪しみ、敢え無く御用となったと言う訳だ。大方、仲間の誘拐犯達から何らかの經由で男の手元に渡って来たのだろう。

誘拐犯の一味としての疑いが無くとも、武家の持ちモノを持っていた事から何らかの罪状を付けられて罰せられる筈だ。

妙な所で繋がっているんだな、とツイイトはこの奇縁に驚いた全く、人を何だと思つてやがるんだかねと愚痴るダンだが、気を取り直して先程の追跡者から聞きだした情報をツイイトに伝える。

「お前の言つた通り、シノンの坊主を誘拐しようとした連中の関係者だった。どうやらお前さん達二人を調べて仕返ししようつて腹積もりらしいぜ」

最悪、試験中に妨害が来る事も考えられるか、とツイイトはその眼光を険しく細めた。この試験に受かれば次は実技試験が控えているのだ、邪魔はされたくない。只でさえ、何時来るとも分からない兵士達の件もあるのにこれ以上手間が増えては面倒だ。

しかし、だからと言ってシノンを手助けしなければ良かったのかと言えばそれは無い。少なくとも、己の納得のいく選択をした上での結果ならば、そこに後悔は無かった。

数時間後、夕方になってツェイト達は自分達の試験の結果を知る。二人とも合格だった。

テストの結果はツェイトが76点、セイラムが78点と、僅差でセイラムの方が上だった事はツェイトにとって驚きだ。

……否、考えてみれば当然の結果だったのかもしれない。

ツェイトの発言の後、まるで憑り付かれた様に勉強に熱を入れ、寝る間も惜しんでいたのだ。その時のセイラムはどんな心境でやっていたのかは分からないが、これは執念の勝利と言っても良いのではないだろうか。

支店の入り口に張り出された合否の張り紙の前で、ある者は肩を落とし、ある者はガッツポーズをとっている。

そんな中、目の下に隈を残したセイラムも合格をした事を知るや否や、飛び跳ねてその喜びを表現していた。

(年上なのに、年下に負けた……)

この世界ではセイラムの方が大先輩なのだから歳の上下なぞ問題では無いのだが、大人の矜持と言うものがそれを許容しきれない。

しかし、ツェイトは目の前で大喜びをするセイラムにほんのちよっぴりの悔しさを覚えつつも、素直に最初の試験に合格した事を喜ぶ事にした。

その夜、昼間にツェイト達をつけていた男が、留置所から脱走した事が判明する。

それが意味するものは何か。ツェイト達がそれを知るのは、次の

日の事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7584u/>

紺碧の大甲虫

2011年12月13日00時42分発行